活動報告書

第30期日本インド学生会議

The 30th Japan-India Student Conference



国境を越えて働くということ

～日印の若者が描く共生とキャリア～

開催地：日本（東京・横浜・浜松）

本会議開催期間：2026年8月21日～8月31日

■ 後援団体

外務省
在日インド大使館
公益財団法人日印協会
独立行政法人国際協力機構
独立行政法人日本貿易振興機構
独立行政法人国際交流基金
日本政府観光局（JNTO）

■ 助成団体

公益財団法人電通育英会
公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人三菱UFJ国際財団

目次

第１章　巻頭挨拶　4

1. 日本側実行委員長　細井柚季　5
2. インド側実行委員長　Aditya Prasad　6
3. 駐日インド特命全権大使　Nagma Mohamed Mallick 様　7
4. 公益財団法人日印協会理事長　齋木昭隆 様　8
5. 日本語会話協会チーフパトロン　ニガム和子 先生　9
6. ABK-AOTS DOSOKAI 名誉会長　M.R. Ranganathan様　10
7. 日本インド学生会議顧問　広瀬公巳 先生　11
8. 日本インド学生会議創設者　長浜浩子 先生　13
9. 日本インド学生会議OB・OG会会長　鈴木佑輔 様　17
10. 日印合同同窓会　小谷菜奈子 様 / Tamalika Nag 様　18

第２章　団体について　20

1. 団体概要　21
2. 団体の沿革　23
3. 日本インド学生会議 規約　28
4. Students' Conference Dōsōkai (日印合同同窓会)の案内　31

第３章　年間活動報告　32

1. 実行委員一覧　33
   (1) 日本側実行委員会　33
   (2) インド側実行委員会　34
2. 各局の活動内容　35
   (1) 財務局　35
   (2) 国内渉外局　36
   (3) 国際渉外局　37
   (4) 企画広報局　38

3. 年間活動スケジュール 39

第４章　事前活動 40

1. 事前学習 41
（1）実行委員による勉強会 41
（2）外部講師による勉強会 41
1. 広瀬公巳先生 勉強会 42
2. 磯貝富夫氏 勉強会 43
3. 石田玲那氏 勉強会 44
2. 定例会 45
3. 日印交流会 45
4. インド側実行委員募集（デリー） 45
5. 他団体主催行事への参加・協力 46

第５章　本会議事業内容 47

1. 本会議の目的と背景 48
2. 本会議スケジュール 50
3. 本会議日録 51
4. 訪問報告 63
（1）駐日インド大使表敬訪問 63
（2）浴衣着付け体験 64
（3）横浜インドセンター 64
（4）公益財団法人 横浜市国際交流協会 65
（5）ナマステ江戸川区（西葛西、船堀） 66
（6）靖國神社 68
（7）慶應義塾大学 国際関係会 NEXT 69
（8）スズキ株式会社 70
（9）浜松市産業部 労働政策課 71
（10）浜松市国際交流協会（HICE） 73
5. 開会式・文化交流会 74
（1）開会式 74
（2）文化交流会 75

6. ホームビジット 76
7. 分科会 77
・職場環境分科会 77
・キャリア分科会 80
・コミュニティ分科会 82
・文化分科会 84
8. 修了証 86
9. 実行委員の感想・インド側メンバーからのメッセージ 87

第６章　おわりに 94

1. 謝辞 95
2. 日本側副実行委員長挨拶 95
3. 編集後記 96
4. 協力 98

第１章　巻頭挨拶

日本側実行委員長挨拶　細井柚季

本年度、日本インド学生会議は30期という大きな節目を迎えました。1996年の設立以来、30年にわたって本会議が続いてきたのは、これまで活動を築いてこられた先輩方、長年にわたりご支援くださっている先生方、そして多方面からご支援・ご協力を賜りました企業・団体、受け入れ先の皆様のお力があってこそだと思います。心より感謝申し上げます。

今回参加したのは、日本人8名、インド人13名の計21名です。決して大きな人数ではありませんが、毎年20名前後の学生が日本とインドを行き来し、約2週間を共に過ごし、生涯の友人をつくっていくこの積み重ねそのものが、これからの日印関係をつくっていくのだと思います。30期の学生も、いつか先輩方と同じように、それぞれの場所で日本とインドをつなぐ存在になっていくのかもしれません。その過程の一部に立ち会えたことを、光栄に思います。

本年度のテーマは、「国境を越えて働くということ」でした。このテーマには、国境を越えて人が移動し、一緒に働く機会がこれからさらに増える中で、日本とインドの若者自身が、どのような社会や働き方を描いていくのかを考えたいという思いを込めました。

30期では、議論を通じてこそ生まれる新しい発見を期待し、分科会のテーマを絞り、事前の文献調査や勉強会も取り入れながら準備を進めました。また、それぞれの分科会で考えたことを実際の現場と結びつけるため、例年訪問させていただいている場所に加えて、テーマに関連する新たな訪問先も多数設けました。また、より多様な価値観を取り入れるため、デリーから参加する学生の募集・選抜をJISC側で担当するという新しい試みも行いました。

また、私自身インドでの生活経験があることから、日本開催を準備する段階から、ベジタリアンへの対応、言語の壁、時間通りに物事が進まないことなどの課題が起こることはある程度想定していました。実際こうした違いに対応しながら準備を進める必要がありましたが、関係者の皆様に支えていただき、大きな問題なく11日間の本会議を終えることができたことに、今、何よりほっとしています。

また、来日前から日本でやってみたいことをたくさん書き出してくれていたインド人学生が、実際に日本で一つひとつの経験を楽しんでいる姿は、とても印象に残っています。Welcome　Suicaを買うことを喜び、御朱印帳を集め、江ノ電に乗り、ガチャガチャを回す。『君の名は。』に登場する場所を訪れたときには、映画で見ていた景色を実際に歩けることに胸を躍らせていました。その姿を見ていると、私自身も普段暮らしている日本を少し違った角度から見ることができました。

第30期で出会った21名の学生が、この先それぞれの場所で挑戦していく中で、またどこかで再会できたら嬉しく思いますし、必ずまた出会えると信じています。そして、その一人ひとりの歩みが、これからの日印関係をつくる力になっていくことを願っています。

これまでお世話になりました皆様、改めまして、本当にありがとうございました。

日本インド学生会議 第30期実行委員長

細井柚季

インド側実行委員挨拶　Aditya Prasad

I want to congratulate everyone who has been a part of the 30th JISC for the successful completion of the conference. During the course of the 11 days, we explored different parts of Tokyo and Hamamatsu through which we learned invaluable lessons about the profound dedication, punctuality, and precision that define Japanese work culture, seamlessly blending into the daily rhythms of Japanese life.

Beyond our formal academic and conference work, our time was deeply enriched by the tapestry of Japanese culture. We had the incredible opportunity to savor authentic Japanese cuisine and participate in local festivals, which enlightened us about the core values of respect, tradition, and communal harmony embedded within Japanese society. More importantly, amidst the busy schedules and cross-cultural exchanges, we forged profound connections and made good friends, creating cherished memories that will last a lifetime.

Special thanks to Yuzuki San and her team for all the preparations and management they did for the Indian team. Not once did we face any major issues during the 11 days which made the whole conference smooth and a memorable experience for all of us. There were however some minor challenges which were tackled through proactive, transparent communication between the two delegates which turned potential obstacles into moments of collaborative growth and mutual understanding. I would also like to extend a heartfelt gratitude to everyone who hosted the Indian members at their home during the home visits. Everyone from Team India felt welcomed and they all learnt a lot about the daily lives in a Japanese household. Personally, the warmth and generosity I received at Yuka San's home made me feel as though I was meeting an extension of my own family, miles away from home in a foreign country. It was a wonderful and memorable experience.

As the President of the Indian Team, I recognize that an endeavor of this magnitude requires immense backing. Therefore, I extend my profound thanks to all our generous sponsors, the Dosokai, the esteemed members of NKKS, and every individual who directly or indirectly contributed to the resounding success of this conference. Your unwavering support built the bridge we walked across. I wish the absolute best to the students who will participate in the upcoming editions of the conference. As I sign off from this unforgettable journey, my parting advice to the next generations of presidents is simple yet vital: always prioritize the goodwill and well-being of everyone in your team. Lead with empathy, and in turn, the team will always look out for you.

India-Japan Student Conference 30th President
Aditya Prasad

駐日インド共和国特命全権大使　Nagma Mohamed Mallick 様

भारतीय राजदूत, टोक्यो
Ambassador of India
Tokyo

सत्यमेव जयते

2-2-11, Kudan Minami
Chiyoda-ku
Tokyo 102 0074



MESSAGE

It is with pleasure that I extend my warm greetings and best wishes to the participants and organisers of the 30th Japan-India Students' Conference, held from 20 to 31 August 2026.

The enduring friendship between India and Japan is enriched by the strong bonds between our young people, and platforms such as the Japan-India Students' Conference play a valuable role in fostering greater understanding, dialogue and mutual appreciation. I was pleased to have the opportunity to meet the student participants during their visit to the Embassy of India in Japan on 21 August 2026 and to hear about their experiences and perspectives. I commend the organisers and participants for their commitment to sustaining this longstanding initiative of academic and cultural exchange.

I am confident that the Japan-India Students' Conference will continue to inspire successive generations of students and serve as a meaningful bridge between our two countries. I wish the Conference every success in its future editions and hope that its participants will carry forward the spirit of friendship, cooperation and shared learning that lies at the heart of India-Japan relations.

(Nagma M. Mallick)

Tokyo
October 5, 2026

Tel. : +81-3-3265-5036; Fax : +81-3-3262-2301; E-mail : amb.tokyo@mea.gov.in

公益財団法人日印協会理事長　齋木昭隆 様

この度、第30期日本インド学生会議の活動が満了を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

当協会は、明治36年（1903年）の創設以来、一貫して日印両国の友好関係の深化に取り組んでまいりました。貴会議が第30期という大きな節目を迎え、これほど長きにわたり両国の学生による交流と「対話」を途切れることなく継続されてきたことは、歴代の学生の皆さんと関係者の方々のたゆまぬ努力の賜物であり、深く敬意を表します。近年、日印両国の間では人的交流の拡大が協力の重要な柱と位置付けられ、日本で学び、働き、暮らすインドの方々も着実に増えております。こうした中で、第30期の皆さんが「国境を越えて働くということ～日印の若者が描く共生とキャリア～」をテーマに掲げられたことは、誠に時宜を得たものと存じます。

皆さんは、駐日インド大使への表敬訪問をはじめ、スズキ株式会社や浜松市役所、横浜インドセンター、西葛西のインド人コミュニティなどを訪れ、現場で働く方々や地域で支える方々の生の声に触れながら、職場環境、キャリア、地域コミュニティ、文化という多角的な視点から議論を重ねてこられました。外国人材が安心して働き、暮らし続けるためには、受け入れる側も環境を整え、互いの違いを理解し尊重し合うことが欠かせないという皆さんの気づきは、これからの日印関係、そして日本社会そのものにとっても大切な示唆を含むものです。

また、11日間を共に過ごす中で、言葉や文化、考え方の違いに戸惑いながらも互いの意見に耳を傾け、協力し合う経験を重ねられたこと、そして日本側の皆さんにとっては、当たり前と思っていた自国の社会や文化を見つめ直す機会にもなったと伺いました。最終日に「これからも友達として連絡を取り合っていこう」と言葉を交わされたように、一人ひとりの間に結ばれた友情と信頼こそが、両国関係を足元から支える何よりの礎です。

この尊い経験を糧に、皆さんが将来、国境を越えて活躍し、日印両国を結ぶ力強い架け橋となられることを心より期待しております。

当協会は、会議の創設以来一貫して参りましたように、引き続き貴会議の活動を支援してまいる所存です。

末筆ながら、第30期日本インド学生会議の成功を改めてお祝い申し上げますとともに、皆様の益々のご活躍とご発展を祈念いたします。

公益財団法人日印協会理事長
齋木昭隆

日本語会話協会チーフパトロン　ニガム和子 先生

第30期の日本インド学生会議が成功裏に終了したことを大変嬉しく存じます。日本側のチームの皆さんは毎年のことながら年間計画、予算、メンバー確保などの下準備をしながら会議テーマの勉強をし、インド側の受け入れ準備をされ、本会議に臨まれたのは実に大変だったとお察しします。それも日本側は8名のメンバーでインド側13名のお世話をされました。コルカタ側のチームもミーティングにミーティングを重ね念入りな準備態勢で訪日に臨みました。

石川義久コルカタ総領事様には本会議出発に先立ち、参加学生の皆を公邸にご招待し歓送会を催して下さり思い出に残る一晩を作って下さいました。心よりお礼を申し上げます。

日本インド学生会議はコロナの時にはオンライン形式の会議を2年開きましたがそれ以外の時は1年も休むことなく順調に会議を重ねてこられました。今回の30期は28期東京開催29期インド開催に引き続き、交互の都市に交互の国で開催という新しい形をとることになり、今年も東京で開催されました。一年間の準備期間を加えると31年という長きにわたり続けてきたコルカタ側にとって参加学生が日本に行くチャンスが増えることになるので大変喜ばしいことであります。日印学生会議で身につけたことがこれからの皆様の将来に必ず何処かで役に立つことでしょう。創設時のインドと今のインドは想像がつかないほど異なったものです。昔の参加者にお会いできるのは本当にうれしいことですので是非新しいインドを見にお出でください。

この会議が今までスムーズに開催されてこられた裏には日本語会話協会ソサエティの役員と印日学生会議同窓会のメンバーの強い協力があったことには間違いありません。

今までこの会議を支えてきてくださった方々にこれから先も温かく見守っていただけるようお願いいたします。

日本語会話協会ソサエティ
チーフパトロン
ニガム和子

ABK-AOTS DOSOKAI 名誉会長　M.R.Ranganathan 様

ABK AOTS DOSOKAI TAMILNADU CENTER

Every year, JISC makes people to people connections between our two nations a truly memorable experience. We extend our heartfelt thanks to everyone involved in the 30th Japan-India Student Conference (JISC) for building a bridge of hearts between India and Japan.

The dedicated efforts of youth on both sides complement the diplomatic ties between India and Japan, celebrating the rich heritage and deep-rooted cultures of our two great nations. For the Indian students, the JISC program turned a lifelong admiration for Japan into reality.

In this year JISC, the Indian students visited Japan to share their thoughts and experiences around the theme, 'Working Beyond Borders: Japanese and Indian Youth Perspectives on Coexistence and Careers', a dialogue that is both highly relevant today and truly the need of the hour. In an increasingly interconnected world, equipping young leaders with a shared vision for global career development and mutual understanding is essential for building a sustainable future together.

We thank Nagahama sensei and all the JISC teams, especially the JISC 30 team, for your contribution and dedication to a significant cause of nation-building.

Thank you.



M.R.Ranganathan
Chairman Emeritus
ABK AOTS DOSOKAI
Tamil Nadu Center

日本インド学生会議顧問　広瀬公巳 先生

今回のテーマは、働く場所としての人の交流。「水」「都市」などグローバルなテーマを扱っていたこれまでより身近で「現実的」なものになった。日本とインドの交流は「遠い国が理解し合う」という段階ではない。生活や経済に結びついた互いの未来と直結する今日、明日の関係に変わってきている。その大きな転換点の空気を学生自身が敏感に感じとり自覚して行動に移していることは敬服に値する。私たちは長い間、「どこで働くか」を会社や国、都市の問題として考えてきたが、これからの時代に本当に問われるのは、「人がどこにいて、誰と出会い、何を生み出すのか」ということだ。

日本とインドの間では、人の移動と交流が大きく動き始めている。日本政府は2025年、5年間で、インドから日本への5万人の熟練人材・将来性のある人材を含め、日印双方向で50万人以上の人材交流を目指す方針を打ち出した。そこには、IT、研究、教育、製造などの分野だけでなく、学生の交流や大学間交流、日本語教育といった、若い世代への投資も含まれる。

一人ひとりが、相手の言葉に耳を傾け、「あなたはどう考えるのですか」と問い、「私はこう考えます」と語り合うこと。日本とインドは、文化も歴史も社会の仕組みも大きく異なる。だからこそ、同じ答えを持つ必要はない。違いを知ることによって、自分たちが当然だと思っていた「働くこと」「生きること」「幸せになること」の意味を問い直すことができる。働く場所は、単なる住所ではない。人との出会いがあり、価値観との出会いがあり、自分自身を変える分岐点でもある。そこに必要なのは仲間だ。日本とインドを行き来しながら築く友情や信頼こそがこれからの両国関係を支える。

30期のメンバーは、東京のオリンピックセンターで寝泊まりし、フィールドワークで横浜と浜松を訪問した。浜松ではスズキの本社も訪れた。日印関係をビジネスで結ぶために幾多の試練を乗り越えてきた企業を、若い世代の日印の学生が行くことの意義は大きい。私は日印協会の岸田文雄新会長の就任レセプションに来席されていたスズキの鈴木俊宏社長に学生のメンバーを紹介した。大企業の経営トップと直接話すことができた学生たちも積極的に頑張って自分たちの活動を報告していた。一期一会で日印交流の歴史が刻まれていく。その現場を見るのも嬉しい。

浜松の市役所では、地元の企業と外国人との職場のマッチングを行っている現場の説明を受けた。働き方を考えるために、インドのカレー屋さんを訪問したグループもある。インド人との付き合いをしながら、自分自身の視野を広め、日本を再発見し、視野を広げる。会議を準備する段階で日本人のメンバー間でも多様な価値観に触れ、互いを尊敬しながら成長していくことができたのではないだろうか。

開会式ではインド側の代表がインドの伝統的な舞踊を披露した。「インド学生は日本のことが大好きで、みんなエネルギッシュで一人ひとりに思い出がある」というのがインド側のメンバーについての日本の参加学生の印象だ。会議で議論を真剣に行い、夜になると若者同士の交流に花が咲いたようだ。インド側の学生は、日本の自動販売機で売られている冷たい紅茶が「ありえない」と感じたようで、素朴な文化の違いを改めて実感した一幕もあった。

参加した学生に瑞々しい体験話を聞くのが毎回楽しみだ。若者たちは限られた時間の中で五感を使って現場を深く感じ取ってくる。互いの違いを越えて、新しい働き方、新しい生き方、そして新しい日印関係を考える。今日出会った友人を、会議が終わった後も大切にしてほしいと思う。10年後、20年後、「あのときインドの友人と話したことが、今の自分につながっている」と思える日が必ず来る。

第30期の日本インド学生会議も大きな学びの中で無事、成功したことを祝したいと思う。この場を借りて各方面で支えていただいた皆様方のご厚意とご協力に感謝申し上げたい。微力ではあるが引き続き未来を切り開く学生さんたちの活動を見守りたいと思う。

日本インド学生会議顧問
近畿大学教授
広瀬公巳

日本インド学生会議創設者　長浜浩子 先生

「JISC・IJSCとの30年を歩んで」

30期JISCメンバーの皆さま、ホスト側としての活動をありがとうございました。

日本インド学生会議は30年という長い歴史を重ねてまいりました。日本とインドの間で、このように長く続いている学生の活動は他にはありません。コルカタでの第1回開催開会式のことは、今もはっきりと覚えています。スタート当時は何もかもが初めてのことで、まだ1人1台パソコンを持っているような環境ではありませんでした。30期のメンバーには想像できないことだと思います。

当時のインドと日本の間での連絡手段は、FAX・国際郵便・国際電話などで、利用料金も高額であったばかりでなく時間・日数も多く要しました。そのような事情により、当然ながら連絡の回数も最小限でありましたが、学生間の連絡手段は不自由ながらも開催の日を目指して週1回オリンピックセンターを利用して対面ミーティングで、チームワークも育みながら準備を進めておりました。ふりかえれば、人と人とが顔を合わせて話し合い、手書きやワープロ使用で作業した頃の時間をかけての準備にありましては、今は便利さの中で失ってしまった大切なものが中心に存在していたように思えます。

第1回開催より在コルカタ日本国総領事館よりのサポートをいただけましたのは、平素よりニガム和子先生が日本語教育や文化活動に尽力されていたことが大きな力となっていたことによると理解しております。現在もニガム先生は日本語会話協会(NKKS)の活動の中心的存在となり、印日文化祭の継続をはじめ、生け花の教授・日本語教師としても心の通う活躍されており、何より特筆すべきは先生の素晴らしいお人柄です。JISC・IJSCの活動は各期学生主体ではありますが、多くの方からお力をいただきながらの30年間でした。30年という年月には、多くの出会いと共に悲しい別れもありました。もちろん第1期から現在も続いているご縁もあり、私にとりまして何よりの宝物となっています。まだまだ教えをいただきたくおりました方が天に召されるということもありましたが、私の記憶の中には今も生き続けております。

1期から30期までメンバーとして参加した皆さまには、JISC・IJSCの過去の歴史を語り続けられるOBOGでいてほしいと思います。そして、JISCの活動は参加した期だけで活動が可能になっていたのではないことを改めてご理解いただき、これより先の活動の継続が安定したかたちで可能となるようご協力をいただければ幸いです。この活動は、国を超えての対話から得た大切なものを、近い将来の両国関係に、世界に活かしていただくための人育ての活動だと私は思っています。この目的を大切にしての継続であることを願っております。

創設当初3名の創設者の間では、コルカタ・デリー・ムンバイ・チェンナイ4都市での開催を目指そうと構想を描いておりました。私は、そのことを目標に2つ目の開催都市を、かねてより知人がおりますデリーにしてはとJISCに提案いたしました。そして、4期の学生メンバーと共にコルカタに出向く前のデリー訪問でMOUを交わし、5期よりデリー開催が開始となりました。この時に大変お世話になりましたのが、知人であるお二方JNUのヴァルマ教授と長きに亘り歴代インド首相の日本語通訳も務めていらしたアショク・チャウラ先生です。主に活動の現場をお世話下さったのはチャウラ先生で、JNU・デリー大学の日本語や日本文学の先生方からもご協力をいただいておりました。しかし、ヴァルマ教授が逝去されたことで、その後はMOSAIや印日友好協会などにご協力いただいていましたが、JNUの先生数名に引き継がれることとなり、16期までお世話をいただいていた数年間がありました。諸事情によりデリーでの本

会議開催を断念した後は、チャウラ先生との勉強会のみを現在も継続しております。インド外務省日本担当顧問として勤務されていらした期間は、外務省の執務室にお招きいただいての勉強会でした。

更に、3つ目の開催都市としてご縁をいただいたのがチェンナイです。ABK AOTS DOSOKAIのランガナタン氏・スリラム氏と初めてお会いしたのはお二方がそろって来日中の新宿でした。JISCのメンバー2人も同席の5人での初顔合わせから今日に至っています。同じ年の8月、13期からの開催となりました。コルカタのように開催期間中ほとんどの時間をインドの学生メンバーと行動を共にするということにはなりませんが、様々な年齢・職業の方とのふれ合いの機会の中で学ぶことも様々で、貴重な時間となっています。

大学生との交流は大学を訪問しての講義室内のこととなりまして、企業や公的機関を訪問しての学びの機会、南インドならではの観光も計画いただいております。愛称「ランガさん」は、多くの皆様に日本の素晴らしさを意欲的に紹介しており、日本で発行された切手のコレクションの数々には驚かされました。在チェンナイ日本国総領事館との日本文化事業も数多く協力を続けておられます。(他にも、私は同行していませんが、プーネでの開催が2年（2回）ありました。)

JISCの活動に参加したOBOGが卒業後どのような活躍をしているのかというご質問をいただくことがあり、答えにはインドに関わる仕事をイメージされる方が多いようですが、インド関連も含め多方面での活躍が報告されています。例として挙げさせていただきますと、新聞記者、外務省、国連高等弁務官事務所、各種企業、大学教授、裁判官、日本語教師、JICA、医師、日本政府観光局、アーティストなど、様々です。

インドは1つにまとめるには広すぎる国ですので、1つのJISCの中にインド全土の参加を組織するのは、とても無理なことです。JISCに参加したOBOGの手により、いくつかの都市を組み合わせ複数のJISC・IJSCを誕生させ、数年に1度それぞれのJISC・IJSCの現役学生とOBOGがインドの1都市で大集合するのは可能でしょうか。30期には最初の一歩を踏み出せそうなメンバーがおります。実現には、大変な覚悟と年月をかけての準備・根気・情熱・信頼できる協力者、そして資金が必要であることは申すまでもありません。創設には、立ち上げの準備を整えることよりも維持することに様々な難しさがあることは確かです。

対話のテーマも、地球人として心豊かに生きられる環境について考え、実現に向けて私たちは何をしたらよいのかという意見交換ができればと思います。大きなインドと小さな日本から、世界に向けての提案もできれば素晴らしいことです。国を問わず食糧は気象状況によって毎年収穫量が変化することから、大収穫の年には新たに開発された冷蔵保存システムにより出荷量を調整して、自国ばかりではなく時には国を超えて分け合うなど・・・まだ広がりの少ない1例ではありますが、そのようなことにも結びつくなら、ビジネスの創出ともなり、豊かさにつながるのではと考えられます。農業を魅力ある仕事としていくことが大切なことは、誰もが分かっていることと思います。作業の改善には様々な知恵と新たに開発される機器が不可欠です。得意分野で広くお役に立ちながら楽しく仕事をして収入が得られるという仕事探しの中に、農業が誇りをもって挙げられるようになることを期待したくおります。

JISCの活動の全ては、コルカタから始まりました。
デリーには数多くの日印交流の機会があることに比べ、その機会が少なかったコルカタでスタートできたことが継続につながったと、何代か前の総領事がおっしゃっておいででした。学生によるJISCの日印交流は、そのような事情も手伝って、私たち創設者3人の提案は前向きとしていただけたのかもしれませ

ん。毎期、総領事公邸にお招きいただけましたことは、学生たちにとりまして大変光栄な忘れられない記憶となっているはずです。心より感謝するばかりです。第1期ではマザーテレサとの面会が叶いました。メンバーの中より、お会いすることに何か意味があるのかという声が聞こえたことに驚いたことも記憶にあります。今日では、マザーテレサを知らないという学生にがっかりしたこともあり、30年という年月は、やはり長いのだと改めて感じています。すでに他界してしまいました創設者の1人石津達也が、マザーテレサの心を大切にするJISCの活動にしてほしいと願っておりましたことを、改めまして伝えさせていただきます。

この機会に歴代の駐インド日本国大使閣下、駐コルカタ日本国総領事、駐チェンナイ日本国総領事、そして歴代JISCの顧問をお引き受け下さった先生方、ご縁をいただきました全ての皆様に心よりお礼申し上げます。

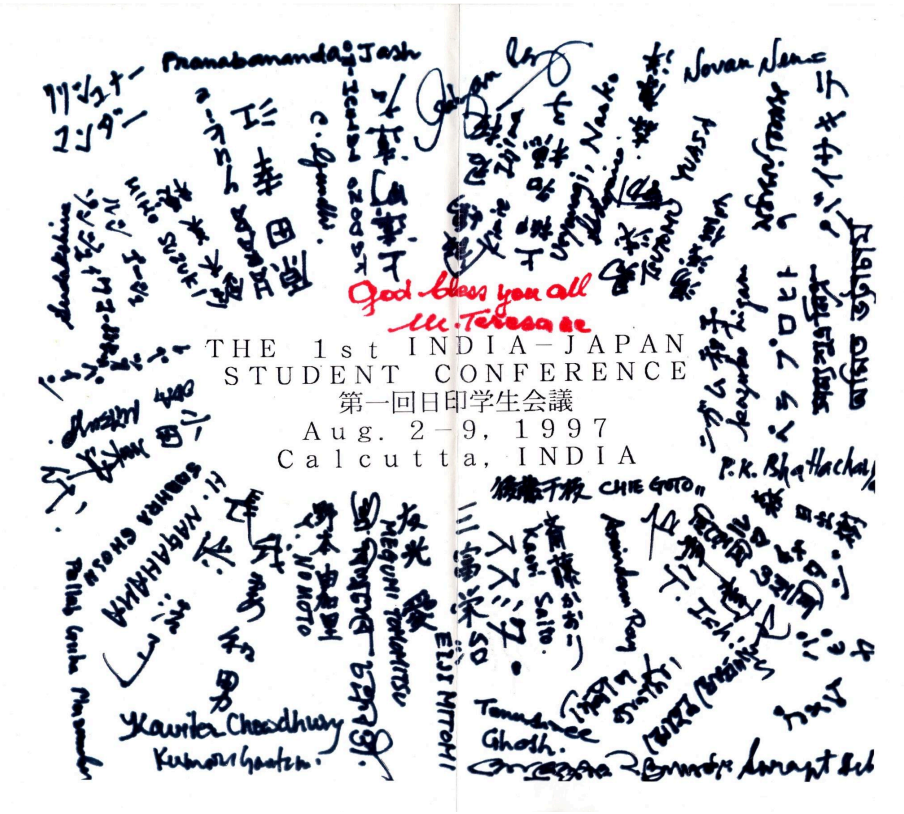
来年は、日本インド国交樹立75周年となる年です。私が参加した最初の周年記念は40周年の年でしたので、もう35年前のこととなりました。インドから日本開催に参加した学生の皆さまにおかれては、日本で体験したことが大切な宝物となっているなら幸いです。その宝物が再びの来日につながることを願い、再会となりますことをお待ちしております。

30年の間にJISC・IJSCに参加いただいた各期メンバーの皆様に心よりお礼申し上げます。

日本インド学生会議 創設者

長浜 浩子


ijsc
FIRST INDIA JAPAN STUDENTS' CONFERENCE
God bless you
Mc. Teresa mc
2nd - 9th August, 1997
India
Organised
Nihongo Kaiw
The fruit of SILENCE is Prayer
The fruit of PRAYER is Faith
The fruit of FAITH is Love
The fruit of LOVE is Service
The fruit of SERVICE is Peace
Mother Teresa
PRINTED AS A GIFT TO THE MISSIONARIES OF CHARITY
BY THE KNIGHTS OF COLUMBUS


God bless you all
Mc. Teresa mc
THE 1st INDIA-JAPAN
STUDENT CONFERENCE
第一回日印学生会議
Aug. 2-9, 1997
Calcutta, INDIA

日本インド学生会議OB・OG会会長　鈴木佑輔様

「今日も暑いね」昨年は何度もこの言葉を聞いたり、口にした覚えがあります。
「今日も雨か」と空を眺める日々が今年はありました。
東京は8月末から37日間連続雨が降り、線状降水帯が多くの場所で発生し河川の氾濫が起こりました。
同じ頃、8月27日インドの隣国のネパールで、大規模な土石流が発生しました。家が、人が、街が、一瞬にして、飲み込まれ、どうなったかわからなくなるシーンに言葉がでませんでした。

地球の気候がこれまで経験したものと違ってきているように感じます。
「地球の気候の変化をどのように考え、どういう行動に移していくべきか」を、国を越え、地球レベルで話し、考え、行動していくことの必要性を感じ、学生の皆さんにも多くの意見交換を期待するところでありますが、学生会議を見守る立場としては、この気候の変化をリスクとして心配になります。

日本インド学生会議は、日本かインドのどちらかの国で会って話すことを大切にしています。直接交流し、生活や意見に触れることも大切ですが、現地の土地や空気に触れることで、よりその意見の背景を感じ、理解することにつながることになったとも感じています。
私は、学生の頃は若さもあり、自分の健康に不安になることはなく、健康や命へのリスクのことを考えることは日常ではありませんでした。（委員長として、皆を率いる立場を自覚し、出発が近づいた時に、メンバーが全員笑顔で健康に帰って来れることの責任を自覚し、緊張が高まった覚えがありますが）
子どもができ守るべき弱い存在が日々近くにいたり、自分の病気に気づいたりする中で、日本インド学生会議に参加する学生の皆さんが、笑顔で健康で自宅に帰ることができるか、できたか、がとても気になるようになってきました。

“学生の皆さんには多くのチャレンジをして、多くの学びをしてほしい”そう思う中で、歳を重ね、日本インド学生会議を支える大人の皆さんが気にされていたことにも気づけてきたように思います。
命があって、健康であって、できる。ということ。滞在には命が関わっているということ。
学生の気づかないところで細かな配慮や心配をしてくださっている多くの皆さまに、今年も日本インド学生会議が無事に開催でき、全員が無事に笑顔で家に帰れたことの報告と感謝をこの報告書を通じてできたらと思っています。
今後も、日本インド学生会議に、多くの期待と心配を込めたご支援を、変わらずいただけること、お願いいたします。

日本インド学生会議OB・OG会会長
鈴木佑輔（5期OB）

日印合同同窓会 小谷菜奈子 様 / Tamalika Nag 様

第30期日本インド学生会議の活動報告書の刊行にあたり、前期の副委員長、そしてOGの一人として、心よりお祝い申し上げます。また、長浜先生をはじめ、本活動を支えてくださった関係者の皆さまに、深く感謝申し上げます。

今年度、日本インド学生会議は第30期という節目を迎えました。インドを訪れた経験のあるメンバーも、今回の活動を通じて初めてインドと深く関わるメンバーも、それぞれの経験や関心を持ち寄り、一丸となって会議に取り組まれたことを、大変嬉しく思います。

私は第29期副委員長として、第30期の皆さんの選考面接にも携わりました。あのとき、それぞれの言葉で語ってくださった参加への思いや挑戦への意欲を、今も覚えています。本会議で再会した皆さんは、その熱意はそのままに、とても頼もしくなっていました。自ら考え、仲間と協力しながら会議をつくる姿に、準備期間を通じて重ねてこられた努力と成長を感じました。今年度は、デリーからの学生の受け入れや浜松への訪問など、新たな取り組みも多くありました。これまでの歩みを受け継ぎながら、自分たちの手で新しい可能性を広げていく。その挑戦を形にするまでには、さまざまな工夫や調整に加え、悩むこともあったかと思います。節目の年に、次の世代へとつながる一歩を踏み出された皆さんに、心から敬意を表します。

私は今回、開会式と閉会式、そして西葛西でのフィールドワークを見学させていただきました。なかでも心に残っているのは、閉会式で、日本側の学生がサプライズで用意した振り返りのムービーが上映されたときの光景です。映像を見つめる日印両国の実行委員の皆さんの表情、こぼれる涙、そして互いに交わす抱擁。皆さんと過ごした時間は限られていましたが、その姿から、本会議の日々がどれほど濃く、かけがえのない時間であったかが伝わってきました。その光景を前に、昨年度、私自身が仲間と会議をつくった日々を思い返しました。思うように伝わらないもどかしさも、誰かの言葉や行動に助けられる喜びも、共に取り組む中で生まれるものです。皆さんにも、皆さんにしか分からない苦労や、それを一緒に乗り越えた瞬間があったのだと思います。あの涙や抱擁には、そうした日々の積み重ねが表れているように感じました。

今年度のテーマである「国境を越えて働くということ」は、これから皆さんがそれぞれの道を歩む中でも、折に触れて向き合う問いになるでしょう。異なる背景を持つ相手の言葉に耳を傾け、自分の思いも伝えながら、共に進む道を探していく。学生会議でのそうした経験は、これから働き、暮らしていくさまざまな場所で、皆さんを支えてくれるはずです。

第30期の皆さん、本当にお疲れさまでした。そして、心に残る時間をご一緒させていただき、ありがとうございました。日本インド学生会議が、これからも学生の挑戦と出会いを育む場であり続けることを願っております。そして皆さんが、ここで生まれたつながりを大切にしながら、それぞれの道を歩んでいかれることを、心より応援しています。

第29期日本インド学生会議 副実行委員長
小谷 菜奈子

A very heartfelt congratulations to all the members on the successful completion of the 30th edition of the India Japan Students' Conference in Tokyo, Japan!

Bringing together students from two different countries, cultures, and backgrounds to organise and participate in an international conference is no small feat. From months of planning and preparation to the actual execution of the conference, every step demanded dedication, perseverance, adaptability, and, above all, teamwork.

For the India side members, carrying an idea from its initial stages in India all the way to Japan was a remarkable journey, filled with countless hours of preparation, coordination, and overcoming challenges. Equally, the Japan side members have also played an integral role in by being the warm hosts and ensuring that the conference became a meaningful and memorable experience for everyone involved. We are very sure that the spirit of Omotenashi has really touched the India side members. The collective efforts of both sides made this milestone edition truly special.

We, here at the Students' Conference Dōsōkai, are delighted to see the 30th Students' Conference come to fruition and are immensely proud of everything you have accomplished together. Beyond the successful completion of the conference, we hope this experience has strengthened the bond between Indian and Japanese students, fostered meaningful friendships, encouraged cultural understanding, and offered new perspectives that will remain with you for years to come.

May the connections you have built, the experiences you have shared, and the memories you have created continue to inspire you and contribute to the enduring friendship between India and Japan.

Congratulations once again to everyone on making the 30th India Japan Students' Conference a success!

お疲れ様でした！

Student's Conference Dōsōkai
Tamalika Nag

第２章　団体について

1. 団体概要

【団体名称】

日本語名：日本インド学生会議

英語名：Japan-India Student Conference

【設立年月】

1996年8月

【創設者】

石津達也、長浜浩子、後藤千枝

【顧問】

広瀬公巳 (元 NHK ニューデリー支局長・現近畿大学国際学部教授 2021 年度～顧問就任)

【主催】

各期実行委員会（2026年度：第30期日本インド学生会議）

【組織構成】

日本インド学生会議は日本側の学生（大学、短期大学、専門学校）、インド側学生、顧問、創設者から組織されている。毎年、日本側より10名前後の学生を募り、インド側からはコルカタ、チェンナイ、デリー等の都市から学生を募る。インド開催の際は日本人学生がインドへ渡り、日本開催の際はインド人学生が日本へ渡る。

【活動目的】

この団体は学生という立場を生かした「対話」を通じての日本・インド双方の相互理解を目的としている。日本・インド両国の学生による活発なコミュニケーションを通じて得た成果を社会に還元し、2ヶ国のさらなる友好関係を進展させることに主眼を置いている。また草の根レベルからの相互理解、世界の諸問題への理解、そして解決に向けて将来その国を担っていく学生同士の討論を中心に活動や提言を行っている。その活動の一貫として、本会議後の報告会開催、報告書作成、年間を通じて広報を行っている。これに加え、本会議外の活動、他の国際交流団体、関係機関や関係者との情報交換や啓発イベントを通じ、常に社会に開かれた学生会議として存在し続けている。

【活動内容】

日本インド学生会議は、毎年両国の学生がインドか日本どちらかに集まって2週間の交流を行う「本会議」を主軸に日印青少年の対話による相互理解を深め、成果を社会に還元する目的の下、活動を行っている。本会議の企画、準備、運営、開催、および事業後の報告活動、その他年間を通して行う

活動は全て学生が主体となり行っている。そのため主催・運営・企画は期（年度）ごとの実行委員会となる。また他の学生団体や関係機関、関係者と積極的な意見交換の場を設け、社会に開かれた団体であることを目指している。

-主な内容-

本会議 (3週間) / 定例会 (週1回) /本会議の企画、準備、運営 / 実行委員の募集 / 活動周知のための広報活動 / 助成、後援申請 / インド側学生との本会議に向けた打ち合わせ / インド学生との交流会 / 本会議に向けた事前勉強会 / 本会議の分科会別の勉強会 / 分科会別のプレゼンテーションの準備 / 成果報告会の準備、開催 / 他学生会議との交流、意見交換会 / 関係機関、関係者との意見交換会 / 報告書の企画、発行 / 活動報告会実施 / 事業収支決算

【発行物】

年間活動報告書

【広報活動】

公式ホームページ / Instagram / Facebook

2. 団体の沿革

沿革 (2026年10月現在)

1996年8月 日本インド学生会議創設事務所発足 (石津達也、長浜浩子、後藤千枝)

第 1 期

1996年 10月 第 1 期日本インド学生会議実行委員会発足
11月 臼田雅之氏 (東海大学文学部教授) 顧問就任
1997年 3月 カルカッタに第 1 回先遣隊派遣
8月 第 1 期日本インド学生会議本会議
(於:カルカッタ 8月2日~9月11日)
11月 第1期本会議報告会開催

第 2 期

1997年 11月 第 2 期日本インド学生会議実行委員会発足
1998年 1月 (財)アジアクラブ主催 沖守広氏写真展参加
2月 機関紙第1号発行
3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣
4月 (財)国際教育財団より助成金給付
第 1 回総会開催(各種規約施行)
6月 (財)三菱銀行国際財団より助成金給付
機関紙第 2 号発行
8月 第2期日本インド学生会議本会議
(於:カルカッタ 8 月 5 日~15 日)
9月 (財)吉田茂国際基金より助成金給付
10月「ナマステ・インディア」参加
第2期本会議報告会開催

第 3 期

1998年 11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足
機関紙第4号発行
12月「再考・JISC の基本理念」討論会第1回開催
1999年 2月「同上」討論会第2回開催
3月 機関紙第5号発行
4月 (財)国際教育財団より助成金給付
6月 カルカッタへ第 3 回先遣隊派遣
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
8月 福永正明氏(拓殖大学)顧問就任
機関紙第 6 号発行
9月 本会議直前合宿
10月 第3期日本インド学生会議本会議
(於:東京 10月2日~13日)
機関紙第 8 号発行
「ナマステ・インディア」参加
12月 第3期本会議報告会開催
第3回総会開催

第 4 期

1999年 12月 第 4 期日本インド学生会議実行委員会発足
2000年 1月「第 1 回学生会議連絡協議会フェア」参加
JISC 公式ホームページ作成
2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
4月 機関紙第 9 号発行
第 4 回総会開催
5月「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」出席
6月 BHU大学ヤーダヴ教授 ヒアリング開催
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
機関紙第10 号発行
8月 機関紙第 11 号発行
第 4 期日本インド学生会議本会議
(於:カルカッタ 8月7日~26日)
9月 (財)日印協会主催「森総理南西アジア訪問」出席
帰国報告会 実施
10月「ナマステ・インディア」参加
「日印 IT シンポジウム」参加
(財)日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席
11月 モハン・ゴーシュ氏を囲む会主催
機関紙第 12 号発行
「学生会議連絡協議会合同報告会」参加
12 月 第4期本会議報告会開催
駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催
第5回総会開催

第 5 期

2001年 1月 第 5 期日本インド学生会議実行委員会発足
2月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催
4月 SCN フェア 2001 参加
(財)国際教育財団より助成金給付
5月 機関紙第 13 号発行日印議員連盟訪問
外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問
6月 山内利男氏 勉強会開催
日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催
岐阜女子大学南アジア研究センター主催
「日印 IT シンポジウム」参加 協力
7月 機関紙第 14 号発行
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
直前合宿
国際交流基金より助成金給付
福永正明氏顧問退任
8月 第5期日本インド学生会議本会議
(於:デリー・コルカタ 8月2日~23日)
9月 帰国報告会開催
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
10月「ナマステ・インディア」参加
11月 亜細亜大学学園祭参加
機関紙第15号発行
12月 第5期本会議報告会開催
第6回総会開催

第 6 期

2002年 1月 第6期日本インド学生会議実行委員会発足
3月 機関紙第 16 号発行
4月 小野基先生(筑波大学教授)からのヒアリング開催
SCN フェア 2002 参加

在インド日本大使館後援名義受理
(財)国際教育財団より助成金給付
5月 保坂俊司氏(麗澤大学)顧問就任
(株)インドビジネスセンター後援名義受理
6月 勉強会集中合宿
7月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加
(財)日印協会後援名義受理
(財)アジアクラブ後援名義受理
インドセンター後援名義受理
外務省後援名義受理
8月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣
9月 本会議直前合宿
(財)日商岩井国際交流財団より助成金給付
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
機関紙第 17 号発行
10月 (財)国際交流基金より助成金給付
(財)東京都国際交流財団より助成金給付
第6期日本インド学生会議本会議
(於:東京 10月18日~31日)
12月 第6期本会議報告会開催

第 7 期

2002年 12月 第7期日本インド学生会議実行委員会発足
2003年 3月 機関紙第 18 号発行
4月 実行委員交流合宿
SCN フェア 2003 参加
5月 (財)国際教育財団より助成金給付
6月 (財)国際交流基金より助成金給付
勉強会合宿
学生会議連絡協議会情報交換会参加
(財)日印協会より後援名義受理
デリー・コルカタに先遣隊派遣
7月 機関紙第 19 号発行
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
(財)日商岩井国際交流財団より助成金給付
8月 本会議直前合宿
第7期日本インド学生会議本会議
(於:デリー・コルカタ 8月9日~9月2日)
10月 報告書作成
小学校訪問(社会還元事業)計 4 回
「ナマステ・インディア」参加
(財)東京都国際交流財団より助成金給付
11月 第7期本会議報告会開催
「インドの魅力を発見する会」主催
パネルディスカッションに参加
12月 第 7 期本会議報告会開催

第 8 期

2003年 12月 第8期日本インド学生会議実行委員会発足
2004年 1月 学生会議総会開催
4月 機関紙第 20 号発行
SCNフェア 2004 参加
5月 メンバー交流合宿
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
(財)国際教育財団より助成金給付
(財)日商岩井国際交流財団より助成金給付
7月 機関紙第21号発行
本会議前直前合宿
8月 第8期日本インド学生会議本会議
(於:デリー・コルカタ 8月11日~ 30日)
在コルカタ日本総領事館より後援名義受理
10月「ナマステ・インディア」参加
小学校訪問(社会還元事業)
11月 第8回日本インド学生会議報告会開催

第 9 期

2004年 12月 第9期日本インド学生会議実行委員会発足
2005年 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
3月 新人勧誘開始
4月 SCN フェア 2005 参加
5月 OB・OG インタビュー実施
6月 合宿実施
8月 本会議直前合宿
日本インド学生会議機関紙発行
第9期日本インド学生会議本会議
(於:東京 8月28日~9月12日)
10月「ナマステ・インディア 2005」協力
12月 活動報告会 実施

第 10 期

2005年 11月 第 10 期日本インド学生会議実行委員会発足
2006年 4月 SCN フェア 2006 参加
5月 合宿実施(26・27 日)
6月 先遣隊派遣(10日~19日)
合宿実施
7月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問
8月 第1回インド知識経済勉強会参加
第10期日本インド学生会議本会議
(於:プーネ・コルカタ・デリー 8月24日~9月19日)
9月「ナマステ・インディア 2006」協力
10月 インディアンデイ開催
12月 活動報告会実施

第 11 期

2006年 12月 第11期日本インド学生会議発足
2007年 1月 アイセック主催インド勉強会参加
4月 (財)国際教育財団より助成金給付
5月 (財)日商岩井国際交流財団より助成金給付
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
6月 OB・OG 会主催
第1回 JISCDAY(30 日)
合宿実施(30 日・7 月 1 日)
在インド日本国大使館、在コルカタ総領事館、
在ムンバイ総領事館より後援名義受理
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
7月 勉強会、模擬ディスカッション
先遣隊派遣プネー・デリー(29日~8月4日)
外務省より後援名義受理
日印交流年イベントとして認定
日印交流年実行委員より助成申請受理
(財)国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理
8月 直前合宿実施(12 日・13 日)
第11期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・プネー・デリー 8月15日~9月7日)
9月「ナマステ・インディア 2007」協力
11月 第11期活動報告会実施

第 12 期

2007年 11月 第12期日本インド学生会議実行委員会発足
第1次京都先遣隊派遣
IIT 同窓会講演会(於:慶應義塾大学)を補助
12月 国際開発研究者協会(SRID)学生部にて講演
第1次勉強会合宿
2008年 2月 日本インド学生会議 OB・OG 総会
3月 第2次勉強会合宿
(財)日印協会後援名義受理
4月 学生会議合同説明会(日印・日越・日韓・日中・日ケ)
外務省後援名義受理
5月 インドセンター後援名義受理
京都府後援名義受理
第2次京都先遣隊派遣本会議
(財)日商岩井国際交流財団より助成金給付
第12期日本インド学生会議本会議
(於:東京・京都 5月 29日~6月11日)
6月 (財)日印協会より助成金給付
7月 (財)吉田茂国際基金より助成金交付
8月 第12期活動報告会実施

第 13 期

2008年 10月 第 13 期日本インド学生会議実行委員発足
12月 学生会議合同講演会の企画と実施
(日中学生会議、日露学生会議と協働)
2009年 2月 日本インド学生会議 OB・OG 総会
取材(メンターダイヤモンド学生記者クラブ)
3月 (財)日印協会後援名義受理
(財)双日国際交流財団助成金給付
(財)吉田茂国際基金助成金給付
4月 (財)国際交流基金助成金給付
外務省後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
5月 日本インド学生会議 OB・OG 会主催
「キャリアエクスチェンジ」参加
6月 (財)三菱UFJ 国際財団より助成金給付
学生会議合同勉強会
(日中学生会議、日露学生会議協働)
8月 先遣隊派遣(8月5日~)
第13期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・チェンナイ・デリー 8月17日~9月7日)
9 月「ナマステ・インディア 2009」出店
11月 第13期活動報告会実施
学生会議評議会合同報告会実施

第 14 期

2009年 12月 第 14 期日本インド学生会議実行委発足
2010年 1月 日本インド学生会議 OB・OG総会
2月 SCN ミーティング定例会
3月 (財)日印協会後援名義受理
(財)双日国際交流財団助成決定
(財)吉田茂国際基金助成決定
4月 (財)国際交流基金助成決定
5月 SCN交流会(27 日)
文化交流会(日舞・ダンス練習)
6月 ソフトブリッジソリューションズ訪問(25日)
(財)三菱UFJ 国際財団より助成金給付
7月 在インド日本国大使館 後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
8月 先遣隊派遣(8月8 日~)
第14期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・チェンナイ・デリー8月14日~9月4日)
9月「ナマステ・インディア 2010」協力
11月 第14期活動報告会実施

第 15 期

2010年 12月 財団渉外
各種資料作成(事業計画書・予算書など)
2011年 1月 第15期日本インド学生会議実行委員会発足
3月 東日本大震災により活動休止
4月 予算案見直し
6月 (財)三菱 UFJ 国際財団より助成金給付
合宿
7月 外務省後援名義受理
株式会社インド・ビジネス・センター後援名義受理
8月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理
JICA 後援名義受理
公益財団法人日印協会後援名義受理
9月 本会議直前合宿
経済産業省後援名義受理
在日インド大使館後援名義受理
第15期日本インド学生会議本会議
(於:東京 9月10日~21日)
「ナマステ・インディア 2011」協力
11月 第15期活動報告会実施(26 日、東京大学にて)

第 16 期

2011年 12月 財団渉外
2012年 3月 第16期日本インド学生会議実行委員会発足
4月 (財)双日国際交流財団助成決定
(独)国際交流基金助成決定
主催:国際協力学生プラットフォーム「絆」
5月 バンガロール訪問決定
国交樹立 60 周年記念イベント認定
(財)三菱UFJ 国際財団助成金給付
6月 笹井大嗣氏からのヒアリング
機関誌第1号発行
事前合宿実施
7月 国際交流基金ニューデリー 日本文化センター
後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
(財)日印協会後援名義受理
中津雅昭氏による勉強会
8月 機関誌第2号発行
在日本インド大使館後援名義受理
第16期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー)
9月「ナマステ・インディア 2012」協力
11月 第16期報告会(於:東京外国語大学 10 日)
総会
機関誌第 3 号発行

第 17 期

2013年 1月 第 17 期日本インド学生会議実行委員会発足
2月 日本イスラエルパレスチナ学生会議 合同イベント
4月 (財)双日国際交流財団助成金給付
(独)国際交流基金助成金給付
機関紙発行
(財)三菱 UFJ 国際財団助成金給付
7月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター
後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在日本インド大使館後援名義受理
(財)日印協会後援名義受理
機関誌第 2 号発行
8月 第17期日本インド学生会議本会議
(於:デリー、コルカタ、バンガロール、チェンナイ
8月6日~9月4日)
9 月「ナマステ・インディア 2013」協力
11月 第17期報告会
機関誌第 3 号発行
12月 第17期第2回報告会
総会

第 18 期

2014年 3月 (財)三菱 UFJ 国際財団助成決定
5月 (財)双日国際交流財団助成決定
6月 第18期日本インド学生会議実行委員会発足
8月 外務省後援名義受理
(財)日印協会後援名義受理
9月 公益社団法人在日インド商工協会後援名義受理
(独)国際交流基金後援名義受理
ディスカバーインディアクラブ後援名義受理
「ナマステ・インディア 2014」協力
10月 在日インド大使館後援名義受理
第18期日本インド学生会議本会議
(於:東京 10月3日~15日)
12月 第19期引き継ぎ

第 19 期

2015年 5月 (独)国際交流基金助成決定
第19期日本インド学生会議実行委員会発足
7月 (公財)三菱UFJ 国際財団助成金給付
(公財)日印協会後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
機関誌 第1号発行
8月 (公財)双日国際交流財団助成決定
在日インド大使館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
第19期日本インド学生会議本会議
(於:デリー、チェンナイ、コルカタ 8月12日~9月4日)
9月「ナマステ・インディア 2015」協力
合宿実施
11月 第19期日本インド学生会議報告会
12月 学生会議合同報告会

第 20 期

2016年 3月 公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
4月 第20期日本インド学生会議実行委員会発足
5月 公益財団法人三菱 UFJ 国際財団 助成決定
独立行政法人国際交流基金 後援名義受理
「地域リーダー・若者交流助成プログラム」採用
6月 全国大学国語国文学会 60周年記念大会参加
エアインディア社日本支社訪問
7月 機関誌発行
公益財団法人日印協会 後援決定
Embassy of India, Tokyo(Japan) 後援名義受理
8月 在インド日本国大使館 後援名義受理
第20期日本インド学生会議本会議
(於:インド 8月10日~9月5日)
9月「ナマステ・インディア」2016 協力
10月 20期活動報告会実施

第 21 期

2017年 4月 第21期日本インド学生会議実行委員発足
5月 公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
7月 機関誌発行
外務省「日印友好交流年」記念事業認定受理
在日インド大使館 後援決定
公益財団法人日印協会 後援名義受理
8月 第21期日本インド学生会議本会議
(於:東京 8月2日~13日)
9月 月刊インド日本活動の掲載
11月 報告書郵送

第 22 期

2018年 4月 第22期日本インド学生会議 実行委員会発足
5月 世界子どもサミット参加
公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
6月 機関誌発行
7月 在インド日本国大使館 後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館 後援名義受理
独立行政法人国際交流基金 助成決定
直前合宿実施
8月 第22期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・シャンティニケトン・デリー)
10月 第22期日本インド学生会議報告会
臨時総会(23期の臨時日本開催決定)
2019年 2月 総会

第 23 期

2019年 4月 第 23 期日本インド学生会議 実行委員会発足
7月 機関誌発行
公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
公益財団法人日印協会 後援名義受理
独立行政法人国際交流基金 後援名義受理
インド経済シンポジウム参加
8月 在日インド大使館 後援名義受理
第23期日本インド学生会議
(於:東京 8月13日~22日)
11月 報告書発送

第 24 期

2020年 5月 新型コロナウイルス感染症により本会議の延期を決定

9月 対面での本会議開催の中止を決定
10月 第24期リクルーティング開始
本会議開催日程決定
11月 実行委員発足
12月 公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
2021年 1月 在日インド大使館 後援名義受理
公益財団法人日印協会 後援名義受理
外務省 後援名義受理
2月 独立行政法人国際交流基金 後援名義受理
第24期日本インド学生会議
(於:Zoom 2月20日~21日)
3月 活動報告会実施(於:獨協大学、Zoom 3月16日)

<u>第 25 期</u>

2021年 5月 第25期日本インド学生会議実行委員発足
6月 新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、
対面での本会議開催の中止を決定
8月 都立日比谷高校と意見交換会
10月 インド側(IJSC)との交流会開始
独立行政法人日本貿易振興機構、 独立行政法人国際交流基金、公益財団法人日印協会、在日インド大使館 後援名義受理
11月 外務省、農林水産省 後援名義受理
外務省 2022年日本・南西アジア交流年周年事業認定
元JETROニューデリー事務所長宮原豊様 講演会実施
12月 中間報告会
(講評:元NHKニューデリー支局長 広瀬公巳様)
株式会社アンビカコーポレーション訪問
Mr.Ardhendu Sekhar Chatterjee 講演会実施
Prof.Lalima Mukherjee 講演会実施
毎日新聞による取材
ハタヨガ体験会の実施
2022年 1月 第25期日本インド学生会議
(於:Zoom 1月8日~9日)
在インド日本国大使館渡辺一等書記官 意見交換会
2月 月刊インド 2-3月合併号 イベント記事執筆
3月 報告書発送
活動報告会実施
(於:オリンピックセンター/Zoom)

<u>第 26 期</u>

2022年 4月 第26期日本インド学生会議実行委員発足
8月 井生明さん主催「躍動するラーマーヤナの世界」参加
9月『えどがわメティ』普及会・ナマステ江戸川区主催
「カオスタウン 江戸川区の多文化共生」参加
2023年 1月 独立行政法人日本貿易振興機構 後援名義受理
公益財団法人日印協会 後援名義受理
2月 在日インド大使館 後援名義受理
独立行政法人国際交流基金 後援名義受理
農林水産省 後援名義受理
第26期日本インド学生会議本会議
(於:インド2月24日~3月17日)
5月 活動報告会実施
(於:オリンピックセンター/Zoom)

<u>第 27 期</u>

2023年 4月 第27期日本インド学生会議 発足
7月 独立行政法人日本貿易振興機構 後援決定
公益財団法人日印協会 後援決定
在日インド大使館 後援決定
在インド日本国大使館 後援決定
独立行政法人国際交流基金 後援決定
独立行政法人国際協力機構 後援決定
コルカタ側とのオンライン日印交流会の開催
8月 第27期日本インド学生会議本会議
(於:インド8月6日~9月1日)
9月「ナマステ・インディア2023」協力
11月 活動報告会実施
12月 対日理解促進交流プログラム JENESYS2023 参加

<u>第 28 期</u>

2024年 3月 公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
一般財団法人MRAハウス 助成決定
4月 第28期日本インド学生会議発足
5月 公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
7月 独立行政法人日本貿易振興機構、公益財団法人日印協会、在日インド大使館、独立行政法人国際交流基金、
独立行政法人国際協力機構 後援名義受理
8月 第28期日本インド学生会議本会議
(於:東京、福島8月21日~9月2日)
9月「ナマステ・インディア2024」協力
10月 活動報告会実施

<u>第 29 期</u>

2025年 4月 第29期日本インド学生会議発足
5月 公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
7月 独立行政法人日本貿易振興機構、公益財団法人日印協会、在日インド大使館、独立行政法人国際交流基金、
独立行政法人国際協力機構 後援名義受理
勉強会(近畿大学国際学部 教授/広瀬公巳先生)実施
8月 駐日インド大使表敬訪問
勉強会(日本インド学生会議OG/金児真依氏)実施
第29期日本インド学生会議本会議
(於:インド 8月6日~8月27日)
9月「ナマステ・インディア2025」協力
10月 活動報告会実施

<u>第 30 期</u>

2026年 3月 対面引き継ぎ会実施
公益財団法人双日国際交流財団 助成決定
公益財団法人電通育英会 助成決定
4月 第30期日本インド学生会議発足
5月 公益財団法人三菱UFJ国際財団 助成決定
6月 勉強会(近畿大学国際学部 教授/広瀬公巳先生)実施
7月 独立行政法人日本貿易振興機構、公益財団法人日印協会、外務省、独立行政法人国際交流基金、独立行政法人国際協力機構、日本政府観光局 後援名義受理
8月 在日インド大使館 後援名義受理
勉強会(横浜インドセンター / 磯貝富夫様)実施
勉強会(日本インド学生会議OG / 石田玲那様)実施
第30期日本インド学生会議本会議
(於:日本 8月21日~8月31日)
9月「ナマステ・インディア2026」協力
10月 活動報告会 実施

3. 日本インド学生会議 規約

（基本理念）
この団体は学生という立場を生かした交流を通じ、日本とインド双方の相互理解を目的としている。日本・インド両国の学生、そして各地元の人々との活発なコミュニケーションを通じて得た成果を社会に還元し、2ヶ国のさらなる友好関係を進展させることを主眼に置いている。
また、多文化共生社会の実現、草の根レベルからのグローバリゼーション、南北の構造的問題の解消など世界の諸問題への理解、そして解決に向けて将来その国を担っていく学生同士の討論を中心に活動、提言を行っている。

（前文）日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章　総則

第一条　名称
本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を“Japan-India Student Conference”とする。また、省略名称として「JISC(ジスク)」を使用する。各代実行委員会に対しては「第○期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第○期 日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「○○年東京(カルカッタ)大会」などの名称も使用する。(○は英数字とする。)

第二条　活動
(一)本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。1. 本会議の開催 2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催 3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成 4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催 5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動
(二)本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。

第三条　規約
本団体は、この「日本インド学生会議　規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。「日本インド学生会議 実行委員会規定」「日本インド学生会議 OB・OG会(仮称)会則」「日本インド学生会議 会費規定」「日本インド学生会議 創設趣意書」「日本インド学生会議 基本理念」「日本インド学生会議　各代実行委員会趣意書」「日本インド学生会議長期計画案」

第二章　構成員および組織

第四条　構成員
日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条　実行委員
日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条　発起人
発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者(石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏)の3名である。

第七条　顧問
本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条　会計監査
本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条　賛助会員
賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営における協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

第十条　OB・OG会
OB・OG会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条　総会
日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。 一、役員の選出および罷免　二、役員の退会　三、予算および決算　 四、顧問の委託　五、規約の改正　六、その他必要と思われる事項。また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上(但しOB・OGの議決権が有効な事項に関しては、OB・OG会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める)の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。役員の選出および罷免、役員の退会、予算の承認、決算の承認、顧問の委託、規約の改正、本会議の解散、活動方針の変更、OB/OG 会に関する事項。

第十二条　任期および会計年度
(一)任期および会計年度実行委員会は、その年の本会議より四か月以内に改組し、その後、約1年間を任期および会計年度とする。(二)業務の延長前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条　退会

(一)実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。(二)実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第三章　処分

第十四条　処分

長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

第四章　附則

第十五条　執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十六条　改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の要件を以って、承認される。

第一回改正　平成11年1月

第二回改正　平成12年4月

4. Students' Conference Dōsōkai (日印合同同窓会) の案内

名称:Students' Conference Dōsōkai

設立:2021年4月

○目的

日印合同同窓会では、JISC/IJSCの精神に基づいたOB・OGにより以下のネットワークを構築することを目的としています。

1. JISC/IJSCの精神に基づいて、OB・OG同士のネットワークを作り、人生の様々な場面で協力し合う。
2. JISCとIJSCの将来的な発展のために協力し、学生のサポートを行う。

○参加資格

過去にJISC(日本インド学生会議)/IJSCの本会議に実行委員として参加した方

※申請方法は、右QRよりフォームのご提出お願いいたします。

○活動内容

・3ヶ月に1度のメールマガジン(同窓会参加者が執筆した記事を募集・編集)の発行

・年1回の同窓会を開催

○一般の方へ

過去に活動に参加されていない方にも、私たちの活動を以下で発信しております。

ぜひ皆様の、フォローと応援をお待ちしております。

Instagram: @dosokai_student_conference_

Facebook: https://www.facebook.com/dosokai.student.conference

第３章　年間活動報告

1. 実行委員一覧

（1）日本側実行委員会

氏名	役職	所属学校/学部	学年
細井柚季 （ホソイ ユズキ）	実行委員長	慶應義塾大学 法学部法律学科	4年
齋藤良美 （サイトウ ヨシミ）	副実行委員長 財務局	津田塾大学 総合政策学部総合政策学科	4年
関秀仁 （セキ ヒデト）	財務局	明治大学 政治経済学部地域行政学科	2年
今井千遥 （イマイ チハル）	国内渉外局	国際教養大学 国際教養学部国際教養学科	2年
滝川彩希 （タキカワ サキ）	国内渉外局	創価大学 経済学部経済学科	4年
麻島由香 （マジマ ユカ）	国際渉外局	創価大学 経済学部経済学科	4年
湯屋利里子 （ユヤ リリコ）	国際渉外局	慶應義塾大学 法学部政治学科	2年
松井彩加 （マツイ アヤカ）	企画局	近畿大学 国際学部国際学科 グローバル専攻	3年

（２）インド側実行委員会

Name	Position	Affiliation	Grade
Aditya Prasad	President, Press Team Member	Sister Nivedita University, Bachelor of Technology in Computer Science and Engineering	4
Anurag Das	Communicator, Cultural Team Member	Jadavpur University, Bachelor of Technology in Civil Engineering	4
Ranjabati Chattopadhyay	Vice President of Academics Team	Jadavpur University, Bachelor of Arts in English Literature	3
Senjuti Mazumder	Vice President of Cultural Team	Jadavpur University, Master of Arts in English Literature	2
Saanvi Mitra	Vice President of Press Team	Jadavpur University, Master of Arts in English Literature	2
Kimaya Thakkar	Academics Team Member	St. Xavier's University Kolkata, Bachelor of Management Studies, Faculty of Commerce and Management	4
Sangbad Mazumder	Academics Team Member	Sister Nivedita University, Bachelor of Technology in Computer Science and Engineering	4
Soham Dutta	Academics Team Member	Kalinga Institute of Industrial Technology, Bachelor of Technology in Computer Science and Engineering	4
Tushnee Chatterjee	Cultural Team Member	Jadavpur University, Master of Science in Geography	2
Amrita Guha	Press Team Member	Jadavpur University, Master of Arts in English Literature	2
Ramakrishnan Srivaishnavi	Cultural Team Member	National Institute of Fashion Technology (NIFT), Bachelor Of Design - Leather Design	2
Dwija.M	Cultural Team Member	SRMIST Vadapalani, Bachelor of Technology in Computer Science and Engineering	2
Zorinsangi Bawlchhim	Academics Team Member	IPCW, Delhi University, Psychology Hons	3

2. 各局の活動内容

（１）財務局

＝活動内容＝

30期の財務局の主な役割は、収支予算書の作成、協賛金の募集、本会議期間中の金銭管理、収支決算書の作成、来期に向けた助成金の申請である。収支予算書の作成時には、事業計画書をもとに本会議中に必要な経費を算出した。助成金は主に宿泊費と交通費に充て、不足分は個人協賛を募った。本会議中は宿泊費や移動費用、食事費用などの管理を主に行った。

前回日本開催時と比較して、昨今の物価高騰の影響により、宿泊費や国内での交通費をはじめとする総費用が増加する厳しい予算状況だったが、宿泊施設や移動手段の見積もりの徹底、各種手配における早期割引、学生割引の積極的な活用、備品や消耗品の見直しなどを行い、削れるコストについては削減した。

事業終了後は、収支決算書の作成を行う。参加費と助成金を、どのような目的で使用したかを明確にするために、領収書などを元に精算を進めた。

＝反省＝

本年度の日本開催における財務局としての反省点および今後の課題として、まず昨今の物価高騰への対応が挙げられる。前回日本開催時である2年前と比較して、宿泊費や国内交通費をはじめとする総費用が大幅に増加し、厳しい財務状況からのスタートとなった。資金不足を補うための新たな施策としてクラウドファンディングの導入案も浮上したが、準備期間や人員の兼ね合いから、今年度は実施を見送った。その結果、本会議の質を落とさないことを優先しつつ、各局と連携して節約可能な経費を明確にし、協賛募集と経費節減によって全行程を予算内でやり切ることができた。個人協賛を募るにあたり、公益財団法人日印協会様より多大なるご協力を受け、資金調達を行うことができた。

また、新たな気づきとして、インド側メンバーの多くが訪日外国人向けの交通系ICカードであるWelcome Suicaを利用し、キャッシュレス決済を活用していたことが挙げられる。これにより現金のやり取りなどが軽減された面もあり、事前の案内やサポートをより強化することで、今後のさらなる効率化に繋がると感じた。

次回の日本開催に向けては、さらなる物価上昇が予想される。これまでの予算規模や運営の枠組みにとらわれず、経費の見直しを行うことが必要である。同時に、今年度実施を見送ったクラウドファンディングの早期準備など、新たな財源の確保に向けた動きを実施したい。

（２）国内渉外局

＝活動内容＝

国内渉外局では、本年度の後援を賜るべく、在日インド大使館、外務省、公益財団法人日印協会、独立行政法人国際協力機構（JICA）、独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO）、独立行政法人国際交流基金、日本政府観光局の各機関に申請を行った。このうち日本政府観光局へは、本年度が初めての申請であった。

あわせて、開会式、最終成果報告会、閉会式の運営も担当した。具体的には、各行事のプログラムの作成、実行委員の募集、開会式でのご挨拶の依頼などを行った。さらに、開会式後には国立オリンピック記念青少年総合センター内の「だしラボカフェ」にて懇親会を開催した。食事を囲みながら実行委員同士の親睦を深めるとともに、日本インド学生会議のOB・OGの皆様や協賛企業・団体の皆様との縦のつながりを一層強めることができた。

＝反省＝

メールの返信や書類の修正などにスピード感を持って対応することを意識した。今年度は日本人メンバーが少なく、一人ひとりの負担が大きくなりがちであったため、週1回の国内渉外ミーティングを行うことで、ペースに極端な緩急をつけることなく進められるよう、心がけた。

一方、後援申請においては、申請先の担当者が資料をスムーズに確認・識別できるよう、収支予算書などの添付書類の修正やファイル名の付け方といった細部にまで、より細やかな配慮が必要であると改めて認識した。事前に準備は進めていたものの、申請先の管理・確認作業の負担を減らすという視点が不足していたと反省している。

また、後援申請に時間がかかることは当初から想定し、余裕を持って準備を始めていたものの、全ての申請団体から後援名義使用許可をいただくことができたのは8月初旬となり、想定以上に時間を要した。その要因として、主に次の三点が挙げられる。

第一に、本年度初めて申請した日本政府観光局への書類作成に戸惑った点である。この点については、日本インド学生会議のOBの方が申請理由などを献身的にブラッシュアップしてくださり、最終的に後援をいただくことができた。

第二に、財政上の懸念から収支予算書の作成に時間をかけたため、後援申請に必要な収支予算書の提出が遅れた点である。

第三に、本会議テーマの決め方を例年と変えた点である。例年は日本側で決定する場合が多いが、今回は日本側からテーマを提示したうえで、インド側と相談しながら分科会テーマなどの詳細を決める方式をとった。その分、事業計画書の作成にも時間を要した。

さらに、大まかな引き継ぎは円滑に行えたものの、大使館のエンブレムの扱いなど、細かい部分で引き継ぎが十分でない点があった。次年度以降は、より詳細な部分まで確実に引き継げるようにしていきたい。

（３）国際渉外局

＝活動内容＝

国際渉外局の主な役割は、日印双方のメンバーが円滑に交流・活動できるよう、国際的な連絡調整や渡航準備を行うことである。具体的には、事業計画書の英訳やMOU（覚書）の作成、インドメンバーのVISA取得に必要な書類の作成・手続きのサポートを担当した。また、インドメンバーの来日に向けて、荷物やSIMカード、お土産などに関する情報共有・相談対応を行い、安心して渡航できるよう準備を支援した。さらに、オンラインでの日印交流会の企画・運営に加え、デリーの学生のリクルートにも取り組み、日印双方の学生が参加しやすい環境づくりと、継続的な交流関係の構築に努めた。

＝反省＝

前期からの引き継ぎ不足により詳細な情報が得られず、各種連絡の遅れや顧問への確認が頻発するなど初期段階で混乱が生じたものの、オンライン交流を通じて着実に信頼関係を構築し、本会議に向けた準備を進めることができた。

5月頃から、コルカタでは日本語会話協会のニガム先生、チェンナイではABKのランガナタン氏およびスリラム氏を通じて学生募集を開始した。また、日印交流会（オンライン）の開催に先立ちインド側の実行委員長・コミュニケーターとミーティングを行い、スケジュール調整や分科会について協議した。学生会議としての議論を有意義なものとするため、観光の時間を例年度よりも減らし、代わりにフィールドワーク先や分科会の議論数を増やすことについて反対意見が上がった。観光先はインド側実行委員の希望を反映できた一方、分科会の数や内容の決定には多くの時間を要し、日本側がどの程度主導権を握るべきか葛藤する場面もあった。

6月下旬からは本格的な事前交流を開始し、分科会ごとにテーマの深掘りや仮説設定、日本でのフィールドワークについて話し合いを重ねた。当初は連絡がつかないなどの問題もあったが、全体プレゼンテーションや課題提出の機会を設けたことで、本会議までに各分科会のテーマをしっかりと集約させることができた。

手続き面ではVISA申請サポートに膨大な時間を費やした。当初作成していた日本語書類を日本側で英訳する必要が生じたものの、事前にフォームで必要情報を回収していた対応は非常に効果的であった。また、原本の郵送ではなくインド側に対し、記入した書類をPDFの形で送信し、それをコピーして領事館に持参することで取得可能であることも判明した。しかし、申請手続きの複雑さからメインであるディスカッション深化の時間が圧迫されてしまったため、今後はメンバー決定後ただちに手続きや協議を開始できるよう早期化を図ることが課題である。

（４）企画広報局

＝活動内容＝

企画広報局は、主に本会議に向けた各種企画の立案・運営と、日本インド学生会議の活動を対外的に発信する広報活動を担当した。

企画面では、インドへの理解を深めるための事前勉強会や、外部講師を招いた勉強会の企画・日程調整を行った。また、文化交流会や開会式に向けて、日本文化に触れられる企画を検討し、メンバー間での協議・投票を経て、書道体験の実施を決定した。さらに、OBOGの協力を得たホームビジットの実施に向け、受入家庭の募集や実行委員の受入人数の調整を行った。加えて、本会議で使用する名刺や修了証(Certificate)のデザイン・作成、関係者への確認なども行った。

広報面では、InstagramおよびXを中心に、活動の認知度向上と継続的な情報発信に取り組んだ。具体的には、第30期のロゴやSNS投稿のデザインを決定し、投稿スケジュールを策定したうえで、5月から情報発信を開始した。特に、各メンバーの自己紹介投稿については、事前に回答フォームを作成して情報を収集し、統一感のあるデザインで全メンバーの紹介を行った。さらに、公式ホームページの更新・改善にも注力した。特に、数期にわたり更新されていなかった英語版およびスマートフォン版のページについて、掲載情報の見直しと更新を行った。また、トップページに表示される写真を第30期の活動写真に変更したほか、募集期間が終了した第30期実行委員の募集ページを取り下げるなど、古い情報の整理も行った。ホームページ全体のデザインや情報の配置を見直し、より見やすく、必要な情報を見つけやすいサイトとなるよう工夫した。

＝反省＝

広報面では、Instagramの投稿を見やすくし、色彩とデザインに統一感を持たせるため、30期独自の投稿フォーマットを作成した。これにより、30期の活動の雰囲気を視覚的に伝えやすくなると共に、投稿作成時の編集作業を効率的にすることができた。一方で、SNSやホームページの更新計画を事前に十分に立てていなかったため、タイムリーに更新することができなかった。今後は、事前に投稿内容や更新スケジュールを計画し、限られた時間の中でも発信の時間を確保する必要がある。

また、インド側実行委員へ渡すプレゼントについても、本会議の開催期間中に準備を進めることになったため、限られた時間の中で急いで完成させる形となった。今後は、準備に必要な作業と日程を事前に確認し、余裕を持って完成させることが必要である。

勉強会の運営においては、オンラインとオフラインを併用して実施した際、音声の接続や共有に関する問題が発生し、開始直後の進行が円滑に進まない場面があった。今後は、事前に機材や接続環境の確認を行い、オンライン参加者と対面参加者の双方が円滑に参加できる運営体制を整える必要がある。一方で、今期は三名の講師をお招きして勉強会を実施し、事前に知識を深めたうえで本会議に臨むことができた点は、成果であったと考える。

3. 年間活動スケジュール

2026年3月	・29期実行委員との対面引き継ぎ会実施（都内）
4月	・第30期実行委員会 活動開始 ・定例ミーティング 開始 ・事業計画書の作成
5月	・本会議テーマ議論
6月	・インド側実行委員 決定（コルカタ、チェンナイ） ・インド側実行委員との交流会開始（オンライン） ・広瀬公巳先生 事前勉強会 実施 ・後援申請 ・日本側実行委員 事前合宿 実施（都内） ・日印協会主催 新会長・会長代行就任披露レセプション 参加・協力 ・在日インド大使館主催「国際ヨガの日2026」参加
7月	・本会議準備 ・インド側実行委員 決定（デリー） ・本会議に向けた勉強会
8月	・磯貝富夫氏 事前勉強会 実施 ・石田玲那氏 事前勉強会 実施 ・第30期本会議 実施（東京、横浜、浜松）
9月	・活動報告書作成 ・ナマステ・インディア2026 ボランティア参加
10月	・活動報告会準備、実施 ・活動報告書作成、発送
11月	・31期 実行委員募集開始
2027年2月	・31期実行委員との対面引き継ぎ会（都内）

第４章　事前活動

本会議の実施に向け、実行委員会では、事前学習や後援申請、インド側参加学生の募集、定例会を通じた企画・運営の準備など、多岐にわたる活動を行った。これらの取り組みは、本会議の円滑な運営と充実した議論を実現するための基盤となった。本章では、事前学習をはじめ、関係機関との連携や参加学生の募集、会議に向けた準備の過程について報告する。

1. 事前学習

毎週木曜日の定例会では、各実行委員がインドに関する関心分野について発表し知識を深めたほか、外部講師を招いた勉強会を通じて、インドの社会問題や文化・習慣の違いなどについて学習した。また、渡航前にはインド側実行委員と互いの国の文化や本会議のテーマについて意見を交わし、相互理解を深めた。

（1）実行委員による勉強会

- 『インド進出日系企業』細井柚季
- 『インドと浜松の関係』齋藤良美
- 『Z世代が支持するインドのサッカー』関秀仁
- 『ダッバーワーラー（Dabbawala）』今井千遥
- 『インドの言語について』滝川彩希
- 『デリー大学大学生の1日を体験してみよう』麻島由香
- 『インドの古典舞踊』湯屋利里子
- 『インドの映画』松井彩加
- 『地方銀行とインド』安戸乃彩

（2）外部講師による勉強会

本会議テーマ「国境を越えて働くということ」に関連する分野で活躍されている方々を講師としてお招きし、インド社会や日印関係、国際的なキャリアなどについて、多角的な視点から理解を深めることを目指した。講師には、国際報道に長年携わり、インド社会を現地で取材されてきた広瀬公巳先生、シャープ株式会社で37年間にわたりグローバルビジネスに携わり、現在は一般社団法人横浜インドセンター理事の磯貝富夫氏、日本インド学生会議のOGであり、現在は観光の政府系機関に勤務されている石田玲那氏からお話を伺った。

登壇者	実施日
日本インド学生会議顧問（近畿大学国際学部教授）広瀬公巳先生	6月25日
一般社団法人横浜インドセンター 理事 磯貝富夫氏	8月4日
日本インド学生会議 24期実行委員長 石田玲那氏	8月15日

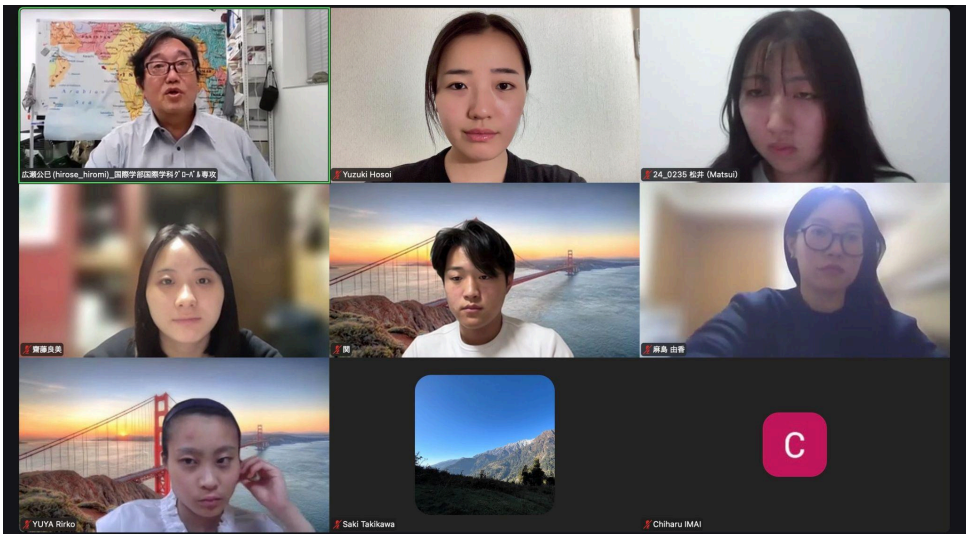
1.　広瀬公巳先生 勉強会

広瀬先生の勉強会では、「人」を切り口に、インドのIT人材、カースト、印僑などについて学んだ。IT人材の話では、インドが多くの優秀な技術者を輩出している背景に、IIT（インド工科大学）などの教育機関や、政府による科学技術・IT政策、海外に移住したインド人の存在など、さまざまな要素が関係していることを知った。特に興味深かったのは、インドのIT産業の発展が、個人の能力や努力だけによって実現したものではないという点である。人材を育成する教育機関の整備や、科学技術分野を重視する政府の政策が、現在のインドの強みにつながっている。国の産業を発展させるうえで、教育や人材育成に長期的に投資することの重要性を感じた。

また、カーストについては、単純に4つの身分に分かれた制度と捉えるのではなく、ヴァルナやジャーティなどの複雑な仕組みや、差別の歴史について学んだ。特に、歴史的に特定のカーストに属する人々が、職業や教育、公共の場の利用などにおいて差別や排除を受けてきたことは印象に残った。こうした差別は過去のものではなく、現在の社会にも影響を残している。さらに、アンベードカルがカーストによる差別に立ち向かい、平等な社会の実現を目指したことを知り、社会に根付いた制度や価値観を変えることの難しさについて考えさせられた。法律や制度を整えるだけでなく、人々の意識や社会のあり方そのものを変えていく必要があると感じた。さらに、インドから世界各地へ移住した「印僑」の歴史を通して、インドと世界とのつながりの大きさについても知ることができた。インド出身者が移住先の国々で経済や社会の発展に関わってきたことから、移民は単に人が国境を越えて移動するというだけでなく、移住先と出身国の双方に影響を与える存在なのだと感じた。

また、今回が今期初めての勉強会だったこともあり、これまで自分がインドについて知らなかったことの多さに驚いた。カレーやITなど、身近に感じていたものについても、その背景にある歴史や社会、政策、国際的なつながりを知ることで、これまでとは違った見方ができるようになった。特に、IT産業の発展には教育や政策が関係している一方で、カーストのように長い歴史の中で形成された社会的な課題も存在していることから、インドを一つのイメージだけで捉えることはできないと感じた。ご多忙の中ご講演賜りました広瀬氏に、心より感謝申し上げる。

今井千遥



2.　磯貝富夫氏 勉強会

8月4日(火)、横浜インドセンター理事の磯貝富夫氏を講師にお招きし、都内会場およびオンラインのハイブリッド形式で、本会議に向けた勉強会を実施した。磯貝氏はシャープ株式会社にて37年にわたりグローバルビジネスを牽引し、インドをはじめ世界各地で通算29年以上の駐在経験を持つ。現在は、日印両国の将来を担う人材の育成や大学間連携、ビジネス交流の促進に尽力している。

講義では、まず想像以上に先進的なインドの現状と圧倒的な人口データ等が示され、「なぜ今インドなのか」という背景が解説された。日本とインドは「遠くて近い友人」であり、歴史的な同盟関係や仏教・ヒンディー教の繋がりなどがある。その上で、「ハードに強い日本と、ソフトに強いインド」という両国が、ビジネスの現場においていかに強固な相互補完関係を築けるかについて、日系企業の最新の動きを交えて具体的に学んだ。

本会議での活動に直結する実践的知識として、「日本とインドの違い10項目」や「インドとの付き合い方10ヶ条（5 Do's / 5 Don'ts）」の教示を受けた。「ビジネスの交渉はタフだが、それ以上に友人関係の構築が優先される。じっくり組めば必ず信頼関係は築ける」「インドは一様ではないことを意識し、予期せぬ展開にうろたえない」といった力強いアドバイスを得た。また、グローバルリーダーになるための11ヶ条に加え、これからの予測困難な時代を生き抜くために必要な4つの力（Vision：展望、Understanding：理解、Courage：勇気、Adaptability：適応力）についても語られた。

磯貝氏のリアルな経験を踏まえた、インドへの熱量とユーモアに溢れる講義は非常に引き込まれるものであった。講義を通じて、自分たちはまだまだインドに対する理解が足りていないと痛感したと同時に、本会議前にインドのことをもっと知りたい、将来的にインドに関わりたいという強いモチベーションが芽生えた貴重な勉強会になった。

関秀仁



3.　石田玲那氏 勉強会

8月15日(土)、長浜先生のご紹介により、日本インド学生会議第24期実行委員長の石田玲那氏を講師としてお招きし、オンラインで勉強会を実施した。

今回の勉強会では、石田氏のこれまでのキャリアや日本インド学生会議への参加経験をはじめ、学生会議を通じて得た学び、学生会議へのアドバイス、さらに進路相談まで、幅広い内容についてお話を伺った。

特に、石田氏が日本インド学生会議に参加したきっかけや、その経験を通してインドへの留学を決意された経緯、現在のお仕事に至るまでのキャリアについてお聞きすることができた。実際に日本インド学生会議を経験された先輩の歩みを知ることで、私たち自身の将来についてもさまざまな選択肢があることを実感し、自分の進路を考える上で大変貴重な機会となった。

また、キャリアを選択する際には、常に新しい知識を取り入れることや、一つの選択肢に限定せず、できるだけ多くの可能性を持っておくことが大切であるというお言葉もいただいた。これらの言葉は、今後の進路を考える上で重要な指針となっただけでなく、日本インド学生会議での活動を今後のキャリアにもつなげていくことについて考えるきっかけとなった。

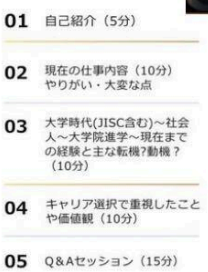
本会議の開催前という時期ではあったが、実際に学生会議を経験し、その後さまざまな分野で活躍されている先輩から直接お話を伺えたことは、第30期実行委員にとって非常に貴重な経験となった。先輩の経験や考え方に触れることで、これから始まる本会議への意識を高めるとともに、学生会議で得られる学びを自身の将来にどのようにつなげていくかを考える機会にもなった。

最後に、ご多忙の中、勉強会にご参加いただき、第30期のために貴重なお時間を割いてくださった石田玲那氏に、心より感謝申し上げる。また、本勉強会の実現にあたり、ご紹介くださった長浜先生にも、深く感謝申し上げる。

松井彩加







2. 定例会

2026年4月より毎週木曜日22時から、各局や個人の仕事内容の共有や進捗報告を行うためにZoomで定例会を実施した。特に事業テーマや分科会のテーマを決める際は白熱した議論になり、約2ヶ月間かけてじっくりテーマ設定を行なった。毎週の定例会を欠かさず行ったことで、実行委員同士の絆を深めることができた。また、実行委員全員が集まる定例会に加え、局ごとにも週に1度の定例会を行い、作業を行った。

3. 日印交流会

本会議をより実りあるものとすることを目的として、6月上旬から本会議開始までの期間、国際渉外局主導で日印交流会をオンラインで実施した。日印交流会とは、本会議前に、日本とインド、双方のメンバーで週一回行う定例会のことである。本会議に先立ち両国の実行委員が事前に顔を合わせることで、メンバー同士の交流を深めるとともに、本会議で扱うテーマの決定や分科会での議論を進めた。

交流会の初期には、両国の実行委員が自己紹介を行い、オンライン上で初めて顔を合わせた。その後、メンバー同士の交流を重ねながら、本会議全体のテーマについて意見を出し合い、最終的に「国境を越えて働くこと」をテーマとして設定した。日本とインドでは、働き方やキャリアに対する価値観、職場環境、社会との関わり方などにさまざまな違いがあることから、両国の視点を比較しながら議論できるテーマとなった。

テーマ決定後は、Workplace Environment、Career Development、Community、Cultureの4つの分科会に分かれ、それぞれのテーマについて議論を進めた。分科会では、両国の実情や自身の経験を共有しながら問題意識を整理し、どのような視点から「国境を越えて働くこと」を考えるのかについて意見を交わした。また、定期的に各分科会から進捗報告のプレゼンテーションを行うことで、それぞれの議論の内容や今後の方向性を両国の実行委員全体で共有した。

オンラインでの交流には、時差や通信環境、言語などの難しさもあった一方、継続的に交流することで徐々に打ち解け、率直に意見を交わすことができるようになった。渡航前から議論と交流を重ねたことで、本会議開始時には互いの考え方や関心をある程度理解した状態で活動を始めることができた。日印交流会は、事前準備の場にとどまらず、両国の実行委員が共に議論をつくり上げ、本会議での交流をより深いものにするための重要な土台となった。

4. インド側実行委員募集（デリー）

30期では、例年募集を行っているコルカタ・チェンナイに加え、新たにデリーからも参加学生を募集することとした。既存の予算や他都市からの参加学生との人数のバランスを考慮し、デリーからの募集人数は1名とした。募集にあたっては、30期の日本側実行委員のうち、デリーへの留学経験を持つ細井・麻島が中心となって選考を進めた。主にデリー大学・JNU（ジャワハルラール・ネルー大学）日本語学部の学生から応募があった。本会議が迫っていたため告知期間を設けられず、募集期間も1週間に限られ

たものの、約30名の学生から応募があったことには驚いた。書類審査を通過した候補者を対象に複数回のグループディスカッションを実施して候補者を絞り込んだ後、最終面接を行い、参加学生1名を選抜した。渡航日が迫る中での選考となったが、合格者は速やかに航空券を手配し、分科会での議論にも積極的に参加してくれたため、その後の準備も順調に進めることができた。31期以降についても、デリーとの連携を継続・発展させていく可能性を模索している。

5. 他団体主催行事への参加・協力

（1）在日インド大使館主催「国際ヨガの日 2026」参加

2026年6月21日、関と細井が築地本願寺で行われたヨガのイベントに参加した。当日はあいにくの小雨であったが、会場は多くの参加者で賑わっていた。講師の動きを真似しながら本格的なインド式のヨガを体験したほか、ヨガ終了後には会場に居合わせた第29期実行委員と交流する時間もあった。ヨガを通じてインドの文化に対する興味、関心を深めることができた。

（2）日印協会主催 新会長・会長代行就任披露レセプション参加、協力

細井、麻島が参加し、滝川、関、齋藤、および第29期実行委員の伊藤がボランティアとして運営に協力した。ボランティアでは受付を担当したほか、レセプションでは日印関係に携わる多くの方々と交流する機会を得た。スズキ株式会社の社長をはじめとする企業関係者の方々に直接挨拶することもでき、貴重な経験となった。

式典では、岸田新会長より「これから未来に向けて両国関係を一層発展させていきたい」との抱負が述べられた。また、岸田新会長と直接握手を交わす機会にも恵まれ、日印両国の関係をさらに発展させていこうとする思いを間近に感じることができた。

本会議を目前に控える中、日印関係の発展に尽力されている多くの方々との交流は、本会議の成功に向けて一層努力していく決意を新たにする貴重な機会となった。

（3）「ナマステ・インディア2026」 ボランティア

関、湯屋が日本インド学生会議のボランティアとして参加した。本イベントは日本最大級のインド関連イベントであり、インドに詳しい方や関心の高い来場者が多く、大変刺激を受けた。会場では、食やダンス、衣服、雑貨など多様な文化を通じて、日本にいながらインドの魅力を体感することができた。私たちは抽選会場での運営サポートを行いながら、日本インド学生会議の広報活動を行った。興味を持ってくださった高校生や保護者の方々に直接私たちの活動を紹介でき、有意義な機会となった。

第５章　本会議事業内容

1. 本会議の目的と背景

（１）本会議のテーマ

「国境を越えて働くということ ～日印の若者が描く共生とキャリア～」

（２）テーマの目的と背景

近年、教育や雇用のグローバル化が進み、国境を越えて学び、働くことはかつてないほど身近な選択肢となっている。キャリア形成はもはや一つの国にとどまらず、複数の地域を跨いで描かれる時代に来ていると言える。しかしその一方で、実際に異国で働くというプロセスには、制度の違い、言語の壁、企業文化や生活基盤の整備状況など、現実的に複雑な課題がさまざま存在する。

こうした状況の中で、人がどのような条件や経緯のもとで働く国を選び、その選択がどのような過程を経て就労や生活の経験へとつながっていくのかを捉えることには重要な意味がある。進路選択の段階では各国に関する情報の伝わり方や認識の違いが影響し、採用の段階では言語要件や選考基準、企業との接点の持ち方が関わる。就労後には職場での評価のあり方やコミュニケーション、在留資格などの制度的条件、生活環境の違いが重なり合い、その後の定着や移動の判断につながっていく。日印間の人材移動においても、情報の偏りや制度の壁によって、理想と現実に乖離が生じている側面は否定できない。

本会議では、こうした流れを一つの連続したプロセスとして捉え、それぞれの段階でどのような要素が影響を与えているのかを整理しながら考察を行った。また、働くことと生活することが互いに関係しながらキャリアの形成に影響を与えている点にも着目し、その全体像を日印双方の視点から捉えることを目的とした。

（３）分科会の構成

本会議では、「国境を越えて働くということ ～日印の若者が描く共生とキャリア～」というテーマのもと、日印双方の学生がそれぞれの関心や専門性を活かしながら議論を深められるよう、4つの分科会（1. 職場環境、2. キャリア、3. コミュニティ、4.文化）を設置した。

分科会1（職場環境）では、業務で使用される言語や評価基準、年功序列などの組織文化、企業による受け入れ体制の違いに着目し、これらが外国人材の働きやすさや定着に与える影響について議論した。また、定着している事例と離職につながる事例を比較し、外国人材が働き続けられる職場環境のあり方を探った。

分科会2（キャリア）では、進路選択時の情報や各国へのイメージ、採用選考や言語要件が就職機会に与える影響について議論した。さらに、来日前後でのキャリア認識の変化や、就労後の転職・帰国・第三国への移動などにも着目し、国際的なキャリア形成の可能性と課題を検討した。

分科会3（コミュニティ）では、行政手続きや多言語対応などの自治体による支援、地域住民との交流、外国人住民の孤立といった課題を取り上げた。地域社会や自治体が果たす役割を考察し、外国人が安心して暮らし、地域の一員として共生するための環境について議論した。

分科会4（文化）では、食文化や宗教、生活習慣、コミュニケーションの違いが、海外での生活や就労に与える影響について議論した。日本とインドの文化を比較しながら、互いの価値観を尊重し、多様な文化的背景を持つ人々が共生するために必要な視点を探った。

2. 本会議スケジュール

日付	予定	詳細
8月20日(木)	インド側実行委員到着	インド側実行委員出迎え
8月21日(金)	大使館訪問 開会式	朝:明治神宮 駐日インド大使表敬訪問 昼:文化交流会 夕:開会式、懇親会
8月22日(土)	分科会 観光	朝:分科会 議論(1回目) 昼:分科会 議論(2回目) 夕:新宿観光
8月23日(日)	分科会 着付け体験 観光	朝:分科会 議論(3回目) 昼:着付け体験 夜:六本木ヒルズ盆踊り
8月24日(月)	観光 フィールドビジット	朝:鎌倉観光 昼:横浜インドセンター訪問 夕:横浜観光
8月25日(火)	西葛西	朝:分科会 議論(4回目) 昼:西葛西・船堀 訪問 夕:自由観光
8月26日(水)	分科会 観光	朝:分科会 議論(5回目) 昼～夜:秋葉原・浅草観光 / 自由時間
8月27日(木)	靖國神社 大学訪問	朝:豪徳寺・神保町観光 昼:靖國神社訪問 夕:NEXTによる慶應義塾大学ツアー 分科会 議論(6回目)
8月28日(金)	地方訪問 (静岡県浜松市)	朝:新幹線で浜松市へ移動 昼:スズキ株式会社訪問 夕:浜松市役所訪問
8月29日(土)	地方訪問 (静岡県浜松市)	朝:浜松市国際交流協会訪問 昼:浜松市観光 夕:新幹線で東京へ移動
8月30日(日)	ホームビジット	朝:分科会 議論(7回目) 昼～夜:ホームビジット
8月31日(月)	閉会式 送別会	朝:分科会 議論(8回目) 昼:閉会式、発表 夕:送別会
9月1日(火)	インド側実行委員帰国	インド側実行委員見送り

3. 本会議日録

■ 8月20日 (木) インド側実行委員日本到着、東京観光

ついに、待ちに待ったインド側実行委員との対面の日を迎えた。朝5時30分頃に到着したチェンナイメンバーと6時30分頃に合流し、その後、デリーメンバーの到着を待った。待機中、羽田空港内のコンビニやインフォメーションセンターを訪れ、そこで見つけた日本語を嬉しそうに読んでいるインド側メンバーの姿が印象に残っている。長時間のフライトによる疲れもある中で、日本での一つひとつの発見を楽しんでいる様子から、彼らがこの日を心待ちにしていたことが伝わってきた。

デリーメンバーと合流した後、空港内のトイレで着替えを済ませ、オリンピックセンターへ向かった。移動の際には、空港の改札前でWelcome Suicaを購入した。チャージ金額が大きかったこともあり、購入に少し時間を要したため、今後のメンバーのお迎えでは、事前に購入しておくことにした。宿泊するオリンピックセンターはチェックイン開始時刻が15時であるため、それまで日本側メンバー数名が荷物を預かり、施設のロビーで待機した。その間、他のメンバーはスカイツリーやソラマチを訪れ、日本での観光を楽しんだ。特にソラマチには、かんざし専門店やポケモンセンターなど、日本らしさを感じられる店舗が多く、インド側メンバーが目を輝かせながら店内を見て回っていた姿が印象的だった。中でも、DAISOを訪れた際には、商品の価格の安さに驚き、次々と商品をかごに入れていく姿がとても印象に残っている。わずか数時間行動を共にしただけでも、彼らが日本に対して強い関心や好意を持っていることを随所で感じることができ、私自身も嬉しい気持ちになった。

チェンナイ・デリーチームが観光をしている間に、別の日本側メンバーも合流し、数名で再び羽田空港へ向かい、コルカタチームを迎えに行った。コルカタチームは人数が多かったため、到着後の荷物の受け取りなどに時間を要し、約40分後にようやく合流することができた。合流後は、空港内で物理SIMの受け取りを済ませ、オリンピックセンターへ向かった。コルカタチームはチェンナイ・デリーチームよりも人数が多く、13名（日本人3名・インド人10名）での移動となったため、電車への乗車や乗り換えの際には、全員がはぐれないようにすることに加え、他の乗客の通行を妨げないよう配慮する必要があった。大人数での移動ならではの難しさを実感するとともに、今後の活動に向けて、より円滑な移動方法を考える必要があると感じた。

オリンピックセンター到着後、コルカタチームも無事にチェックインを済ませ、夜には複数のグループに分かれて夕食をとった。早朝からの出迎えや長時間の移動、観光など、盛りだくさんの一日であったが、インド側実行委員全員との合流を無事に終えることができた。いよいよ日本インド学生会議が始まるのだという実感が、少しずつ湧いてきた一日だった。

麻島由香

■ 8月21日 (金) 駐日インド大使表敬訪問、文化交流会、開会式、明治神宮観光

本会議初日の朝は、明治神宮とインド大使館を訪れた。インド側メンバーは前日に日本へ到着したばかりだったため、長時間の移動で疲れているのではないかと思っていたが、実際に会ってみると、皆さん笑顔で積極的に話しかけてくれた。長旅の疲れを感じさせないほど元気な姿を見て、私たち日本側も自然と元気をもらうことができた。オリンピックセンターから参宮橋口を通って行くことができたため移動もしやすく、境

内では御朱印をいただいたり、絵馬を書いたりしながら、これから始まる11日間の本会議に向けて一緒に時間を過ごした。

その後、明治神宮前駅から電車でインド大使館へ向かった。当初は27日に訪問する予定だったが、急遽21日に変更となり、本会議の初日に訪問することになった。マリック大使と直接お話しさせていただく機会もあった。「学生のうちにもっと積極的に物事を吸収していくように」という力強いアドバイスも頂戴し、これから始まる本会議に向けて、とても良いスタートを切ることができたと感じた。

オリンピックセンターに戻り昼食をとった後は、文化交流会を行った。日本側からは書道を紹介し、実際に筆を持って日本の文化を体験してもらった。一方、インド側からはビンゴに似たゲームを紹介してもらい、実行委員同士で楽しみながら交流することができた。お互いに実際に体験しながら交流できたことで、距離が少しずつ縮まっていくのを感じた。

その後の開会式では、来賓やOBOGの皆様からご挨拶をいただき、30期の日本インド学生会議の始まりを祝っていただいた。これまで日本インド学生会議を経験してきた先輩方から、これまでの経験を踏まえた温かい言葉をいただいたことで、ここまで準備してきたことを振り返るとともに、これから始まる本会議をより良いものにしたいという気持ちが強くなった。

特に印象に残ったのは、インド側のパフォーマンスだ。ダンスや歌、ストーリーテリングなど、コルカタ組だけでなく、デリー組やチェンナイ組もそれぞれのパフォーマンスを披露してくれた。同じインドから来た学生たちであっても、地域によって文化や表現の仕方が異なることを実際に目の前で感じることができ、インドという国の多様性を改めて実感した。これから11日間一緒に活動する中で、こうしたそれぞれの違いや文化についても知っていきたいと思った。

夜には、オリンピックセンター内のだしラボカフェで懇親会を実施した。OBOGや友人、これまで日本インド学生会議に関わってくださった方など、約20名の方に参加していただき、食事をしながらさまざまなお話をすることができた。これまでの実行委員の楽しかったことや大変だったことなど、体験談を伺うこともでき、とても楽しい時間となった。同時に、これまで日本インド学生会議に関わってきた方々が今もこうして集まってくださることを通して、この活動が30年にわたって多くの人のつながりによって続いてきたことを実感した。

今回の一日を通して、日本インド学生会議は現在活動している学生だけで成り立っているのではなく、これまでこの活動を経験してきたOBOGの皆様、企業訪問などでお世話になっている方々、そしてさまざまな形で活動を支えてくださっている方々とのつながりによって成り立っているのだと改めて感じた。

30期という節目の年に本会議を運営するホストカントリーの立場として、これまで先輩方が積み上げてきたものを大切にしながら、今度は私たち自身が次の世代につなげられるような11日間にしたいと思う。今日感じたことを忘れず、これから始まる本会議を最後まで責任を持って、そして楽しみながら過ごしていきたい。

齋藤良美

■ 8月22日 (土) 分科会議論①②、新宿観光

本会議2日目は、朝食をみんなで食べるところからスタートしました。インドからの移動の疲れも少しずつ和らいできた様子で、朝食の際には「昨日の夜はよく眠れた？」「ごはんはおいしい？」といった会話が飛び交い、昨日よりもさらにリラックスした雰囲気でした。

午前と午後にかけては、本格的に分科会のグループディスカッションが始まりました。私は「分科会4：文化」に所属しています。食文化や宗教、生活習慣を扱い、その違いを尊重しながら共生するための新たな道を模索しています。

まず行われた分科会1回目では、これまで日印双方で進めてきた事前アンケートの進捗状況の共有と、本会議期間中のグループディスカッションのロードマップを確認しました。意識の違いを突き合わせていく中で、日印のメンバーそれぞれが文化という抽象的なテーマに対してどのような問題意識を持っているのかや、宗教は異なっても日本とインドにはたくさん共通点があることなどを話し合いました。

午後の分科会2回目では、主に、後日実施するフィールドワークの訪問先へのアポイントメント取りと、現場で何を聞き出すべきかというインタビュー項目の策定を行いました。アポ取りの連絡作業では、言語やマナーの違いに配慮しながら丁寧にコミュニケーションを取るよう意識しつつ、チーム一丸となって準備を進める一体感を味わうことができました。

夕方からは、当初は予定していた盆踊りに参加する予定でしたが、あいにく大雨により中止となってしまったため、急遽予定を変更し希望者を募って新宿へショッピングに出かけました。新宿に到着してからはみんなでたくさんの写真を撮りました。インド側のメンバーが笑顔で写真を撮り合っていて、日中の真剣なディスカッションとはまた違う時間が、私にとってもリフレッシュの時間となりました。

その後、日本の文化や日常を感じてもらうべく、ドン・キホーテや100円ショップに行きました。店内に入った瞬間からインド側のメンバーの目が輝き、所狭しと並ぶユニークな便利グッズや日用品、お菓子などを手にとっては驚きの声を上げていました。「これは何に使うの？」「これ全部100円なの？」と興奮気味に質問してくれて、想像以上にたくさんの買い物をして楽しんでいる姿がとても印象的でした。

たくさん買い物をするインド側メンバーの姿を見ながら、私自身驚くと同時に、普段私たちが当たり前のように享受している日本の製品や買い物環境には、異文化から来た人々を魅了する素晴らしいアイデアや技術が詰まっているのだと気づかされました。日本の日常にある魅力を、彼らの反応を通して再発見することができ、どこか誇らしいような、あたたかい気持ちになりました。

明日以降もフィールドワークや本格的なディスカッションが続きますが、お互いの価値観を深く知るこの貴重なプロセスを、一日一日大切にしていきたいと思います。

今井千遥

■ 8月23日（日）分科会議論③、着付け体験、盆踊りと夏祭り

オリンピックセンターで朝食をとり、9時から分科会の議論を開始した。慌ただしい行程や観光による疲れが見られる学生や、前夜の雨の影響で風邪のような症状が出ているインド人学生も数名いた。そのため、体調不良者のケアを行うとともに、さらなる体調不良者が出ないよう、夜更かしを控え、十分な睡眠時間を確保するよう注意喚起を行った。

10時からは、中間報告プレゼンテーションを行った。分科会によっては、発表中に言葉に詰まる場面も見られたが、今後のアウトプットに向けて、それまでの議論を整理する良い機会となったように思う。

私が所属する分科会1（職場環境）では、主に新卒のインド人求職者の視点から、「どのような取り組みがあれば日本で働くことを検討したくなるのか」「日本で働きたいと思った場合でも、どのような条件が

整っていなければ日本企業で働くことを前向きに考えられないのか」という問いを軸に議論を進めていることを報告した。言語や文化の違いが日本企業で働く際の障壁となることは、事前の文献調査からも確認できていたが、さらに具体的な事例を明らかにするため、某自動車メーカーや某総合機械メーカーでエンジニアとして働く方、某専門商社に勤務する方などへのインタビューを実施すること、またGoogle Formsを用いて回答を集めることも併せて発表した。この分科会議論の時間を活用し、分科会3（コミュニティ）は、フィールドワークの一環として都内の教会を訪問していた。

その後、オリンピックセンターで昼食を済ませ、浴衣の着付け体験のために電車で移動し、現地で分科会3と合流した。着付け体験では、28期と同様、北爪裕子様のご自宅を訪問させていただいた。北爪様には、約5時間にわたり休憩を取ることなく、13名のインド人学生の着付けをしていただいた。女性にはヘアメイクも施してくださったほか、13名分の着物の洗濯やアイロンがけなど、事前にも多くの準備をしていただいた。また、着付けの待ち時間にはかき氷を楽しめるよう準備してくださるなど、細やかな心遣いをいただいた。多大なご尽力と温かいおもてなしに、心から感謝している。

着付け体験後には、前日に雨のため延期となっていた麻布十番納涼まつりと六本木ヒルズ盆踊りに参加した。着物の着付けを行ってから向かったため、会場である六本木ヒルズアリーナへの到着は少し遅くなってしまったが、運よく最後のアンコール曲に間に合い、全員で輪に入って踊りを楽しむことができた。曲の歌詞が9番まで続いていたこともあり、思いのほか長く踊ることができ、メンバーの笑顔が溢れとても楽しい時間となった。

盆踊りの後は、希望したメンバーと一緒に会場内の屋台で夕食をとった。鰻や胡麻団子などを食べていたが、大都会の真ん中で開催される夏祭りということもあり、全体的にお値段はやや高めに設定されていた。それでも、日本の特別な夏の味覚や雰囲気をみんなで共有でき、とても満足してくれたようだった。帰り道には、けやき坂から綺麗に見える東京タワーを背景に写真を撮影した。また、ドラえもんのオブジェとともにたくさんの記念写真を撮ることもでき、思い出深い一日となった。

細井柚季

■ 8月24日（月）横浜インドセンター訪問、横浜・鎌倉観光

本日は、朝7時30分に鎌倉へ出発するところからスタートした。朝が早かったため、みんな本当に眠そうだったが、何とか目を覚まして朝ご飯を食べ、バスと電車に乗って鎌倉へ向かった。電車では座ることもできたので、少しは寝ることができたメンバーもいたのではないかと思う。そして鎌倉に到着すると、先ほどまでの眠そうな様子とは一変し、それぞれが限られた時間の中で隅々まで鎌倉を楽しんでいた。おみくじを引いたり、御朱印をもらったり、お守りを買ったりと、日本ならではの文化にも触れながら、みんな思い思いの時間を過ごしていた。お昼には、ほとんどのメンバーが小町通りでアイスや抹茶のフロートを食べていた。その後、何とか予定通りの電車に乗ることができ、横浜インドセンターへ向かった。

横浜インドセンター（YIC)では、私たちの勉強会にも講師としてお越しいただいたYIC理事の磯貝富夫氏をはじめ、フェリス女学院大学の引地達也准教授からお話を伺うことができた。YIC会長のAdvani Nalin氏からは、横浜とインドの歴史・日本とインドの企業の違い、そしてインド人が日本で働く上で大切なことなど、本会議のテーマにもつながる、非常に内容の濃いお話を伺うことができた。株式会社サン

ウェルのKuppuswamy Senthilkuma氏にもお越しいただき、実際に日本で働いて感じること、日本がインドに求めているものなど日印の働き方について詳しく勉強できた。

その後、YIC会議室に横浜市国際交流協会（YOKE）の職員の方にお越しいただき、横浜市で暮らす外国人と横浜市とのつながりについて詳しく知ることができた。外国人が日本で働き、生活していくためには、地域や自治体とのつながりも大切なのだと改めて感じた。

そして、なんと横浜みなとみらいで大きな花火大会「横浜グリーンエクスポ応援 みなとみらいフェスティバル（スカイシンフォニー in ヨコハマ）」が夕方に開催されることを知った。そこで、グループに分かれて夕食を食べた後、みんなで花火を見に行くことになった。

私のグループは横浜中華街へ行き、皆がそれぞれ食べたいものを買い、シェアしながら食べた。インド側の学生は、食べ物や飲み物をシェアすることが本当に多く、私たちにも自然に分けてくれる。その文化にもここ数日で私たち自身が慣れてきて、お互いに躊躇なくシェアするようになった。日々一緒に過ごす中で、お互いの文化を少しずつ理解し、自然に取り入れていることを実感した。

その後は、みんなでプリクラを撮りに行った。プリクラブース内は大人数でパンパンだったため、まともな写真はなかなか撮れなかった。しかし、それが逆にとても面白く、みんな笑いが止まらなかった。こうした何気ない時間も、今回の活動の大切な思い出になったと思う。そして、無事に花火を見ることができた。インド側の学生たちは、一発目の花火が上がった瞬間、本当に嬉しそうな表情を見せていて、写真や動画をずっと撮っていた。「日本の花火を見ることが夢だった」と話している学生もいて、偶然ではあったが、みんなで花火を見ることができて本当によかったと思う。インドの学生と一緒に日本の花火を見ることができたことは、私にとってもとても嬉しい思い出になった。

本会議もそろそろ折り返しとなり、時間が過ぎる早さを実感している。残りの期間も、ひとつひとつの学びや経験を大切にしながら、最後までみんなで楽しく駆け抜けていきたい。

松井彩加

■ 8月25日 (火) 分科会議論④、ナマステ江戸川区（西葛西、船堀）訪問

本日の活動は分科会議論から始まった。昨日は鎌倉観光、横浜インドセンター、横浜中華街、花火鑑賞と盛りだくさんな1日だったため、メンバーには少し疲れも見られた。

朝の時間は、昨日の横浜インドセンターで学んだことや疑問に感じた点を共有した。自治体と連携した事業から企業の取り組みまで、想像以上に幅広く話を伺えたため、まずはそれぞれの内容を整理することから始めた。また、以前設定していた企業や自治体への質問案の修正も行った。昨日、その質問をもとに尋ねようとした際、話が噛み合わない部分や、別の角度から質問すべきではないかという意見が出たためだ。今後、浜松でスズキ本社や浜松市役所を訪問する機会があるため、そこを見据えて考え直した。分科会によっては、成果発表に向けた準備を始めたグループもあった。発表形式や発表内容、今後の進め方、役割分担などを決定した。それによって今後の見通しが立ち、仮説に対してどのようにアプローチしていくかを考えることができた。

本会議も6日目となり、日本メンバーとインドメンバーの距離が縮まってきたように感じる。分科会では真剣な議論だけでなく、一緒にお菓子を食べたり、直接分科会とは関係ないことでも日本やインドにつ

いて話したりして、お互いの違いを様々な側面から学んだ。ダンスをみんなで踊っている分科会もあった。

午後は西葛西、船堀にて「ナマステ江戸川区」の近藤様にコーディネートしていただき、Tokyo International Public School (TIPS) 訪問、西葛西の街の散策、ISKCON寺院訪問などを行った。TIPSでは、先生が学校の設立経緯や理念、生徒のバックグラウンドなどを説明してくださった。モンテッソーリとケンブリッジ・プライマリーを基盤とし、子どもたちが主体的に学ぶ姿勢を大切にしている。インド人の学生が多く、先生自身もインド出身だった。先生だけでなく実際の生徒がいたり、教室でお話を伺えたりしたことで、学校の雰囲気を体感することができた。日本メンバーもインドメンバーも、「どのような背景を持つ生徒がいるのか」「文化や価値観の違う子どもたちをどのようにしてまとめているのか」「家族へのサポートは行っているのか」「外国籍の子どもたちが日本社会で生活する上で抱える困難は何か」など、積極的に質問していた。また、子どもたちが主体的に学べるような遊びも体験した。すべての面が同じ模様になるよう組み立てる積み木では、大人は深く考えすぎてしまうが、単純に同じ色を向き合わせればいいという事実に驚かされた。たし算やひき算を目に見える形で学べるゲームもあり、興味深かった。

西葛西の街を散策した際には、ヨガスタジオやインド料理店、インド商品店など、日本にいながらインドを感じられる貴重な機会となった。インド商品店では実際に現地で売られている商品が多く、インドメンバーが日本メンバーにおすすめの品を紹介してくれた。初めての味ばかりで面白かった。ISKCONでは、ヒンドゥー教の歴史や信仰についてお話を伺った。インドメンバーの中には自身の信じている教えと異なる部分があったようで、説明してくださった方と意見をぶつけ合っている様子が印象的だった。

その後は、お台場やスシローなどに分かれて移動した。初めての回転寿司に大興奮しており、はじめは生魚を食べることに強い抵抗があったものの、最終的には10皿食べるなど、日本の寿司に魅了されていた。

湯屋利里子

■ 8月26日 (水) 分科会議論⑤、浅草&秋葉原観光

本日は午前中に分科会議論を行い、その後、秋葉原と浅草を観光しました。

分科会では、日本人学生とインド人学生を対象としたGoogleフォームのアンケートを作成し、実行委員の皆さんに回答していただきました。集まり始めた回答の中には、インドの学生はキャリアを選ぶ際に、給料の高さだけでなく、企業や組織の透明性の高さも重視しているという傾向が見られました。日本の学生とは異なる視点であり、とても興味深く感じました。今後、回答が出そろった段階で、日本学生の回答と比較しながら分析を深めていきたいです。

分科会の終了後は、秋葉原に移動して昼食をとりました。駅に到着した直後、構内にあるガチャガチャにメンバーが強い関心を示し、なかなかその場を離れられませんでした。また、日本人メンバーよりもインド人メンバーの方が日本のアニメに詳しいことも多く、その知識の豊富さに驚きました。

昼食の店選びでは、メンバーの中にベジタリアンの方がいたため、ベジタリアン対応のメニューがある店を探そうとしました。しかし、都会であったのにも関わらず、条件に合う店はなかなか見つからず、ベジタリアンの人にとって、日本での生活は想像以上に大変なのだと実感しました。たとえばコンビニで商品

を買う場合でも、裏面の成分表示は日本語で書かれているため、内容を自分で読み取ることができません。インドでは、ベジタリアン向けの食品であることを示す専用のマークが商品に付いていますが、日本にはそのようなマークの使用は滅多にないため、その食品がベジタリアンに適しているかを判断することも難しいと感じました。せっかく日本に来ているのに、食べられるものが限られてしまうのは仕方がない面もありますが、少し気の毒に思いました。同時に、外国人の方が安心して食事を選べるような環境づくりの必要性も考えさせられました。

昼食後は、さらに少人数のグループに分かれて、メイド喫茶を訪れました。「萌え萌えきゅん」という独特の動作に最初はインド人学生は驚いていましたが、みんなで一緒に行い、大笑いしながら楽しむことができました。さらに、インドの学生がメイド喫茶を知っていたことにも驚きました。どこで知ったのかを尋ねると、SNSだと教えてくれました。SNSで流れてくる情報をきっかけに日本文化に親しんでくれている人が多いことを知り、その影響力の大きさを改めて感じました。

その後は浅草を観光しました。日本のアニメを通じて浴衣を知っていたインド側参加者は、仲見世通りで実際に購入、着用し、散策を楽しんでいました。また、だるまを買ったり、団子を食べたりするなど各自が関心のある日本文化を体験していました。途中で忘れ物や怪我といったハプニングもありましたが、メンバー同士で協力しながら、臨機応変に対応することができたと思います。

滝川彩希

■ 8月27日 (木) 靖國神社 宮司表敬訪問、慶應義塾大学NEXT（分科会議論⑥）、豪徳寺観光、神保町観光

午前は世田谷区にある豪徳寺を訪れた。歴史的な建物と豊かな自然に囲まれ、京都のような雰囲気に、インド側学生からも「日本特有の伝統的な雰囲気を味わえた」と好評であった。また、招き猫の発祥地としても知られる同寺において、猫のポーズをしながら写真を撮り合ったりして日本の文化に親しみながら楽しめる時間となった。

その後、神保町へ移動し、インド側学生の食の好みや関心に合わせて4つのグループに分かれて行動した。私のグループは、ベジタリアンでも食事ができ、日本で有名な店という条件で探し昼食をとった。その後、古本街を散策した。インドに帰国した時に、日本のお土産として友人に渡す古本を買う学生もいた。

午後は靖國神社を訪問した。鳥居から本殿までの道のりの時点で靖國神社の圧倒的なスケールに驚いている学生も多かった。まず、宮司の大塚様より、神社の歴史や役割、日本における立ち位置についてご説明をいただいた。神道が古来からある日本独自の美学や精神性に基づいている点や、特に戦時中は精神的支柱として機能していた歴史は、多宗教国家から来たインド側学生にとって非常に印象深かったようだ。また、靖國神社の起源と現在までの歴史についても学んでいく中で日本側メンバーにとっても勉強になることも多かった。

質疑応答では、外国人戦没者に関する質問や講義を聞いた中で考えたインド視点ならではの質問をする学生もおり、さらに理解を深めた。

講話の後は本殿へ移動し、玉串を奉納し、御神酒をいただく貴重な機会に恵まれた。独特な歴史を持ち、神道に対する理解が深まった同神社への訪問は、両国の学生にとって日本の歴史観や精神文化を理解する有意義な時間となった。

夕方からは慶應義塾大学を訪問した。都心のオフィス街に位置しながらも歴史を感じさせる三田キャンパスは、インドの大学とは異なる良さがあり、多くの学生の関心を寄せていた。キャンパス見学後は、同大学の学生団体「NEXT」の学生たちと本会議の分科会ごとに分かれてディスカッションを行った。私が所属する分科会2（Career Development）では、慶應義塾大学の学生に対し「日本の就職活動（新卒一括採用など）の特徴や課題点」や「インド人が日本で働く際に求められる具体的なスキル」について質疑応答を交わした。インド側学生は積極的に自身の意見を伝えながら議論を深めており、最終日の報告プレゼンテーションに役立つ良い時間であった。

また、数年後に日本の大学院への進学を志望しているインド側学生もおり、「実際の日本の大学生活や環境を具体的にイメージできる良い機会になった」との声も聞かれ、将来を考える上でも価値のある訪問となった。

関秀仁

■ 8月28日 (金) スズキ株式会社（本社・湖西工場）浜松市役所

浜松訪問1日目を迎えた。この日は朝5時45分に集合し、準備ができたメンバーから順次、参宮橋駅へと向かった。オリンピックセンターから東京駅へ移動する途中、切符の受け取りや乗り換えなどで予想外の出来事が相次ぎ、結果として約半数のメンバーが予定していた新幹線に乗車できないというハプニングが発生した。新幹線に乗車できたメンバーは予定通り浜松へ向かい、到着後、貸切バスでスズキの湖西工場へ移動し、工場見学を行った。一方、遅れて出発したメンバーもその後の新幹線に乗車し、浜松へ向かった。遅れて到着したメンバーは、時間の都合上、湖西工場の見学には参加することができなかったため、まず浜松駅からセンチュリオンホテルへ向かい、チェックインを行った。

その後、後発組メンバーがスズキ本社の最寄り駅まで移動すると、2名の社員の方が迎えに来てくださっており、一緒に歩いてスズキ本社へ向かった。工場見学を終えたメンバーを待つ間、スズキの歴史館3階を見学した。館内では、スズキの創業から現在に至るまでの歴史や、製品開発におけるさまざまな工夫が紹介されており、英語対応の映像も用意されていたため、インド側メンバーも興味を持って見学することができた。工場見学を終えたメンバーと歴史館で合流した後は、スズキ本社にて、スズキが提供してくださったベジタリアンカレーをいただいた。日本で本格的なベジタリアン料理を食べることができたことに、インド側メンバーも大変喜んでいた。食事という身近な場面においても、さまざまな文化的背景を持つ社員への配慮がなされていることを実感し、こうした多様性への対応が、スズキの国際的な企業文化の一端につながっているのではないかと感じた。

昼食後は、スズキで働くインド出身の社員の方々とのインタビュー・ディスカッションを、各分科会に分かれて行った。実際に日本（浜松）で働いているインド人社員の方から、職場での経験や日本での生活について直接お話を伺うことができたことは、「国境を越えて働くこと」をテーマとして活動している私たちにとって、とても貴重な機会となった。これまで資料や事前調査を通して考えていたことを、実際に日本で働く方々の経験と照らし合わせながら考えることができ、多くの刺激を受けた。その後、全員で再び歴史館へ戻り、見学を行った。スズキがこれまで歩んできた歴史や、製品を生み出すためのさまざまな工

夫が分かりやすく展示されており、体験型の展示では、インド側・日本側のメンバーが一緒になって楽しみながら参加していた。

スズキへの訪問を終えた後は、バスで浜松市役所へ向かった。市役所では、浜松市が取り組んでいる多文化共生や国際化に関するさまざまな取り組みについてプレゼンテーションをしていただき、その後、質疑応答の時間も設けていただいた。実行委員からはそれぞれの関心や視点から多くの質問が飛び交い、活発な意見交換が行われた。特に印象に残ったのは、浜松市役所が通訳の方を用意してくださっていたことである。そのおかげで、言語面での不安を感じることなく、非常にスムーズにコミュニケーションを取ることができた。また、最後には実行委員全員にたくさんのお菓子まで用意してくださり、細やかな配慮と温かいおもてなしの心を感じることができた。

この日は、インド出身の社員が多く働くスズキと、さまざまな国籍の住民が暮らす浜松市という、別の立場から国際化に取り組む二つの場所を訪問した。企業と自治体という視点から、多様な文化的背景を持つ人々が日本で生活し、働くための環境づくりについて学ぶことができたことは、今回のJISCのテーマを考える上でも非常に有意義な経験となった。実際の現場を訪れ、そこで働く人々や地域を支える方々の話を直接聞いたことで、異国の地で働くということを、より具体的に考えるきっかけとなった一日だった。

麻島由香

■ 8月29日 (土) 浜松市国際交流協会、浜松観光

浜松滞在2日目の朝は、ホテルでバイキング形式の朝食をとった。料理の種類が非常に豊富で、どれも美味しく、気づけば1時間以上かけてゆっくりと食事を楽しんでいた。連日の移動や議論による疲れもあったが、朝からしっかりと食事をとることで、次の活動に向けてエネルギーを補充することができた。

9時30分からは、浜松市国際交流協会（HICE）を訪問した。HICEは、浜松市の出資によって設立された組織であり、外国人住民への支援や多文化共生の推進に取り組んでいる。今回の訪問で特に印象に残ったのは、浜松市役所とHICEの役割分担、そして両者の関係性である。市役所が政策の立案や予算の配分を担う一方、HICEは外国人住民と直接関わる現場の立場から、具体的な支援事業を企画・実施している。事業に必要な資金の約8割を市から受けているものの、上下関係という立ち位置ではなく、現場で把握した課題や意見を市に伝え、政策に反映させる対等なパートナーシップを築いているという。現場を知る組織が主体的に事業を提案し、実行できる仕組みが整っている点に大きな意義を感じた。また、現場のニーズを踏まえて柔軟に事業を進められる一方、社会情勢や外国人住民を取り巻く環境の変化に応じて、支援のあり方も継続的に見直していく必要があるとの話も伺った。

外国人住民が日常生活の中で直面している課題についても、具体的な事例を交えながら話を伺った。特に大きな障壁となっているのが、日本語によるコミュニケーションの難しさである。例えば、学校から配布されるプリントの内容を理解できない、病院で自身の症状を十分に説明できない、日本語でのやり取りが難しく仕事探しが進まないといった問題が生じている。さらに、外国にルーツを持つ子どもたちが抱える課題も印象的であった。日本で生まれ育ち、日本語で日常会話ができる子どもであっても、保護者が日本語を十分に理解できないことで家庭内のコミュニケーションに支障が生じる場合がある。ま

た、日常会話に問題がなくても、教科学習で必要となる語彙や表現の理解が難しく、高校受験などの進路選択に影響するケースもあるという。この話から、日本語支援は日常会話ができるようになることを目指すだけでは不十分であり、子どもの学習や進路、家庭生活まで視野に入れた継続的な支援が必要であると感じた。

そのほか、災害時に外国人住民へ必要な情報をどのように届けるかという課題や、性別、国籍、障がいの有無などによって社会参加の機会に差が生じないようにするための取り組みについても学んだ。言語や文化など、個人の状況に応じて必要な支援が異なることを理解し、誰もが安心して暮らし、地域社会に参加できる環境を整えることが重要である。また、外国人住民を一方的に「支援の対象」として捉えるのではなく、地域社会をともにつくる一員として考える視点も大切であると感じた。

HICEへの訪問を終えた後は、浜松城を訪れた。入場料は200円で、館内の展示は新しく、歴史に関する情報が分かりやすく整理されていた。展示を通じて、現在の浜松城に至るまでの歴史や、かつての城の規模が現在よりも大きかったことなどを知ることができた。普段は城を建物として見ることが多いが、その土地の歴史や当時の人々の暮らしを知ることで、地域の成り立ちを理解する機会にもなった。天守閣からは浜松市内を一望することができた。天守閣からの街の眺めも良かった。

その後、昼食に参加しないメンバーで文芸館やアニメイトを訪れ、浜松の街を散策した。それぞれが興味のある場所を訪れながら、会議中とは異なる形でメンバー同士の交流を深める時間となった。15時17分浜松発の新幹線に乗車し、東京へ戻った。

東京到着後は、日本人メンバー同士で夕食をともにした。会議期間中の出来事を振り返りながら、和やかで賑やかな時間を過ごすことができた。今回の会議では、議論や活動を通じて多くのことを学んだだけでなく、国や文化、これまでの経験が異なるメンバーと出会い、関係を築くことができた。改めて、この会議に参加し、素晴らしいメンバーとともに時間を過ごせたことを嬉しく思う。

今井千遥

■ 8月30日（日）分科会議論⑦、ホームビジット

本日は分科会議論⑦とホームビジットを行いました。

分科会では、主に施策のアイデアをまとめたり、報告プレゼンの準備に取り組んだりました。施策の提案を考える中で、キャリアに関する意識は、給与や言語といった単一の要因ではなく、教育、実践経験、職場での受容、将来展望などが相互に作用して形成されるのだと実感しました。また、ついに明日が報告プレゼンの本番ということもあり、身が引き締まる思いで、メンバー全員が集中して準備に臨めたと思います。特にスライドの作成を中心に、メンバー同士で役割を分担しながら、全体のスライドを仕上げていきました。インドの学生は人前で話すのが非常に上手で、話し方が堂々としているうえに英語も流暢なので、それに見合う発表ができるよう精一杯頑張りたいです。

午後は、ホームビジットを行いました。私たちのチームは、まず川越を訪れ、その後、私の出身地である埼玉県三郷市の実家へ向かいました。川越では、蔵造りの町並みを歩きながら、メンバーがずっと写真を撮り続けていたのが印象的でした。そして昼食には蕎麦をいただきました。日本滞在も終盤に近づいていますが、蕎麦に挑戦したことのあるメンバーはまだいなかったため、よい機会になりました。インド

にはスパイスを使った濃い味付けの料理が多いため、素朴な味わいの蕎麦で満足してもらえるか不安でしたが、「旨みがあって、素材の味を大事にしている」と、おいしそうに食べてくれました。特に天ぷらが人気でした。一方、箸を使うのは難しそうで、苦戦している姿も見られました。食事をした畳の座敷では、靴を脱いで座るという体験にも喜んでもらえました。わさびにも挑戦し、その辛さに大きなリアクションをしていました。その後は、コインリングのお店や神社、時の鐘、駄菓子屋などを巡りました。特に神社では、家族と友達へのお土産にするといって絵馬をいくつか購入し、御朱印集めにも熱心に取り組んでいました。メンバー全員がとても楽しんでいる様子で、案内した私もうれしくなりました。

その後、私の実家に移動し、夕食を食べました。ベジタリアンの方が食べられる日本食がなかなか見つからず、食事に困っているという話をしたところ、家族がベジタリアン向けのたこ焼きや唐揚げを用意してくれていました。みんなにとても喜んでもらえ、家族が準備してくれて本当によかったと感じました。また、一般的な日本の家庭での暮らしを見てもらうことができ、良い経験になったのではないかと思います。さらに、メンバーからは、ドライブルーベリーやクッキー、カジュ、ヘナタトゥーなど、たくさんのお土産をいただき、その心遣いがとても嬉しかったです。自分の地元でありながら、インドの方々と一緒に回ることで、普段とは違う視点から見えてくるものがあり、新たな発見がたくさんありました。

滝川彩希

■ 8月31日 (月) 分科会議論⑧、最終プレゼンテーション、閉会式、お別れパーティー

8月31日(月)は、これまで分科会で重ねてきた議論の集大成として、最終プレゼンテーションを行った。各分科会では、これまで設定したテーマやリサーチクエスチョン、仮説、フィールドワークなどをもとに議論を深め、そこで得られた気づきや発見、提言について発表した。

午前中は、午後の発表に向けた最終準備を行った。限られた時間の中で発表内容を整理するとともに、各自の役割分担や発表の流れを確認し、繰り返し練習を行った。これまで議論と準備を積み重ねてきたものの、発表直前まで修正が続き、最後まで慌ただしい時間となった。

午後の分科会成果発表には、約10名の方に対面でご参加いただき、緊張感のある雰囲気の中で発表を行った。各分科会は約25分の発表時間を設け、日本側・インド側の学生がそれぞれの経験や考えを持ち寄りながら議論してきた中で得られた、キャリアや共生についての気づきや学びを発表した。発表後の質疑応答も活発に行われ、実行委員からの質問を通して、これまでの議論をさらに深める機会となった。

また、11日間にわたる日本での共同生活を通じて得たカルチャーショックについても声が上がった。特に、食事や言語、大浴場など、日本とインドの生活習慣や文化の違いについて、実際に生活をともにしたからこそ感じた戸惑いや、それを乗り越える中で得られた発見が共有された。「一番カルチャーショックだったこと」として大浴場を挙げながらも、「良い経験だった」と振り返る学生の姿も印象的であった。

その後の閉会式では、今期の活動を振り返るとともに、日本側からサプライズムービーを上映した。11日間の活動や交流を振り返る映像に、涙を流す者もいた。日印両国の実行委員長からの挨拶では、今回の学生会議が「忘れられない思い出」になったという言葉もあった。日本側としても、ホストカントリーと

してインド側メンバーにとって有意義な時間を一緒に過ごせたことを楽しみ、安心するとともに、大きな達成感を得ることができたと感じている。

閉会式の最後には、日本側からインド側メンバー一人ひとりにプレゼントを贈った。プレゼントには、それぞれの名前を日本の名前として考え、習字で書いた色紙を用意した。日本での滞在が、一度きりの訪問ではなく、これからも思い出すことのできる場所として感じてもらえたらいいなという思いを込めた。

夜には新宿でお別れ会を開催し、カラオケを通して最後の交流を楽しんだ。また、インド側実行委員のAdityaとAnuragの誕生日をサプライズでお祝いした。日本の歌だけでなく英語の歌も歌われ、会場は大いに盛り上がった。11日間にわたってともに学び、生活し、交流してきた仲間との最後の時間を、実行委員全員で楽しみながら締めくくることができた。

齋藤良美

■ 9月1日 (火) インド側実行委員 出国

ついに本会議最終日を迎えた。11日間をともに過ごした仲間との別れが目前に迫っていることを思うと、寂しさが込み上げた。振り返れば、長かったはずの11日間は、終わってみると驚くほど短い。まるで夢を見ていたかのようでもある。前日の夜も、遅くまで語り合っているインド人学生が多く見られた。私自身も就寝したのは午前4時近くで、15分ほど仮眠をとって起床した。午前4時半のチェックアウト、そして早朝の集合という厳しいスケジュールではあったが、ほとんど全員が時間通りに集合し、無事に空港に向けて出発することができた。これまで何度も集合時間に苦労してきた私たちにとって、初めて全員がほぼ時間通りに集まれたことに感動した。羽田空港へは、電車で向かった。

コルカタ、チェンナイ、デリーへ向かう学生たちは、いずれも午前9時前後の時間帯のフライトだったため、最後には全員で一緒に保安検査場を通過した。保安検査場付近では、日印の学生が涙ぐみながらお別れをしていった。航空券をスキャンし、荷物検査の列に並んでも、最後の最後まで、見えなくなるまでお互い手を振り続けた。

私自身も留学先であるインドへ戻るため、インド人学生たちと別れた後、別のターミナルへ移動して飛行機に搭乗した。搭乗口へ向かいながら、11日間の出来事を一つずつ思い返した。改めて日本インド学生会議という場があったからこそ、これほど多くの人と出会い、互いの文化や考え方を知り、国境を越えた友人関係を築くことができたのだと感じた。国境をこえた友情という言葉は、少し大袈裟に聞こえるかもしれない。しかし、別れ際に涙が出るほど大切な人が、国境の向こう側にできた。それは紛れもない事実だ。

30期という節目の年に、この会議の運営に携わり、インドから来た学生たちと11日間をともに過ごせたことを心から嬉しく思う。私にとって、インドは今後も何度も訪れる場所であるので、これが最後の別れではないことは救いだ。コルカタ、チェンナイ、デリーを訪問する際に私を迎えてくれる人がいることはとても誇らしい。そのことを思うと、インドという国は、以前にも増して自分にとって特別な場所になったように思う。11日間を一緒に過ごしてくれたインド人学生、そして準備期間から本会議終了まで本会議を支えてくださったすべての方々に、心から感謝したい。

細井柚季

4. 訪問報告

（１）駐日インド大使表敬訪問

8月21日(金)、在日インド大使館を訪問した。一等書記官のUmesh Nautiyal様、Nagma Mohamed Mallick駐日インド大使と、約30分にわたり直接お話しさせていただく貴重な機会を得た。面会中にはチャイとサモサもご用意いただき、和やかな雰囲気の中で進行した。

冒頭では、JISCの設立背景や第30期のテーマ、プログラムスケジュールについて説明し、その後、実行委員全員が大使に対して自己紹介を行った。大使は一人ひとりの顔を見ながら、名前や所属にも関心を示され、短い時間ながらも出席者全員と丁寧に言葉を交わされた。

続いて、大使から、学生にメッセージをいただいた。インド側は今回が初の海外渡航となるメンバーが多いことを踏まえ、日本滞在中に得られる学びや感性を大切にしてほしいと伝えられた。また、渡印経験がない日本人学生が多いことから、インド側メンバーは日本での滞在中に自国の文化や社会について積極的に伝える使命がある、とも仰っていた。本会議期間中にラクシャー・バンダンというヒンドゥー教のお祭りがあることから、当日に改めて大使館に来てお祝いすることをご提案いただいたが、浜松滞在中の予定のため、浜松で祝うことにした。

また、日本に在住するインド人を取り巻く状況や、日印間の大学提携がまだ十分に広がっていないことにも話が及んだ。こうした話を通じて、両国の人的交流を促進するとともに、大学をはじめとする教育機関同士の連携を深める必要性を感じた。また、大使は、日本側にも外国人を受け入れるための対応や責任が求められていると述べ、多様性を受け入れ、相手を敵ではなく、協力できる存在として捉えることの大切さを強調された。

松井彩加



（２）北爪裕子様による、浴衣着付け体験

北爪様のご協力のもと、インド人学生13名が浴衣の着付けを体験した。大人数での訪問にもかかわらず、一人ひとりに丁寧に対応してくださり、着付けに加えてヘアセットも行っていただいた。日本の和室で、日本文化に詳しい北爪様に教わりながら浴衣を着ることができ、学生たちにとって、日本の文化を身近に感じる貴重な機会となった。

着付けを終えた学生たちは、互いの浴衣姿を写真に収めたり、皆で記念撮影をしたりと、思い出を残していた。また、飲み物やお菓子に加え、かき氷機までご用意いただき、日本の夏の楽しみも味わうことができた。着付けだけでなく、温かなおもてなしを通じて交流を深められたことも、今回の体験の大きな魅力だった。当日に向けたご準備から着付けまで、多大なるお力添えをいただいた北爪様に、心より感謝申し上げます。

齋藤良美



（３）横浜インドセンター

8月24日（月）、横浜インドセンター（YIC）を訪問した。事前勉強会でもお世話になったYIC理事の磯貝富夫氏の司会進行のもと、YIC会長のAdvani Nalin氏より歓迎のお言葉をいただき、フェリス女学院大学の引地達也准教授よりゲストとしてのご挨拶を賜った。

続いて、Advani Nalin氏より「横浜における起業家精神の歴史」についてご講演いただいた後、YIC理事・相談員の小林一忠氏より日印の企業文化の違いについて解説いただいた。36年間にわたる海外駐在経験に基づくお話から、単一的で強い均質性を持つ日本と、多言語・多宗教が共存する多様性を持つインドの根本的な対比を学んだ。日本は「空気を読む」ハイコンテキスト文化、インドは「言葉による伝達が第一」のローコンテキスト文化であるという明確な違いがある一方で、契約書以上に人とのネットワークや信頼を重んじる点は両国に共通しているという重要な指摘を受けた。

さらに、株式会社サンウェルのKuppuswamy Senthilkuma氏より、キャリア構築の視点から日印の繋がりについてお話を伺った。日本の製造業やITインフラ分野で高度人材の需要が高まる中、治安が良くインフラが整った日本はインド人エンジニアにとって魅力的な環境である。しかし、日本での長期的な成功には高い技術力だけでなく、時間への厳格さや「報・連・相」といった日本特有のコミュニケーション、暗黙の期待への理解など、信頼を築くスキルが不可欠であると強調された。将来日本で働きたいと考えているインド側学生にとっても、日本で働くことを具体的にイメージできる有益な時間となった。

今回の訪問を通じ、日本とインドにおける均質性と多様性やコミュニケーションスタイルの違いを明確に理解することができた。そうした文化の壁はあっても、最終的には「人との信頼関係」や「日々の報・連・相」といった地道な姿勢が相互理解の鍵になるという学びを得た。

関秀仁



（４）公益財団法人 横浜市国際交流協会

8月24日（月）に公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）のお話を伺い、外国人の人口が増加している横浜市における多文化共生の取り組みについて学びを深めた。横浜市の外郭団体であるYOKEは、「誰もが安心・安全に暮らせる国際都市・横浜」および「誰もがいきいきと活躍できる国際都市・横浜」を創ることを主なビジョンに掲げ、日本語学習支援、地域へのアウトリーチ、次世代育成・平和教育、多様な主体との連携といった主な事業を展開している。

日本語学習支援においては子どもたちの支援も行っており、市内の小中学校に1万人以上の外国人が在籍している中で、言葉が話せなくとも日本の学校で学ぶケースが多いという現状が印象的であった。また、親が日本語を話せない場合は家庭からのサポートを受けることも難しいため、日常会話の日本語にとどまらず、授業や学校生活で使う日本語を教えることによって子どもたちのやる気が失われないようきめ細やかに支援している。

地域へのアウトリーチ事業では、相談を待つのではなく自ら外国人が集まる団地や会社、レストランなどに赴き、当事者が抱える生のニーズを直接把握して支援政策に反映させるよう取り組んでいる。その際、外国人を一括りに「困っている人」として捉えるのではなく、日本語、病気、ビザ、災害など、人によって困っている内容は全く異なるという点が強調された。次世代育成・平和教育においては、大学生を対象とした国際機関でのキャリア発見プログラムやグローバルキャリアガイダンスなどを実施し、平和について一人ひとりが「自分ごと」として捉えられるような機会を提供している。これらの事業は大学や学校、市役所、自治会、NPO、ボランティア団体などと協力しながら多文化共生政策を推進している。

一人ひとり異なり多様化・個別化する困りごとに柔軟に対応し続けることや、行政・教育機関・ボランティアなど多機関との連携体制を維持・強化すること、さらには地域社会全体で多文化共生への理解と意識を高めていくことが、今後の持続可能な取り組みに向けた課題であると学び、それぞれの分科会での議論を有意義にするものとなった。

湯屋利里子



（５）ナマステ江戸川区による、西葛西・船堀訪問

「ナマステ江戸川区」代表近藤祐市様のご案内のもと、江戸川区西葛西を訪問し、日本で暮らすインド人の教育や生活、文化について学んだ。初めに、Tokyo International Public School（TIPS）へ訪問。Tokyo International Public School（TIPS）は、東京都江戸川区西葛西にあるインターナショナルスクールで、主に3～6歳の子どもたちを対象に、モンテッソーリ教育を取り入れた幼児教育を行っている。また、一人ひとりの発達段階や学習ペースを尊重し、子どもたちが自ら考え、試行錯誤しながら理解を深められる環境を整えている。なお、TIPSでは小学生を対象とした教育課程も展開している。

TIPSでは、長年インターナショナルスクールで勤務されている校長先生から、在日インド人家庭の子育て事情や、日本とインドの教育文化の違いについてお話を伺った。日本で生活するうえで大変なこと、また、スクールが直面する課題点などを具体的にご説明いただいた。質疑応答の時間も設けてくだ

さり、それぞれの分科会に関する質問などをし、解像度を高めることができた。特に、子供だけでなく、日本で働く母親や家族が直面する課題についてお話しいただいたことが印象に残っており、TIPSが学校としてだけではなく、彼らのコミュニティを支える存在として機能している事を学んだ。学校では、実際に子どもたちが使用している教具を体験させていただいた。モンテッソーリ教育に基づき、子どもたちが自ら考え、試行錯誤しながら学べるよう工夫されていることに感銘を受けた。また、実行委員の中にもモンテッソーリ教育を受けて育ったインド人が多く、久しぶりに教具に触れ、当時を懐かしみながら笑顔で楽しんでいる姿が印象的だった。

その後、西葛西の街を歩き、インド食材を扱う店舗をご紹介いただいた。そこでは、実際に日本に住み生活をしているインドの方にお話を伺う機会にも恵まれ、日本の中で彼らが日本にいながらもインドの食文化や生活習慣に触れられる環境があることを実感した。日本社会に適応するだけでなく、自分たちの文化を維持しながら生活できる環境があることは、海外で暮らす人々にとって大きな意味を持つのではないかと感じた。私自身、インド留学中に、好きなタイミングで日本食を食べることができず、慣れ親しんだ食文化に触れられることの大切さを実感した経験がある。そのため、西葛西のように、自国の食文化や生活習慣を身近に感じながら暮らせる環境は、異国で生活する人々にとって、安心感や精神的な支えにつながるのではないかと考えた。

最後に船堀のISKCON寺院を訪問し、ヒンドゥー教の施設や礼拝の様子を見学するとともに、インドの宗教文化についてお話を伺った。実際の宗教施設を訪れたことで、宗教が信仰の場としてだけでなく、同じ文化的背景を持つ人々が集まり、文化やつながりを維持する場としても機能していることを知った。さらに、インド側の実行委員メンバーに祈りの作法を教わりながら、一緒にお祈りを体験できたことが印象に残った。祈りの手順や意味を教えてもらいながら実践することで、宗教について知識として学ぶだけでなく、実際に信仰に触れ、その文化への理解を深めることができた 。今回の訪問を通して、日印関係は政府や企業といった大きな枠組みだけでなく、教育、地域コミュニティ、宗教など、私たちの日常生活に身近な領域においても築かれていることを実感した。また、日本で暮らすインドの人々が、それぞれ異なる文化や価値観を持ちながら、日本社会との関わりを築き、ともに生活していることを知り、多文化共生のあり方について考える貴重な機会となった。

麻島由香



（６）靖國神社

8月27日（木）、靖國神社を参拝し、宮司の大塚海夫様より神社の歴史や役割、現代における立ち位置についてご説明をいただく貴重な機会に恵まれた。大塚氏は、元海上自衛官（海将）から史上初の自衛官出身大使を経て、靖國神社の宮司に就任したという、非常に興味深い経歴を歩まれている。日本における「神」の概念が英語の「God」と必ずしも一致せず、日本独自の精神性に基づいている点が強調された。戦前、国家神道のもとで神道は単なる「宗教」を超えた国家の精神的支柱として機能していた歴史があり、この独特な捉え方はインド人学生にとっても非常に印象深く受け止められていた。

また、現代日本でも度々議論となる首相の参拝問題に関連し、靖國神社の起源と変遷についてお話された。元来、同神社は近代日本国家の設立に尽力し、戦死した人々を祀るために建立されたものである。当時は「聖戦」において貢献した人々を「英霊」と位置づけていたが、第二次世界大戦での敗戦により、そうした認識は大きく覆されることとなった。あわせて、当時の歴史的経緯から、中国や韓国出身の人々も不本意ながら合祀されているという複雑な事実についても学びを深めた。質疑応答では、「不本意に合祀された外国人戦没者の分祀を行わないのか」という核心的な質問が出された。これに対し宮司様からは、合祀は当時の政府の決定に基づくものであり、政教分離により国家から独立した現在の靖國神社としては個別の変更が困難であること、また一度歴史的な祀り方の基準を変更すれば「どこまで歴史を遡って見直すべきか」という境界線が曖昧になるという懸念について、誠実かつ明確なお答えをいただいた。説明を受けた後は、本殿に移動し、参拝する機会をいただいた。お神酒をいただくなど本格的に体験させていただいた。インド側実行委員はお神酒に深く関心を持っていたことが印象的だった。

独特な歴史を持ち、過去の記憶と現代の課題が交錯する靖國神社を訪問できたことは、日本の歴史観や戦後価値観を多角的に理解する上で、インド人学生のみならず日本人学生にとっても極めて有意義な時間となった。

湯屋利里子



（７）慶應義塾大学「NEXT」

8月27日(木)、慶應義塾大学国際関係会「NEXT」様にご協力いただき、慶應義塾大学を訪問した。三田駅から徒歩で移動する途中には東京タワーが見え、その姿を目にして興奮するインド側メンバーの様子も見られた。慶應義塾大学三田キャンパスに到着すると、立派な東門が私たちを迎え、その壮大さに圧倒された。インド人学生は、インドの大学のキャンパスとは全然違うと話していた。

NEXTメンバーの皆様と合流すると、まずは図書館旧館を訪問した。2階の慶應義塾史展示館では、慶應義塾大学の歴史や福沢諭吉に関する資料が展示されており、大学が築いてきた長い歴史について理解を深めることができた。

その後、場所を南館へ移動し、NEXTメンバーの皆様と分科会ごとに分かれて、それぞれのテーマについてディスカッションを行った。Cultureの分科会に所属している私は、NEXTの皆様が実際にインドを訪れた際に感じた食文化や生活習慣について話を伺った。食文化については、インドにおける料理を複数人で共有する文化と、日本における一人一品を注文するスタイルの違いについて話し合った。そもそもインドには一人で食べる文化はなく、二人前以上のメニューしかないなど、日本では馴染みのない文化に興味が湧いた。インド料理店で働いているNEXTの方は、働きながらその文化を実感しているそうだ。

また、日本とインドでは紅茶の飲み方や文化が大きく異なるという話題でも会話が弾んだ。特に印象的だったのは、インド側のメンバーが日本で紅茶を飲んだ際、紅茶が冷たいことに驚いたというエピソードである。インドでは温かい紅茶を飲むことが一般的であるため、冷たい紅茶を飲むという習慣は想像もしていなかったそうで、これが最も大きなカルチャーショックだったと話していた。こうした身近な文化の違いを共有することで、互いの国への理解を深めることができ、終始和やかな雰囲気の中でディスカッションを進めることができた。さらに、NEXTのメンバーの中にはインドのダンスを習っていた方もおり、インドの文化やダンスについても話を広げることができた。実際にインドを訪れたメンバーならではの視点や現地での経験に基づく意見を共有し、新たな気づきや発見を得ることができた非常に有意義な議論となった。

松井彩加



（８）スズキ株式会社

スズキ株式会社では、湖西工場とスズキ歴史館を訪問し、スズキのものづくりに加え、日本とインドの経済的なつながりや、外国人労働者の受け入れをめぐる課題について学んだ。工場見学や社員食堂での昼食、インド人社員の方々とのグループディスカッションなど、さまざまな活動を通じて、企業活動の中にある日印関係と多文化共生の現状を知る一日となった。なお、今回の訪問にあたっては、四輪インド事業部の飯田様、小池様にスケジュール調整をはじめ、多大なるご協力をいただいた。

まず、湖西工場の見学では、日本の製造業が直面する労働力不足と、それを支える外国人労働者の存在について知ることができた。同工場では、従業員の約30％を外国人が占めているという。実際の生産ラインでは、部品の組み立てを効率化するための仕組みや、部品の取り忘れを防ぐためのアラームなど、品質と生産効率を両立させるさまざまな工夫が見られた。また、作業員が立ったまま作業できるように工程を設計するなど、働く人の身体的な負担を軽減する取り組みも印象的であった。こうした高度な生産体制が、機械や設備だけでなく、多くの人々の技術と労働によって支えられていることを実感した。

特に興味深かったのは、スズキの日本とインドの生産体制のつながりである。見学したジムニーのラインでは、輸出先の国ごとに異なる法律や規制に対応するため、複数種類のエンジンが使い分けられていた。また、5ドアのジムニーは日本国内ではなくインドで生産され、日本へ輸入されているという話も印象に残った。これまで自動車の生産は、どちらかといえば日本での生産が多いから日本が海外から車を輸入することはないというイメージを持っていたが、実際には国境を越えた生産・供給体制によって成り立っていることを知った。特にスズキにとってインドは、生産拠点としても重要な役割を担っている。日本とインドの関係を考える際、文化交流や外交だけでなく、企業活動や産業を通じた結びつきにも目を向ける必要があると感じた。

一方で、現場における外国人受け入れの難しさや、雇用システムのリアルについても深く考えさせられた。受入時には通訳をつけてトレーニングを行い、1回あたり10人程度の教育を実施しているそうだが、言葉の壁は高く、スマホの翻訳機を使っても意思疎通が難しい場面が多いという。また、スズキでは海外人材の採用に派遣や請負の形態をとっており、スズキ自身が直接雇用するケースは限られているため、日常生活のサポートなどは派遣会社が担っている。インド現地での雇用も基本は派遣であり、日本と違ってストライキが頻繁に起こるおそれがあるため本採用はせず、最長2年という期間を設けているそうだ。

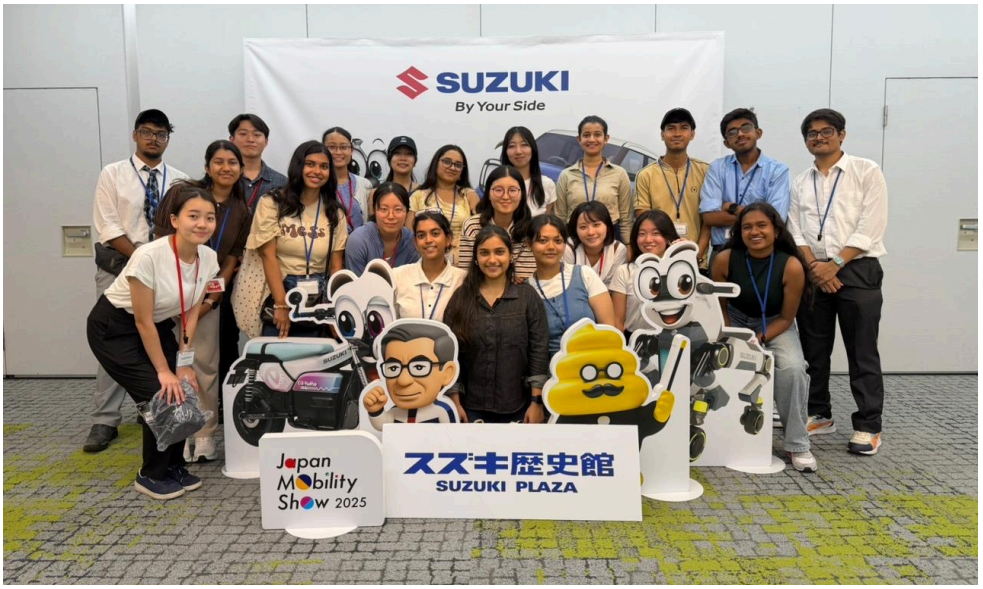
言語だけでなく、働く上での意識や文化の違いも現場の大きな課題だ。自分本位な動きをしてしまったり、導入教育の場で話を聞かなかったりする人もいるらしく、そうした場合には毅然と注意し、時には「スズキに合わない人は受け入れない」という厳しい判断をすることもあるという。特にインドは地域によって言語も文化もバラバラなため、多様な背景を持つ人々をひとつにまとめる管理の難しさを痛感した。

午後はスズキのインド人社員の方に各分科会に参加していただき、グループディスカッションを行なった。実際に日本で働くインド出身の方々の生の声を直接聴くことができた。スズキ株式会社内の食堂には様々な種類の食事が用意されており、いろんな人の宗教や考えにも対応しているものの、社外での日常生活における切実な苦労がたくさん語られた。例えば、牛肉が食べられない、あるいは完全なベジタリアンであるため食事の選択肢が極めて限られていること、日本の食品表示にはアレルギー項目に「魚」の記載がなく困っていることなどが挙げられた。

さらに生活習慣の違いとして、タイムマネジメントの難しさや、日本のサイレンスに馴染めないという意見も印象的だった。特に週末は誰とも話す機会や交流の場がなく、孤立感を感じやすいという課題は、私たちが多文化共生を考える上で重要なポイントだと感じた。

ものづくりの技術力の高さに驚いた一方で、異なる文化や言語を持つ人々が一緒に働く中で、さまざまな難しさもあることを知った。技術面だけでなく、実際に働く人たちの視点からも学ぶことができ、貴重な経験となった。

今井千遥



（９）浜松市産業部 労働政策課

8月28日(金)、浜松市役所を訪問し、外国人住民、特にインド出身者への取り組みについて話を伺った。浜松市は静岡県西部に位置する政令指定都市であり、人口は約75万人、県内最大の規模を誇る。浜名湖に面し、豊かな自然に恵まれた地域でもある。同市の人口のうち、外国籍住民は約3万1500人であり、その中でインド国籍者は655人で、外国籍住民全体の約2%を占める。4年前の約2倍に増加しており、近年急速に存在感を高めている。

浜松市がインド人材の受け入れに積極的である背景には、同市の産業史が深く関わっている。浜松は江戸時代から綿織物の産地として栄え、その織機製造の技術を基盤に、明治以降は楽器、オートバイ、自動車といった機械産業が発展した。ヤマハ、スズキ、河合楽器製作所など、世界的企業が相次いで誕生した「ものづくりのまち」である。中でもスズキは、1980年代にインドへ進出し、現地企業との合弁を通じてインドの自動車市場で圧倒的なシェアを築いてきた。こうした歴史的な結びつきから、浜松とインドの間には産業面での強い関係が育まれてきた。さらに市は、2年前からインド人材の積極的な受け入れを方針に掲げている。その理由として、第一にインド人材がデジタル分野に強く、人口規模も大き

いこと、第二に日本全体で人口減少が進み、特に地方都市では人口流出が深刻な課題となっていることが挙げられる。実際、市内の工場ではインド出身者が多く働いているとのことである。

受け入れに向けた支援も多岐にわたる。市民との交流の場として「浜松インディアフェスティバル」を開催しているほか、IIT（インド工科大学）へ市内企業の採用担当者を派遣し、マッチングイベントを実施している。その結果、市内のある企業が7名の学生を採用した事例もあるという。

特に印象に残ったのは、就労者本人だけでなく、その家族を含めたコミュニティづくりや生活オリエンテーションに力を入れている点である。例えば、夫婦で来日した場合、妻が日本での生活になじめず帰国を望めば、夫も帰国せざるを得なくなる可能性がある。家族が安心して暮らせる環境を整えることは、就労者の定着にも直結する。このような細やかな配慮に強い関心を抱いた。加えて、支援情報を住民登録時に配布するウェルカムパックに盛り込むなど、必要な人に確実に情報を届ける工夫がなされている点にも感銘を受けた。

また、市職員の方々は終始親切かつ温かく対応してくださった。質疑応答の予定時間を超過したにもかかわらず、「まだ質問があれば付き合いますよ」と声をかけていただき、沢山のお菓子やお土産まで頂戴した。学生のために丁寧に時間を割いてくださったことに、心より感謝している。

今回の訪問を通じて、浜松市が人口減少という課題と、インド人材という強みを結びつけ、企業との連携から家族への支援に至るまで、包括的な受け入れ体制を構築していることを学んだ。とりわけ「働く人だけでなく家族も支える」という視点は、外国人が長く安心して暮らせる地域をつくるうえで不可欠であると考える。この学びを今後の活動に生かしていきたい。

滝川彩希



（10）浜松市国際交流協会

浜松市国際交流協会（HICE）では、外国人住民の受け入れや浜松市と行っている取り組みについてお話を伺った。浜松市は古くから多文化共生が進んでおり、多様性を受け入れる土壌がある街だ。浜松市には、約3万人の外国人住民が暮らしており、総人口の約3.8％を占める。また、87の国・地域の出身者が暮らしており、多国籍化が進んでいる。国籍別ではブラジルが約9,700人（32.5％）と最も多く、次いでベトナム約4,800人、フィリピン約4,700人となっている。インド人住民に関しては、10年前には181人だったのに対し、2026年4月時点では675人となっており、10年間で約3.7倍に増加している。

今回のお話を通じて、日本人住民が外国人住民を柔軟に受け入れてきた歴史や、その寛容なまちの風土について実感することができた。具体的には、外国人住民が直面する日常的な言葉の壁（学校のプリントや病院での説明など）や、日本で育つ子どもたちの「学習言語」の壁による進学の難しさ、災害時の支援や格差是正の取り組みなど、現場ならではのリアルな課題について詳しく学ぶことができた。

HICEで外国人住民を取り巻く現状や支援体制についてお話を伺った後には、学生からも多くの質問が出た。例えば、「日本語教室や地域のお祭りなどをきっかけに、外国人住民同士だけでなく日本人住民とも交流するようになるのか」といった質問が出た。また、宗教や文化の違いについても質問があり、「特定の宗教を持たない外国人や、既存のコミュニティに入りにくい人は、どこで地域とのつながりを作ることができるのか」といった点についても話を伺った。

このように、HICEでは、制度としてどのような支援が用意されているかだけでなく、「その支援を必要としている人が、実際にどのように地域とつながるのか」という点に学生たちの関心が向いていた。こうした疑問をきっかけに、外国人が日本で働くことを考える際には、採用や職場環境だけでなく、言語、家族、地域コミュニティなど、仕事の外側にある生活環境まで含めて考える必要があることを学んだ。その後の分科会での議論や発表準備においても、この視点が重要な軸の一つとなった。

齋藤良美



5. 開会式・文化交流会

【開会式】

8月21日(金)、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、第30期日本インド学生会議の開会式が開催された。来賓やOB・OGの皆様など約10名にご出席いただいた。

開会の辞に続き、日本側・インド側の実行委員長が挨拶を行い、本会議に懸ける思いを述べた。来賓挨拶では、India-Japan Student ConferenceのOB16期であるSupratik Sil Roy様よりお言葉をいただいた。また、公益財団法人日印協会理事長の齋木昭隆様から事前に頂戴したお言葉を代読した。OB・OG代表挨拶では、第5期日本インド学生会議のOGである菱沼智子様より、これまでのご経験を踏まえた温かいお言葉をいただいた。さらに、在日インド大使館一等書記官のMr. Umesh Nautiyal様にもご出席を予定していただいていたが、当日はトラブルにより、残念ながら開会式へのご出席が叶わなかった。ご多忙の中、ご出席を予定してくださっていたことに、改めて御礼申し上げたい。

続いて、ご出席の皆様と第30期実行委員の紹介、本会議のスケジュール説明を行った。インド側の学生による出し物では、コルカタ、チェンナイ、ミゾラムなど、それぞれの出身地域の文化を反映したダンスや歌が披露された。学生たちのパフォーマンスを通じて、インドの多様な文化に触れる機会となった。また、インド側から贈り物もいただき、両国の交流の始まりを感じる、温かな開会式となった。閉会の辞の後には、出席者全員で記念撮影を行った。

開会式後は、センター内のだしラボカフェにて懇親会を開催した。懇親会にはOB・OGや活動を支えてくださっている方々など約20名の皆様にご参加いただき、食事を囲みながら交流を深めた。世代を越えて日本インド学生会議に関わる方々が一堂に会し、これまでの活動や今期の取り組みについて語り合う、貴重な機会となった。

齋藤良美



開会式に出席いただいた皆様との記念写真



開会式後に駆けつけてくださった
Mr. Umesh Nautiyal様（写真中央）

【文化交流会】

8月21日 (金)、開会式に先立ち、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、文化交流会を実施した。両国の学生がそれぞれ企画を用意し、実際に体験しながら互いの文化に親しむ時間となった。

日本側は福笑いと書道を紹介した。インド側の学生にも実際に筆を持って、日本の文化を体験してもらい、日本側の学生が書き方を伝えながら、「日印」「印度」や名前、書きたい文字を自由に書いてもらった。

インド側は、ビンゴに似たゲーム「タンボラ（Tambola）」を紹介してくれた。「Housie」とも呼ばれるこのゲームを、日印の学生が一緒に楽しんだ。書道とゲームという異なる活動を通じて、互いに教え合い、実行委員の距離を縮める機会となった。

本会議初日に、文化の紹介を聞くだけでなく、ともに体験する時間を持てたことは、その後の共同生活や議論に向けて、親しみを深めるきっかけとなった。

齋藤良美





6. ホームビジット

8月30日 (日)、インド人の実行委員が、日本人の家庭へ訪問する、「ホームビジット」を実施した。当日は6班に分かれ、滝川が3名、細井が2名、麻島が2名、今井が2名のインド人学生をそれぞれ受け入れた。また、日本インド学生会議のOGである豊原智恵様、菱沼智子様にも2名のインド人学生を受け入れていただいた。以下は、細井家のホームビジットの様子である。

細井家ではArinさんとKimayaさんの2名を迎えた。まず、2人の希望に合わせて明治神宮を訪れ、絵馬を書いた後、歩いて原宿を散策した。原宿ではアクセサリーを購入し、ヴィーガンラーメンが食べられる「AFURI」で昼食をとった。Kimayaさんはヴィーガンであることから、本会議期間中に食事の制限が多く苦労していたので心配していたが、AFURIのラーメンを口にすると、とても美味しいと喜んでくれて、私まで嬉しくなった。コルカタで食べたラーメンよりも格別に美味しかったそうだ。そしてなんと翌日にも別の店舗のAFURIを食べに行っていた。食事の後は渋谷へ移動し、Arinちゃんが購入を希望していたNIKEの靴を買ってから、電車で自宅へ向かった。

自宅に到着すると、2人がインドから持ってきてくれたプレゼントを受け取った。私のためにインドからわざわざプレゼントを持ってきてくれたことがとても嬉しく、2人の心遣いに心が温まった。夕食には、ミゾラム州出身でノンベジタリアンのArinさんの希望に合わせて、両親に和牛を用意してもらった。また、ヴィーガンのKimayaさんにも食事を楽しんでもらえるよう、好みの具材を選べる手巻き寿司を用意した。二人とも、「美味しい、美味しい！」と何度も言いながらたくさん食べてくれ、そんな姿を見て食事を準備してくれた両親もとても嬉しそうだった。食の好みや習慣が違っていてもそれぞれが楽しめる食事を一緒に囲めたことが嬉しかった。

食後には自宅付近で線香花火を楽しみ、日本の夏ならではの風景を見られたことも、思い出深い。インドの花火は音が大きいらしく、このように火花が静かに散るのを楽しむのは新しい体験だと教えてくれた。

最後はオリセンで解散した。帰り道には、皇居付近の道路の広さに2人が感動していたのも印象に残っている。普段何気なく目にしている東京の街並みも、海外から来た友人の目を通して見ると、また違った魅力を持っていることに気づかされた。日常の中にも紹介できる日本の魅力がたくさんあるのだと感じた。観光地を案内するだけでなく、自宅で食事を囲み、花火を楽しむ時間を通じて、お互いの日常や文化に触れられたことが、ホームビジットの大きな魅力だと感じた。

細井柚季

7. 分科会

事前協議で決定した本会議テーマをさらに細分化し、4つの分科会を設置した。各分科会で集中的なディスカッションを行い、それぞれが設定した問いに真摯に向き合った。最終日にはプレゼンテーションの機会を設け、議論の成果を全体で共有した。以下に、各分科会の概要を示す。

── 職場環境 分科会 ──

【分科会1 メンバー】

日本側：細井柚季/ 麻島由香
インド側：Aditya Prasad / Anurag Das / Kimaya Thakkar

【活動目的、内容】

本分科会では、日本政府がインドの高度人材の受け入れを推進していることを背景に、日本で働くインド人材が職場でどのような課題に直面しているのか、また、その課題が生じる要因は何かを明らかにし、インド人材により長く日本で働いてもらうために必要な環境や取り組みについて考察することを目的とした。

具体的には、実際の職場における業務の進め方や評価基準、コミュニケーションの方法などが、外国人材の働きやすさや定着にどのような影響を与えるかを探った。日本とインドの職場環境や組織文化を比較しながら、業務で使用される言語（日本語・英語など）の実態や、年功序列、意思決定の進め方といった組織の特徴について議論を進めた。また、企業や業界によって外国人材の受け入れ体制や運用方法にどのような違いがあるのかを整理し、それらの違いが日々の業務や職場での人間関係、働きやすさに与える影響について考察した。

さらに、外国人材が職場に定着している事例と離職につながる事例を比較し、その背景にある要因や企業側に求められる取り組みについて検討した。これらの議論を通じて、異なる文化や価値観を持つ人々が互いに理解を深め、それぞれの能力を発揮しながら働き続けられる職場環境のあり方を探った。

【分科会から得たこと】

本会議に先立ってZoomで実施したインド学生との事前学習では、分科会内でリサーチ手法についての考え方に違いがあり、議論が難航する場面もあった。しかし、互いの意見をすり合わせる中で研究の目的を共有し、本会議開始前にはリサーチクエスチョンと仮説を設定した上で、調査を進めることができた。調査では、Zoomを活用した質的調査やGoogle Formsによるアンケート調査に加え、企業や関係機関への訪問、インタビューを実施し、複数の方法から日本で働くインド人材の実態を把握することを試みた。

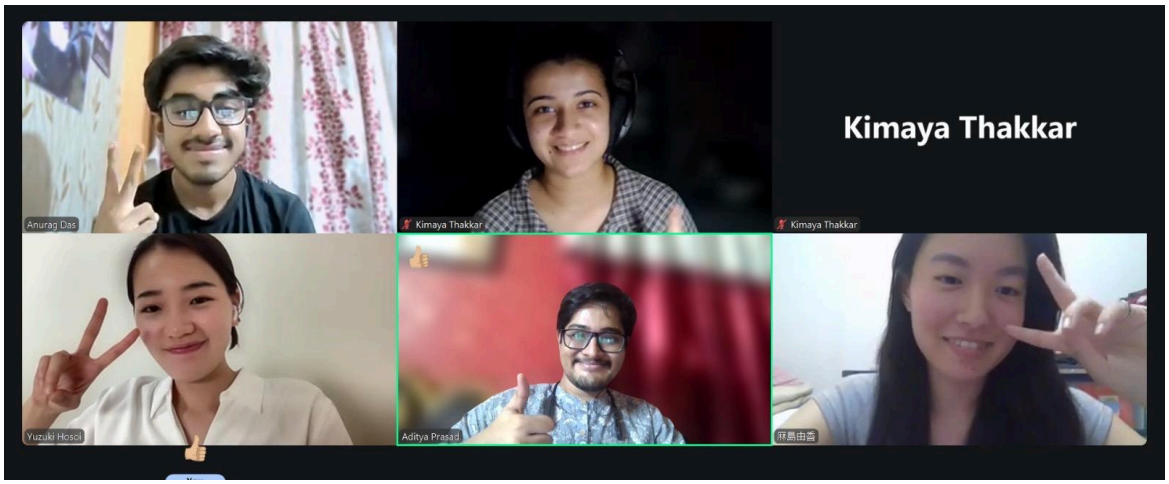
本会議が始まってからは、収集した情報をどのようにつなぎ合わせ、筋道の通ったロジックとしてまとめるかという点に苦労した。議論が行き詰まった際には、既に明らかになっている事実を一つずつ確認するとともに、海外で働く人々がどのような将来設計を描いているのか、また、私たちはどの部分にアプローチすべきなのかについて丁寧に話し合い、議論の前提を確認しながら方向性を修正していった。実際のフィールドリサーチでは、スズキ本社、横浜インドセンター、浜松市役所などを訪問し、日本で働くインド人材を取り巻く環境について、実際に関係する方々から話を伺った。こうした訪問先でのリサーチは、文献やインターネット上の情報だけでは得ることのできない、生の声として私たちの議論を支える重要な材料となった。また、訪問先での取材に加え、各メンバーが持つつながりを活用し、日本で働くインド人へのインタビューも積極的に行った。

調査を通して、日本で働くインド人材にとって、言語の壁が就業中に直面する最も大きな障壁の一つであることが分かった。特に、職場で英語が通じない場合、業務上の指示や同僚との意思疎通が難しくなり、円滑な業務遂行や職場への適応に影響を及ぼす。そのため、英語でのコミュニケーションが難しい職場では、外国人就業者が日本語を習得することが重要となる。一方で、スズキのように英語でコミュニケーションを取ることのできる社員を配置することも、言語面の負担を軽減するための有効な取り組みとして考えられる。つまり、外国人材の受け入れに際しては、就業者側の日本語学習を促すだけでなく、企業側も言語面での支援体制を整えることが必要である。

また、言語面の障壁が比較的小さい場合でも、文化や仕事に対する価値観の違いから、職場での課題が生じることが明らかになった。例えば、インド人材には、自身の就学歴を重視し、これまでに培った知識や経験を生かせる仕事を求める傾向が見られた。そのため、専門性を十分に生かせない業務に従事することは、仕事への満足度や意欲を低下させる要因になり得る。また、日本の職場で見られる飲み会や社内政治についても、インド人材の中には日本人以上に否定的なイメージを持つ人がおり、職場の人間関係や組織文化に対する認識の違いが、働きやすさに影響する可能性がある。一方で、長年日本で働くことを目標とし、実際にその夢を実現した人々については、就業前に抱いていた期待と就業後の現実との間に大きなギャップが見られにくいことも分かった。このことから、就業後の適応状況は、言語能力や職場環境だけでなく、日本で働くことへの事前の期待や目的意識によっても異なる可能性が示唆された。

以上の調査結果から、インド人材が日本で働き続けるためには、専門的な能力や日本語能力だけでなく、本人の価値観と職場環境との適合も重要であると考えた。企業側には、採用時に本人の専門性やキャリア形成への希望を把握し、それらを生かせる業務を提供するとともに、日本特有の職場文化やコミュニケーションの慣習について相互理解を促進することが求められる。また、日本での就業を希望する側にも、日本の職場文化や働き方について事前に理解を深めることが重要である。ただし、外国人材の適応を本人の努力のみに委ねるのではなく、企業側も多様な価値観を尊重し、言語面・文化面の双方から受け入れ環境を整える必要がある。双方が一方的に相手に合わせるのではなく、互いの違いを理解し、尊重し合うことが、より良い職場環境の形成と長期的な就業につながると考えた。

以上のリサーチワーク・議論を通して、本分科会では、日本で働くインド人材の受け入れを考える際には、専門的なスキルのみならず、言語、文化、キャリアに対する価値観、職場環境といった複数の側面から捉える必要があることを学んだ。また、外国人材の定着を実現するためには、就業者側の適応努力だけでなく、企業や地域社会が受け入れ環境を整え、一人ひとりの能力や価値観を尊重することも重要であるという認識を、分科会メンバー間で共有することができた。


Anurag Das
Kimaya Thakkar
Kimaya Thakkar
Kimaya Thakkar
Yuzuki Hosoi
Aditya Prasad
林島由喜

―― キャリア 分科会 ――

【分科会2 メンバー】

日本側：関秀仁 / 滝川彩希

インド側：Soham Dutta / Tushnee Chatterjee / Ramakrishnan Srivaishnavi / Sangbad Mazumder

【活動目的、内容】

本分科会(キャリア)では、インド人学生が日本での高等教育・就職・定住に対して抱く期待を明らかにし、日本の大学および企業がその期待にいかに応えうるかを考察することを目的とした。さらに、実践的経験が職業的自信や職場適応力の形成にどのように寄与しているかを検討した。

近年、日本は少子高齢化に伴う労働力不足が深刻化し、海外人材の受け入れが不可欠となっている。一方、インドは世界有数の若年人口を有し、毎年数百万人規模の大学卒業生を輩出している。両国の人材需給は相互補完的であるが、日本企業に就職するインド人卒業生は米国、ドイツ、シンガポールなどと比べて少ない。また、日本で学ぶインド人留学生は増加傾向にあるものの、日本を長期的な生活とキャリアの場ではなく、一時的な滞在先と捉える学生が少なくない。この背景には、長期雇用や年功序列、合意形成型の意思決定を特徴としてきた日本と、キャリアパスの透明性や実力に基づく昇進を重視するインド人学生との間の、価値観の相違があると考えられる。

このような情勢を踏まえ、本研究では「インド人学生の期待は、教育の質、就職機会、異文化への準備状況、職場への包摂、将来のキャリア発展などが相互に関連して形成され、とりわけ昇進の透明性や成長機会が長期的な就業意欲を左右する」という仮説を設定した。加えて、インターンシップや交換留学といった実践的経験が、職業的自信と職場適応力を高めると想定した。検証にあたり、日本で学ぶインド人学生、日本人学生、来日を検討中のインド人学生を対象に調査を実施し、認識の差異を比較した。さらに、スズキ株式会社のインド人エンジニアおよび慶應義塾大学の学生への聞き取り調査を行い、職場や学生生活における実態を調査・分析した。

【分科会から得たこと】

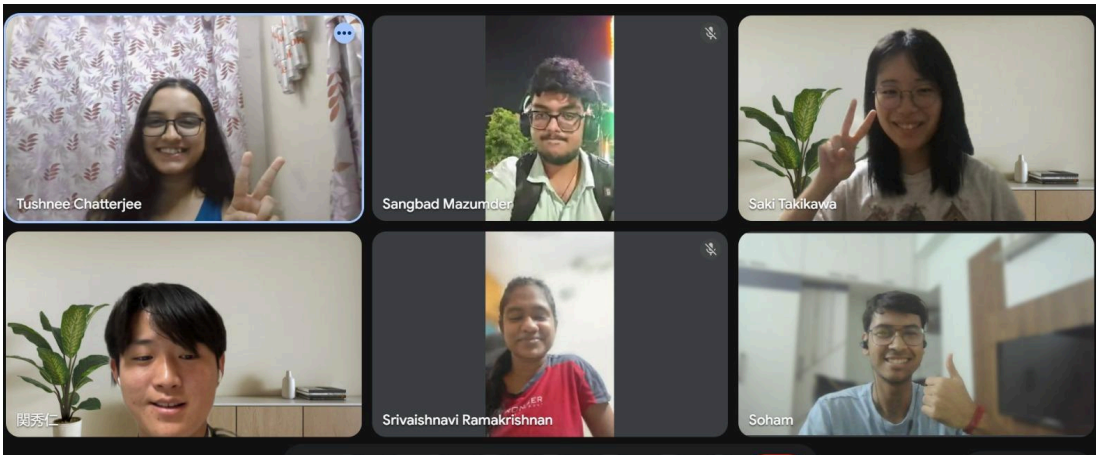
調査の結果、まず、実践的経験が職業的自信の形成に寄与することが示された。日本在住のインド人回答者は全員がインターンシップや交換留学などの経験を有しており、それらによってキャリアに対する自信が高まったと回答した。

次に、言語の壁は日印双方に共通する課題であることが明らかとなった。日本在住のインド人回答者は、日本語を中心とする言語面の負担を生活上の障壁として挙げた。日本人学生も、海外へ出る際の障壁として自身の語学力(55%)を挙げており、同一の課題が、来日する側と出国する側の双方にとって障壁となっている。

また、企業選択において雇用の安定を重視する回答者が多く、給与のみが決定要因ではないことも示唆された。インド人回答者は、「雇用の安定」や「職務内容の明確さ」を特に重視していたが、「初任給」を挙げた者も一部みられた。日本人学生においては、昇進の道筋の明確さを給与以上に重視する傾向が顕著であった。

さらに、上下関係や年功序列といった職場文化については、来日前の予想と来日後の認識が同程度であった。ただし、来日前にこうした職場文化を理解しておくことの重要性は否定できず、今後の検討課題としたい。

以上を踏まえ、企業に対しては、昇進基準を外国人と日本人の双方にとって理解しやすい形で明示することが、人材の誘引と定着の観点から重要であると考察した。加えて、日本の大学・企業に対し、研修から就職に至る過程の可視化、日印間における資格・能力評価基準の整合化、日本語試験等の受験機会の拡充、為替変動下においても日本で就業を継続したいと思える環境の整備を提言した。



── コミュニティ　分科会 ──

【分科会メンバー】

日本側：齋藤良美 / 湯屋利里子
インド側：Amrita Guha / Ranjabati Chattopadhyay / Zorinsangi Bawlchhim

【活動目的、内容】

本分科会では、インド人材に対する日本の就労支援において、地域社会・自治体・企業が担う取り組みとその課題を明らかにすることを目的とした。さらに、それらのサポートが外国人労働者の日本社会に対する「帰属意識」の形成にどのように寄与しているかを考察した。

近年、日本の外国人労働者政策は、従来の「専門的・技術分野」への限定から、深刻な人手不足に対応する方向へと大きく転換している。1993年に導入された「技能実習制度」により実質的な労働力が補充されてきたが、2019年の「特定技能制度」創設によって、建設や介護などの分野における即戦力外国人の就労が正式に解禁された。さらに2024年の法改正に伴い、2027年からは人権への配慮や転職制限の緩和を盛り込んだ「育成就労制度」へ移行する予定である。

これらに伴い、国内の外国人労働者数は急増しており、2014年の約78万人から2024年には過去最多の約230万人に達するなど、日本の社会・産業を支える不可欠な存在となっている。

このような情勢を踏まえ、本研究では外国人労働者が直面する課題の一つである「地域社会における帰属意識」に着目した。行政による公的サポートに加え、地域のお祭りや宗教団体などが提供する「日常的な非公式サポート」、さらには企業の受け入れ施策の役割や課題を調査・分析し、何が彼らの帰属意識向上に真に寄与しているのかを考察した。

【分科会から得たこと】

本会議前の事前準備では、まず「地域社会」という広いテーマから仮説を設定した。分科会で扱う領域が多岐にわたっていたため、まずは「国境を越えて働く」における「地域社会」の定義やイメージを共有した。その後、文献調査を通じて先行研究への学びを深める中で、外国人労働者が日本で働く上での課題の一つである「帰属意識の形成における地域社会の役割」に着目した。先行研究より、外国人労働者への支援には行政による「公的支援」と、地域生活に根ざした「日常的支援」が存在することを学び、両者を比較することにした。これに基づき、「外国人労働者が日本で帰属意識を醸成するためには、公的支援と日常的支援の双方が不可欠である」という仮説を立案した。調査手法には半構造化インタビューを採用した。多様な主体から具体的なエピソードを得つつも、比較検討を可能にするため、一定の構造を持たせた調査設計が最適であると判断した。

本会議期間中には、当事者および支援者双方の多角的な視点を集めるため、志村カトリック教会や「Job is well」へのインタビューをはじめ、スズキ本社、横浜インドセンター、浜松市役所等への訪問ヒアリ

ングを実施した。特に志村カトリック教会では、年齢、国籍、在留期間を問わず、多様な背景を持つ人々から話を聞くことができた。これらのインタビューを通じて、教会に代表される地域コミュニティは、外国人労働者が日本社会で必要なサポートを見出し、享受するための重要な拠点として機能していることが明らかになった。

一連の調査と議論を経て、行政などの「公的機関」がコミュニティと繋がる「機会」を提供し、教会や寺院といった「具体的な地域コミュニティ」が「実質的な地域との繋がりと帰属意識」を生み出すという役割分担の構図が明確化された。一方で、無宗教者がコミュニティにアクセスしにくい現状や、言語の壁、公的支援の不確実性、障害を持つ外国人居住者の就労機会不足といった課題も浮き彫りとなった。

以上の分析から、今後の多文化共生社会の実現には、①日本語教育の拡充、②家族を含めた包括的な移住政策、③地域交流プログラムの創設、④多言語による情報提供、⑤職場定着支援の強化、が不可欠であるという結論に至った。特に浜松市で実施されている先進的な取り組みは、今後日本各地の地域社会が目指すべき重要なモデルケースになると捉えている。



── 文化 分科会 ──

【分科会メンバー】

日本側：今井千遥 / 松井彩加
インド側：Senjuti Mazumder / Saanvi Mitra / Dwija.M

【活動目的、内容】

文化分科会では、日本人とインド人がこれからの未来の社会で共に働くうえで文化、主に宗教、食文化、エチケットを通してどのような問題があるのか、そしてその解決策を考えた。また、この3つが「文化的な架け橋」になり得るのかという観点においても調べた。文化の違いを単に「異なるもの」として捉えるのではなく、その背景にある価値観を理解し、互いの文化に実際に触れ、対話することで、異文化理解を深めることができると考えた。本分科会を通して、日本とインドの若者が互いの文化を尊重しながら理解を深め、将来、異なる文化的背景を持つ人々と共に生活し、働くための力を身につけることを目指した。

【分科会から得たこと】

文化分科会では、宗教、食文化、エチケットを切り口に、日本とインドの文化的な共通点と相違点を調査し、異なる文化的背景を持つ人々が共に生活し、働くために必要なことを考察した。横浜インドセンターや国際交流団体、神社、企業などへの訪問に加え、インド人メンバーとの継続的な議論を通じて、文化の違いが実際の生活やコミュニケーションにどのような影響を与えるのかを考えた。

横浜インドセンターでは、日印の企業文化やコミュニケーションの違いについて学んだ。例えば、日本では相手の意図を直接言葉にしなくても場の空気や文脈から読み取ることが重視される一方、インドでは言葉によって明確に意思を伝えることが重要とされる、という違いである。この違いは、職場での指示の受け取り方や、相手が何を期待しているのかという認識のずれにもつながり得る。日本では言わなくても伝わると思っていることが、異なる文化的背景を持つ相手には伝わっていない可能性がある。反対に、率直に意見を伝えることも、相手や場面によっては異なる受け取られ方をする可能性がある。文化の異なる人々が共に働く際には互いの伝え方の特徴を理解し、必要な情報を明確に共有することが重要だ。一方で、両国とも契約や制度だけでなく、人とのつながりや信頼関係を大切にするという共通点もあることを知り、表面的な違いだけでなく、その背景にある価値観に目を向ける必要性を感じた。

また、日印の企業文化について学んだことは、将来のキャリアや職場環境にも関わる問題として捉え直すきっかけとなった。日本で働くインド人にとっては、専門的な能力があることだけでなく、日本特有の時間感覚や報告・連絡・相談、明文化されていない職場の期待を理解することも重要になる。それを外国人側の努力だけに任せるのではなく、受け入れる企業側も期待やルールを明確に伝える必要がある。文化の違いによって生じる問題を双方の認識の違いとして捉え、解決策を考える視点を得ることができた。

神社など、日本の宗教文化に触れる機会も、文化を比較する上で重要な経験となった。宗教というと、特定の信仰を持つ人々のためのものと捉えがちだが、実際には地域の歴史や習慣、年中行事、人々の生活にも深く関係している。異なる宗教的背景を持つ人と一緒に日本の宗教文化に触れることで、自分たちが普段何気なく行っている習慣についても、その意味や背景を改めて考える必要があると気づいた。相手の文化を理解するためには、自分の常識を基準に判断するのではなく、なぜその習慣が大切にされているのかを知ろうとする姿勢が必要だと感じた。

また、国際交流団体や外国人住民に関わる取り組みについて学ぶ中で、異文化共生には個人同士の理解に加え、人々が自然に交流できる環境も必要だと考えるようになった。文化や言語の違いがあると、互いに関心を持っていても、話しかけるきっかけがなかったり、意思疎通への不安から交流をためらったりすることがある。そのため、異なる文化を持つ人々が出会い、食事や地域活動などを通じて自然に関係を築ける場が重要になる。制度や支援を整えるだけでなく、日常的な交流を積み重ねることが、相手への理解や信頼につながると学んだ。

今回の活動で特に大きな学びとなったのは、インド人メンバーと議論を重ねる中で、インドの文化を一つの固定的なものとして捉えることはできないと実感したことである。インドは多様な宗教や言語、地域文化を持つ国であり、同じインド出身のメンバーであっても、考え方や経験はそれぞれ異なる。議論を通じて相手の考えを聞き、自分の意見も伝えることで、事前に持っていたイメージを見直しながら理解を深めることができた。

また、宗教や食文化、生活習慣には違いがある一方で相手をもてなすこと、人とのつながりを大切にすること、互いを尊重することなど、共通する価値観も存在する。文化の違いがどのような場面で問題となり、どのような工夫によって乗り越えられるのかを考え、双方が自分たちの価値観を振り返り、必要に応じてコミュニケーションや環境を調整していくことが大事だとわかった。



8. 修了証

西本達生様（公益財団法人日印協会 副理事長）、長浜浩子先生（JISC創設者/アドバイザー）、広瀬公巳先生（JISC顧問 / 近畿大学国際学部国際学科 教授）の3名より、直筆サインをいただいた。下図は、修了証の一例。



30TH JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE

SUPPORTED BY
Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA), Embassy of India in Japan, The Japan-India Association, Japan International Cooperation Agency (JICA), Japan External Trade Organization (JETRO), Japan National Tourism Organization (JNTO), The Japan Foundation

SPONSORED BY
Dentsu Scholarship Foundation, Mitsubishi UFJ Foundation, Sojitz Foundation

THIS CERTIFICATE IS PRESENTED TO

Yuzuki Hosoi

a student at Keio University, Faculty of Law
in recognition of their contributions as President of the Japanese Students' Team
at the 30th Japan India Student Conference, held in Tokyo and Hamamatsu from 21 to 31 August 2026.

Date: 31 August 2026

HIROMI HIROSE
ADVISER, JISC

TATSUO NISHIMOTO
VICE PRESINDENT
THE JAPAN-INDIA
ASSOCIATION

長浜浩子
HIROKO NAGAHAMA
FOUNDER &
ADVISER, JISC

9. 日本側実行委員の感想・インド側実行委員からのメッセージ

（１）細井柚季

私が初めてインドを訪れたのは2023年のことだ。コルカタ、バラナシ、ガヤ、デリーを巡る旅だった。当時の私は、インドについてほとんど何も知らなかった。今も、知っていることより知らないことの方がずっと多い。ラダックからカンニャクマリまで旅をしても、この国を一つの言葉で説明することはできない。

2024年8月にインドでの生活を始めたばかりの頃、私は自分がこの国で何をできるのか、よくわかっていなかった。住む場所を探すことや、銀行口座を開くこと、日々の買い物をすることなど、ひとつずつ誰かに教えてもらう必要があった。そんな生活の中で、私は本当に数えきれないほど多くのインド人に助けられてきた。インドに来てから、私は何度も誰かの家に招かれた。気がつけば、私はずいぶん多くのものをこの国の人から受け取っていたのだと思う。

いつか自分も、誰かを迎える側になりたいと思った。実行委員長を引き受けた背景には、そんな思いがあった。今度は、インドの学生たちに日本を好きになって帰ってもらいたいと思った。もちろん学生会議から学びを得つつも、インド人の学生に対して、自分ができる限り最大のおもてなしをしたいと考えた。

そして、8月20日、いよいよインドの学生たちが日本に到着した。

実際に活動が始まると、毎日は想像をはるかに超えて慌ただしかった。実行委員長という立場にいながら、自分の未熟さを感じることも少なくなかった。全員の意見を聞きたいと思う一方で、決断しなければならない場面もある。誰かのために良かれと思ってしたことが、必ずしも相手にとって良いとは限らない。参加者にとって何が最善なのかを考えながら、限られた時間や人手の中で判断を重ねることは、想像していた以上に難しかった。

11日間の会議で一番印象に残っているのは、駐日インド大使であるマリック氏との面会だ。大使はおよそ1時間にわたって私たち学生のために時間を割き、どんな質問にも答えてくださった。私は実行委員長としてJISCの団体説明をしたほか、これまでのインドでの経験について話し、好奇心の赴くままにマリック大使にたくさん質問させていただいたりした。すると、大使からこんな言葉が飛んできた。

”You spoke too much. Does anyone else have any questions for me? Come on, you are speaking with the ambassador of India. Japanese women, speak up! “

目の前の大使の姿には圧倒された。まっすぐこちらに向けられる眼差しは力強く、太い声は部屋の隅まで届きそうだった。大使の「Japanese women, speak up!」という言葉は、私の中に強く残った。もっと自信を持って自分の考えを伝えていいのだと、背中を押してもらったような気がした。いつか自分も、大使のような力強い女性になりたいと思った。また、「日本文化の好きなところや尊敬している部分は何ですか」という大使への質問に対し、オタク文化について熱心に語られたことも印象深い。何かを常軌を逸するほど好きになり、その対象に情熱を注ぐ日本人の姿勢こそ魅力的だと語られた。とても勇気をもらえた。

30期の活動を振り返ると、自分の力不足を感じた場面もたくさんあった。組織を運営することの難しさや、立場や考え方の違う人々の間に立って合意形成を図ることの難しさを、実際に経験して初めて知っ

た。それでも、最後まで一緒に走ってくれた日本側の実行委員、そして遠くインドから参加してくれた13名の学生には、感謝してもしきれない。

インドで受けたものを、日本で返したいと思って始めた30期だったが、活動を終えた今、手元に残ったものは、返したものよりも遥かに多かった。このような貴重な学びの機会をくださった日本インド学生会議のすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げる。

（２）齋藤良美

私は第29期に続き、第30期日本インド学生会議に参加した。昨年は企画局として文化交流会のダンスや出し物を考え、インドを訪れた。今年は副実行委員長兼財務局として、インド側の学生を日本に迎えた。2年連続で参加したからこそ、訪れる側と迎える側の両方を経験できたことが、私にとって大きな学びになった。

第29期は「いのち」をテーマに、インドでの経験を通して日本とインドの関係を幅広く考えた。第30期は「国境を越えて働くこと」をテーマに、キャリアや共生について議論を深めた。「働く」という身近なテーマを一つ取り上げても、両国の学生の考え方や置かれた環境には違いがある。インド側の学生と話すたびに、自分が当たり前だと思っていた日本の姿を見直すことができた。

開会式でインド側の学生が伝統的な衣装を着て踊りを披露してくれたことは、特に印象に残っている。その姿を見て、私は日本の伝統文化を同じように紹介できるだろうか、着物や茶道、華道について自分の言葉で説明できるだろうかと考えた。日本側も文化交流会で書道や福笑いを用意したが、準備をする中で、自分の国の文化にも知らないことが多いと気づいた。

この会議を通して、異なる文化を尊重するためには、自分が育ってきた文化にも目を向けることが大切だと感じた。日本の良さにも、これから向き合うべき課題にも気づかせてくれたのは、インド側の学生との対話だった。共に会議をつくった仲間への感謝を忘れず、2年間で得た出会いと学びを、これからも大切にしていきたい。

（３）関秀仁

私はインドに関する知識や経験が少ない中、漠然とした興味から参加しました。30期日本インド学生会議としてスタートした4月から8月の本会議までの半年間は、応募時の期待をはるかに上回る、素晴らしい出会いと経験に恵まれた日々でした。

財務局としての事務作業や資金管理、企業の方々との連絡など、不慣れな実務の連続に戸惑う場面もありました。それでも、心強い日本側メンバーの支えがあったからこそモチベーションを高く保ちながら本会議に向けた準備を進めることができました。

迎えた8月の本会議では、大使館への訪問や浜松でのフィールドワークを通じ、インド側実行委員と協力しながら学びを深めました。特に日印企業の特性の違いについて議論を交わし、スズキ本社で実際に活躍されているインド人社員の方々の声を聞けたことは、海外で働くということをリアルにイメージするきっかけとなりました。今年度のテーマである「国境を越えて働くということ」について、言語や文化の壁を越えて互いの強みを活かし合うことの重要性を学ぶことができました。

さらに、インド側実行委員と共に日本で過ごす中で、彼らの新鮮な視点を通じて、日本の良さを再発見する場面が多くありました。しかしそれと同時に、彼らから日本の歴史や文化について問われた際、自分自身の理解がいかに浅いかを痛感しました。文化の違う相手と本当に分かり合うためには、まず自分自身の国である日本の歴史や文化についてしっかり学ばなければならないと感じました。

また本会議中、インド側実行委員の積極性やプレゼンテーション能力、好奇心に直接触れたことは、私にとって大きな衝撃でした。彼らの姿勢を間近で体感したことで、自分自身のスキル不足や学業への向き合い方を根本から見つめ直す貴重な機会となりました。

こうして今振り返ると、2週間にわたり寝食を共にし、議論を交わし、喜怒哀楽を共有した時間は、1分1秒が特別であり、私の価値観と世界を大きく広げてくれました。文化や考え方の違いに直面し、戸惑う瞬間もありましたが、日本のやり方を一方的に押し付けるのではなく、「お互いにとっての最適解」を模索するプロセスにこそ、真の意義があるのではないかと実感しました。

最後に、このような機会を得られたのも、長浜先生をはじめ、協賛企業や財団、OB・OGの皆様からのご支援によるものです。心より感謝申し上げます。そして何より、この第30期日本インド学生会議での経験を私にとって生涯の財産にしてくれた日印の素晴らしいメンバー全員に、心から感謝します。この半年間で得た出会いと仲間を大切に、今後も日印関係の発展に貢献できるよう努力を続けていきたいです。

（４）今井千遥

第30期日本インド学生会議を通して、インドについて知識を深めるだけでなく、実際に人と関わりながら学ぶことの面白さを実感した。活動を始めた当初は、インドについて知っていることが想像以上に少なく、勉強会でインドについて学ぶ中で、自分が持っていたインドのイメージが一面的であったことに気づいた。例えば、同じカーストという言葉でも、ヴァルナとジャーティの違いがあることや、インド憲法における差別禁止について知り、これまで当たり前だと思っていた知識を一から見直すきっかけになった。

また、文化分科会では、食事や宗教、生活習慣など、実際に日本とインドの学生が海外で生活する際に関わるテーマについて考えた。単に「日本とインドはここが違う」と比較するのではなく、その違いが留学や仕事、人との関係にどのような影響を与えるのかを考えたことで、文化を知ることの難しさと面白さを感じた。

さらに、本会議で出会ったインド側の学生とのつながりは、会議が終わった後にも続いている。先日（9月の中旬ごろ）コルカタを訪れた際には、JISCで出会った友人とその家族に迎えていただき、観光だけでは分からない現地の生活や家族との時間を経験することができた。半年前には「インドについてもっと知りたい」と思っていただけだった自分が、実際にインドを訪れ、JISCで出会った人々と再会できたことは心の底から嬉しい。JISCで得た知識と出会いを一度きりの経験で終わらせず、これからも自分自身の興味を深めていきたい。

（５）滝川彩希

今回の会議を通しての感想は、大きく二つある。

一つ目は、積極性についてである。分科会で進捗報告のプレゼンを行った際、私は次に質問しようと考えて順番を待っていた。ところが、インドのメンバーは待つことなく、次々と手を挙げて発言していた。私は周りの空気を読みすぎてしまうところがあるため、この積極さはぜひ見習いたいと感じた。彼らは、やりたいこと

や目的があるとき、周囲の目を気にするのではなく、それを実現するためにできることを徹底して考え、行動しているように見えた。その姿勢はとても素敵だと思った。

実は、最初にインド大使館を訪問した際、私自身が積極的になれなかった経験がある。マリック大使とお話しした後の質疑の時間に、途中で質問が途切れてしまい、特に女子メンバーからはほとんど質問が出なかった。そのとき、大使から、もっと積極的に質問しようと促され、悔しい気持ちになった。この悔しさを自分の課題として意識し続けた結果、活動の終盤には、多くの場面で先陣を切って質問できるよう意識を変えることができた。

二つ目は、日本人メンバーと共に活動できたことの意義である。私はインドに留学した経験がある。現地で生活していた頃は、疑問を抱くこともなく自然に受け入れていたことがたくさんあった。しかし今回、インドの学生を迎え、日本人メンバーと語り合う中で、自分が当たり前だと思っていた点にこそ面白さがあるのだと、新たに気づかされる場面が何度もあった。同じ経験を持つ日本人メンバーがそばにいてくれたことは、私にとって大きな支えであった。さらに、日本人メンバーの行動力の速さなど、自分にはない強みを数多く発見でき、大変勉強になった。

今回の会議を通して、インドのメンバーからは、目的のために周囲を気にせず積極的に行動する姿勢を学んだ。日本人メンバーからは、身近な文化を新しい視点で見つめ直すきっかけと、行動力の高さを学んだ。この学びを、今後の学びや生活にも生かしていきたい。

（６） 麻島由香

私が今回、日本インド学生会議の実行委員に応募した理由は、留学先であるデリー大学での生活や、そこで出会った友人との関わりを通じて、インドという国を心から好きになったからである。留学中、友人や教授、寮母さんをはじめ、多くの方々から数え切れないほどの温かいもてなしを受けた。その際に抱いた感謝の気持ちを、今度は自分が学生会議に参加し、日本とインドの友情の懸け橋の一端を担うことで、少しでも恩返ししたいという思いから、活動に取り組んだ。

国際渉外局として活動し、インド側実行委員のメンバーと初めて顔を合わせる段階から、本会議の運営に携わった。本会議の開始前には、リクルート活動やVISA書類の準備、定例会に向けた度重なるミーティングなどが重なり、自身の生活や学業との両立に悩むこともあった。しかし、同じように多忙な日々を送りながらも、誠実に活動に向き合う志の高いメンバーと共に取り組む中で、何度も励まされ、最後まで走り抜くことができた。ここまで共に学生会議の成功を目指して努力を重ねてきたメンバーには、感謝と尊敬の念でいっぱいである。

インド側実行委員を迎え、本会議が始まってからも、数多くのハプニングや予期せぬ事態に直面した。しかし、そうした困難に直面したときこそ、国や文化の違いを越えて互いに励まし合い、意見を交わし、ミスを補い合う中で、メンバー同士の絆がより深まっていったように感じる。インドならではの人との距離感やチームとしてのあり方、議論の進め方、時間に対する感覚など、さまざまな場面で文化の違いを感じることがあった。しかし、そうした違いがあったからこそ、相手の価値観や文化を理解しようとする姿勢を、互いに育むことができたのではないかと思う。

また、インド側実行委員の一人ひとりから伝わってくる日本への強い興味や関心に触れるたびに、私自身が彼らから温かい思いを受け取っているような感覚になり、とても幸せな二週間を過ごすことができた。二週

間という短い期間であったが、インド側実行委員のメンバーとは、帰国後も電話やメッセージを通じて近況を共有している。これからもつながっていたいと心から思える仲間に出会えたことは、今回の学生会議を通じて得たかけがえのない財産の一つである。

第30期という節目を迎える日本インド学生会議に、実行委員としてその運営に携わることができたこと、そしてこのような貴重な機会をいただけたことに、心から感謝している。この二週間で得た経験や出会いをここで終わらせるのではなく、今後も日印両国の相互理解と友好関係の発展に少しでも貢献できるよう、努力を重ねていきたい。

（７）湯屋利里子

私は将来、国際平和への貢献を志している。その思いの原点は、高校2年時に経験したフランス留学で難民の親友ができたことだ。現地での対話を通して、自分がどれほど先入観にとらわれていたかに気づかされ、同時にその先入観こそが対立の要因になり得るのではないかと考えるようになった。平和への第一歩は「対話」にある。そう確信した私は、自分にとって未知の国であったインドの学生と対話し、自身の固定観念を打ち破るとともに、国際平和を目指す人間として一歩成長したいと考え本学生会議に応募した。

活動期間中は国際渉外局として、インド人学生のビザ取得サポートや日印交流会の企画・運営、双方をつなぐ橋渡し役を担当した。初めての業務に加え、文化や価値観の違いに戸惑うこともあったが、WhatsAppなどを通じた丁寧な連絡を重ねることで、少しずつ確かな信頼関係を築くことができた。本会議が近づく頃には、彼らと対面で会える日を心から楽しみにしている自分がいた。

本会議では、お互いの意見を真正面からぶつけ合った。インドの学生たちは自分の意見をはっきりと主張するため、当初はその熱量に圧倒される場面もあった。しかし、彼らは「あなたはどう思う？」と常にこちらの考えにも耳を傾け、分科会ではドキュメントにまとめて役割を整理するなど、誰も取り残さないディスカッションを徹底してくれた。初対面の印象だけで相手を決めつけず、対話を重ねることの大切さを実感するとともに、真摯に向き合ってくれた彼らに心から感謝している。また、日本の戦争観や国際関係についての深い質問を受ける機会もあり、彼らが日本をどのように捉えているかという新鮮な視点にも触れることができた。このような議論の場だけではなく、観光を通じても絆を深めることができた。見慣れた街もインドの学生たちと歩くことで新鮮な気持ちで楽しむことができ、食事やショッピングといった何気ない日常の場面からも豊かな文化の違いを感じ取ることができた。

ここで築いた仲間との絆は、これからの人生における一生の財産だ。将来、国際平和に携わる中で壁にぶつかることもあると思うが、共に過ごした彼らの顔が目に浮かぶ限り、決して諦めずに進んでいきたい。この貴重な経験は、これから先の私を支え続ける大きな糧になると確信している。

最後に、温かい仲間に囲まれ、最後まで駆け抜けることができたことに心より感謝したい。今回の経験を今後の学びと活動に還元できるよう、これからも精進していく。

（８）松井彩加

私はインドを訪れたこともなく、ただ自分のなかにあるインドへの好奇心でこの第30期日本インド学生会議に参加した。このような学生団体の経験は初めてであり、無知なことが多くあったが、心強いメンバーに出会えたことでこの会議を終えることができたと思う。心より感謝申し上げたい。

この本会議期間中の日々は私にとって本当に貴重なものだった。毎日毎日が本当に濃いもので、学びのある楽しい日々だった。日本人が中心となる日本と多数の文化、民族が混ざるインドではお互いに異なることが多く、インド人メンバーによっても意見が違うのでメンバーそれぞれと話すことが本当に興味深かった。一緒に過ごしていく中でお互いの文化を自然と取り入れているのを実感したときは、こうしてお互いの文化を尊重しているのを感じ心が揺さぶられた。そして、日本のことが大好きで存分に日本を感じようとしているインド側メンバーをみて大きな喜びを感じたのと共に、自分自身も日本の良さを更に感じられた。また、自分が説明できないことも多くあり勉強不足も感じた。

生まれた国・環境が違うということは、生きてきた世界が異なり互いを理解することが難しいように感じるが、お互いの国への好奇心そして人の優しさが絡まりあうことで素晴らしい関係を築き上げることができた。

今回の会議がこれからの日本とインドの未来の架け橋の一歩になったと思う。

（９）インド人学生からのメッセージ

It was a privilege to serve as the Student Communicator for the Indian delegation at the 30th India-Japan Students' Conference. While this marked my second year participating, stepping into the communicator role represented a significant expansion of my responsibilities. Though initially challenging, navigating the demands of the position throughout the conference proved deeply rewarding. The intensive 12-day program in Japan offered profound personal and leadership growth. Our contingent of 10 students from Kolkata, 2 from Chennai, and 1 from Delhi convened in Tokyo, where we were greeted by a delegation of 8 Japanese students selected from across Japan. Shaped by the theme "Beyond Borders: Japanese and Indian Youth Perspectives on Coexistence and Careers", our collaboration became a learning process about how ideas may be woven together across contexts, cultures, and experiences.

I wouldn't even be writing this message today if it weren't for the immense trust and belief that Nigam Sensei, Partha Sensei, the NKKS, and the Dōsōkai placed in me by entrusting me with the duties of the Communicator. Without their guidance and encouragement, I wouldn't have had the chance to challenge myself this way. Of course, two weeks cannot suffice to fully experience any country, but within these twelve days, we gathered a variety of experiences that will be etched in our memories forever.
I must also express my sincere thanks to the Japanese Student President, Yuzuki-san, and the entire Japanese team. Organising the conference in Japan, despite the team members living far apart and various logistical hurdles, was indeed challenging. Yet, the Japanese team's dedication and meticulous planning ensured that we, as Indian participants, had

an unforgettable experience. The ‘omotenashi’ they showed us was nothing short of remarkable, and for that, I am truly thankful.

Not only did we travel to a different prefecture (Hamamatsu City, Shizuoka) and stay there overnight, but we also experienced home visits in various parts of Tokyo and its outskirts, as well as local sightseeing – including Kamakura, Asakusa, Akihabara, Shibuya, Shinjuku, and Yasukuni Shrine, to name a few. We even got the chance to visit the Yokohama India Centre and meet up with Keio University students and the Suzuki employees at Hamamatsu. As is often the case, there were certain challenges when two different cultures meet, but overcoming these minor issues taught us greater lessons, which I think is the most rewarding aspect of the conference.

I am equally grateful to Aditya-san, the Indian Student President, whose steady leadership and clear vision anchored our delegation throughout the conference. Collaborating closely with him and the other team leads made facing every challenge a shared, rewarding effort. To my fellow teammates: thank you for your boundless energy, your openness, and your constant support. This conference was a success because of each one of you, and I couldn't be prouder of what we built together.

To the next Communicator stepping into these shoes: welcome the unpredictable moments with an open mind. The responsibility is demanding, but the personal growth and perspectives you gain are unmatched. Back your team, lean on their strengths, and savour every single step.

Anurag Das
Communicator
30th India-Japan Students’ Conference

第６章　おわりに

1. 謝辞

本年度の日本インド学生会議が無事に終了し、その成果を報告書としてお届けできますことを、実行委員一同大きな喜びとともにご報告申し上げます。学生主体の活動として準備・運営を進めてまいりましたが、各方面からの専門的なご指導と惜しみないお力添えにより、充実した学びと交流の場を実現することができました。

また、本事業の趣旨にご賛同くださり、多大なるご尽力をお寄せいただいたすべての関係者の皆様に、実行委員一同、深く感謝申し上げます。皆様の支えがあってこそ、第30期日本インド学生会議を無事に締めくくることができました。

本会議で得た経験と学びを糧に、次世代へとこの活動を継承し、日印両国の若者が共に成長できる場をより一層発展させていく所存です。今後とも変わらぬご指導とご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2026年10月

第30期日本インド学生会議　実行委員一同

2. 日本側副実行委員長挨拶

第30期日本インド学生会議の開催にあたり、ご支援・ご協力を賜りましたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。皆様のお力添えにより、本会議を無事に終え、こうして活動報告書をお届けできますことを、大変嬉しく思います。

本年度は、助成金やご後援に加え、個人の皆様からのご協賛、企業・団体の皆様からの多大なるご支援をいただきました。副実行委員長兼財務局として運営に携わる中で、学生が主体となって活動できる背景には、その挑戦を支えてくださる多くの方々の存在があることを、改めて実感いたしました。私たちの活動にご理解を寄せ、開催を後押ししてくださった皆様に、深く感謝申し上げます。

今期は、企業や自治体、大使館、学校、神社など、10か所以上の訪問先でお話を伺う機会に恵まれました。また、ホームビジットでは、受け入れ家庭の皆様にインド側の学生を温かく迎えていただきました。お忙しい中、学生のために時間を割き、それぞれの現場での経験や思いを伝えてくださったことは、私たちが日印の共生や働き方を考える上で、貴重な学びとなりました。

こうした訪問に加え、計8回の分科会議論を行った今期の本会議は、連日さまざまな活動が続く、密度の高い日程となりました。その一つひとつに向き合い、ともに会議をつくり上げてくれたメンバーの皆さんにも、心から感謝しています。日印両国の学生、計21名で過ごした濃密な時間は、皆さんの協力があってこそ実現できたものでした。

本会議の大きな意義は、訪問や議論の時間だけでなく、日々の生活を共にすることにもあると感じています。国立オリンピック記念青少年総合センターで寝食を共にし、同じ場所へ出かけ、顔を合わせて言葉を交わす。その積み重ねの中で、相手は「異なる国から来た学生」から、一緒に過ごす身近な仲間になって

いきました。議論の場では伝えきれなかった考えを話したり、何気ない会話から相手の人柄を知ったりすることも、対面で時間を共にするからこそ得られる経験だったと思います。

日本インド学生会議が30年にわたり続いてきた背景には、活動を築いてこられた先輩方と、それを支えてくださった多くの皆様のご尽力があります。そして毎年、新たな学生や受け入れ先の皆様との出会いが加わり、ご縁が次の活動へとつながっています。前期と今期の会議を通じて、そのつながりの広さと温かさに触れ、日印の友好が人と人との関係から広がっていく様子を、自分の目で見ることができたことを嬉しく思います。

第30期の全員が、もう一度同じ場所に集まることは、簡単ではないかもしれません。それでも、この活動に参加する以前は、海を越えたはるか遠い国だと感じていたインドが、今では大切な仲間のいる身近な国になりました。インドとの関わりを通じて出会えた人々とのご縁を、これからも大切にしていきたいと思います。

また、この活動で得た経験をより多くの方々に伝え、学生の立場から日本とインドの関係に触れ、関心を持つきっかけを広げていきたいと考えています。本報告書が、私たちの学びとともに、日本インド学生会議を支えてくださる皆様の思いをお伝えするものとなれば幸いです。

改めまして、第30期日本インド学生会議に関わってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

第30期日本インド学生会議　副実行委員長

齋藤良美

3. 編集後記

閉会から早くも一ヶ月が経過し、少しずつ秋の涼しさを感じる季節となりました。本会議で過ごした時間を振り返ると、準備から本会議までの一つひとつの出来事が、今でも鮮明に思い出されます。この第30期日本インド学生会議が、参加したすべての学生にとって、これから先も心に残り続ける大切な経験となっていれば幸いです。

今期は、昨年度から継続して参加した委員が一名という状況の中、多くのメンバーが初めてJISCに携わるところから活動が始まりました。分からないことや戸惑うことも多くありましたが、互いに意見を出し合い、支え合いながら準備を進めてまいりました。約半年間の活動を通して、日印それぞれの視点に触れながら学びを深めることができたこと、そして何より、国を越えて大切な仲間と出会えたことは、私にとって大きな財産となりました。

そして、本会議を終えてからも、JISCを通じて生まれたつながりは続いています。先日、私はインドのコルカタを訪れ、本会議で出会ったインド側の学生たちと再会しました。滞在中は日程のすべてを一緒に過ごし、観光だけではなく、現地での生活や文化にも触れることができました。中でも、友人のご家族が私を温かく家に迎え入れてくださり、ご家族の皆さんと一緒に食事をしたり、時間を過ごしたりできたことは、特に心に残っています。そして、こうした出会いを重ねる中で、インドという国が持つ人の温かさや魅力を、以前よりも身近に感じるようになりました。

本会議で出会った仲間と、今度はインドの地で同じ時間を過ごすことができたことは、本会議が終わった後だからこそ実感できた、つながりの大切さでもあり、私にとって一生忘れることのできない、かけがえのな

い思い出となりました。JISCでの経験をきっかけに生まれたこのつながりを、これからも大切にしていきたいと思います。

最後になりましたが、第30期日本インド学生会議を無事に終えることができましたのは、これまでご支援、ご協力くださった多くの皆様のお力添えがあったからこそです。実行委員一同、心より深く感謝申し上げます。この半年間で得た学びや出会いをそれぞれのこれからにつなげるとともに、これからも日印両国の学生同士の交流が続いていくことを願っております。

国内渉外局　今井千遥

4. 協力（順不同、敬称略）

【後援】

外務省
在日インド大使館
公益財団法人日印協会
独立行政法人日本貿易振興機構（JETRO)
独立行政法人国際協力機構（JICA）
独立行政法人国際交流基金
日本政府観光局（JNTO）

【助成】

公益財団法人電通育英会
公益財団法人双日国際交流財団
公益財団法人三菱UFJ国際財団

【協賛】

株式会社プレジィール
スズキ株式会社
住友不動産株式会社
（一社）尚友倶楽部
黒崎播磨株式会社　代表取締役社長　江川和宏
西村あさひ法律事務所・外国法共同事業　鈴木多恵子（t.suzuki@plus.nishimura.com）
細井千秋
櫻井秀武
鈴木美穂
細見竜介
医療法人社団育健会　せんげん台東口歯科
岡崎菜々美
髙橋美都子
藤嵜政子
泉周作
勝田友治

加藤敦
秦智
菱沼智子
石原淳也
及川澄子
嘉藤 龍雄
岸本和也
酒井雪夫
坂田かほる
佐藤理子
鈴木盛太
瀬口敦
谷口透
中村勝
樋笠尭士
松田博和
ヨシダヒロミ
和田幸成

【ご協力いただいた皆様】

Nihongo Kaiwa Kyookai Society (NKKS)
ABK-AOTS DŌSŌKAI チェンナイ
日印合同同窓会（Students' Conference DŌSŌKAI)
JISC OB・OG会
JISC顧問　広瀬公巳先生（近畿大学国際学部国際学科 教授）
JISC創設者/アドバイザー　長浜浩子先生
公益財団法人日印協会 理事長 齋木昭隆 様
公益財団法人日印協会 事務局の皆様
秦智 様
安戸乃彩 様
石田玲那様（日印合同同窓会コアメンバー）
磯貝富夫 様
北爪裕子様
横浜インドセンター
株式会社サンウェル

公益財団法人 横浜市国際交流協会
ナマステ江戸川区　近藤祐市様
Tokyo International Public School (TIPS)
靖國神社　大塚海夫宮司
慶應義塾大学 国際関係会 NEXT
スズキ株式会社
浜松市産業部 労働政策課
公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）
豊原智恵 様
菱沼智子 様
Supratik Sil Roy 様
国立オリンピック記念青少年総合センター

第30期日本インド学生会議 日本側活動報告書

2026年10月17日　発行
編集　第30期日本インド学生会議実行委員会
発行　日本インド学生会議
印刷・製本　ラクスル株式会社

この書籍に関するお問い合わせ先
公式HP
https://www.japan-india-student-conference.org/contact
メールアドレス
japan.india.student.conference@gmail.com

© Japan-India Student Conference, 2026
本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。